して、彼等の神をお宥めあり、千代に八千代に、御世の榮の增すやう、子々孫々も、その餘慶に預るやう、お祈りあらせらるゝ方が宜しいと存じまする。』

アグリッパ王は、その冴えない眼に、半嘲い・半愛づる如な表情を湛へて、女王の美しい、赤らめた顏を見詰めながら、『これ、彼等が日頃御身に云つて聞かした事は、一體何事であるか？』と問ふた。女王は興奮の態で、その小い手を握りながら、

『ナザレ人と稱する惡徒がありまして、天の大御神を瀆し、剩さへ不絕エルサレムに擾を起しまする。彼の徒輩は、死んだ人間……磔刑にされた罪人を拜みまして、その人間は、今も猶ほ活きて居て、王位を奪ふ所存であろ、などゝ公言致して居りまする。』

と答へた。王は輕く受流して應へた、

『磔刑にされた罪人が、王位を覬覦するなんて、夫れや更に怖るゝに當らぬわい。我が敵は皆此の死んだすザレ人の通りであるとしても、その儀なら、心配は全く無用です。余は既にその惡徒を撲滅する心算で居るのだが、夫と云ふのも、エルサレムの欄干を取らんが爲であつて、外に何の理由もない。是は彼の集議所の連中に取入るのに、安價くて容易い手段であるからね。』

アグリッパ王は、斯くも無造作に、此件を輕視したものゝ、內々侍從のプラスタスと云ふ者を召して、エルサレムの町々の中で、主にナザレ人の集つて居た所へ派遣することにし、此樣に命令した、

『王の侍臣と分らないやうな扮裝で、密つと行つて、彼のナザレ人とは、何種な人間であるか、何んな武器を有つて居るか、その人數は幾何であるか、仔細に調査した上直に歸つて、その見た儘の事を報告せい。』

二時間も經つてから、プラスタスが歸つて來て、『王樣よ、行つて參りました、御命を果しましてムりまする、』と云うと、アグリッパ王は、焦燥しげに、顏を顰めながら、『夫では如何であつたか？無駄口利かずに話せい、』と詰め問ふた。

『ナザレ人は、弱い民衆でムりまして、その數は多からず、武裝は致して居りませぬ。彼等は殺

された罪人を忘れないで、之を神として崇める事の外に、何一つその同胞と違つた所は厶りませぬ。』

『その罪人其者の形跡らしいものに出喰はしたか？彼等は彼が磔殺後も生存して居た、などゝ取止めもない話をするのだが。』

『否夫は寧ろ、その罪人が死より甦生つた、と申す事で厶りませう。私は彼等の首領株の一人ヤコブと申す者を尋れ、自分は連中に加入しよう、と思つて居る者だと欺きまして、彼に彼等の信仰に關する幾多の疑問を質しまして厶りまする。』

プラスタスが、意地悪げな微笑を洩して、斯く答へると、アグリッパ王は、滿足さうに、『獅は流石に拔目の無い男だの、而て彼が……』と云つた。

『彼の申す所に據りますると、耶蘇なる者は、預言者の預言した王であつて、是迄に二人と無い、唯一の罪咎の無い聖い人物であつたにも拘らず、イスラエルに棄られ、且つ磔殺されたさうで厶りまする。而て又耶蘇は、實際死で葬られたけれども、三日目に甦へつて、一ケ月以上も、彼徒の中の多くの者に現はれ、其後天に昇つて、見えず成つた、と申す事で厶りまする。』

王は嘲笑ひながら、聲高に、『全く本當らしい話だ！』と云つた。夫から鋭く、『野郎共は、其後も矢張り罪人を見た、と言張るのか？』と言添へた。プラスタスは、中々に機敏な男で、斯く問ふた王の胸中に、何うやら實際の不安の念が潜んで居たのを、夫と悟つて答へた、

『お尋れの儀は、私が彼に質した所で厶りまする。而て彼は、其後は見なんだ、と私に確言致しました。が彼は矢張り、彼等は耶蘇と不斷の交通をして居て、暫くすれば耶蘇は、大なる能力と榮光とを以て、此世に歸り來り、全世界を支配するやうに成る、と主張しまする。』

『容赦は成らぬぞ！其樣な囈語は……狂氣の沙汰とは云ふものゝ……大逆罪に勝るとも劣りはしない、不屈者奴、目に見せて呉れようぞ。彼等を幾人も幾人も、羅馬の十字架につけてやらう……彼等は斯うまでして、其主の跡を追つて見るがよい。夫から殘餘の奴共が、早速その狂愚の沙汰を忘れるか、何うか、試して見よう、若し忘れないとあれば、我國に有り餘る材木を十字架にして

彼等を皆殺してやるまでの事さ。』

アグリッパ王が、暴怒の餘り、斯く絶叫すると、プラスタスは、宥める如にして云つた、

『彼等は唯空中に樓閣を描く、狂者でムりまして、無能無力の徒たるに過ぎませぬ。詰らぬ事に御心勞遊ばされどころでなく、カイザリヤには……出過ぎた申條でムりますが……親しく御臨幸ありて、御監視遊ばさるべき御要件が、數々ムります。』

『卿の言ふ通りだ。畢竟是ば厄介な問題で、今彼是と手出すべきでなからう、い、もつと都合の好い時節を待つとしよう。』

當日王は、カイザリヤに向つて出發した。カイザリヤで、王者の榮華と、異教徒の快樂とに取圍まれて居る間に、王は何時しか、ナザレの耶蘇の如な人間が、曾て此世に在つたか何うか、忘れて了つた。そこで王が、エルサレムに巡幸することは、極稀れとなつて、偶に巡幸しても、エルサレムを難攻不落の堅城としようとて、王が自ら起工した、築城の事に係はるのが、主なる要件であつ

た。一方は集議所の議員等は、王がカイザリヤの御殿で、異教徒の振舞なして居るらしい、と漠然たる噂さを耳にして、折々はぶつ〳〵云つたけれど、根限り忍耐して、時節の到來を待つて居た。

アグリッパ王の御世の四年目に、エルサレムで、一般に流布された噂に據ると、王はパリタスと、カイザリヤとの異教民の遊樂のために、劇場を建築した計りか、自ら屢々潔からぬ異邦人を伴ふて、觀覽に出掛た、と云ふ事であり、剩に王は親しく、カイザリヤ五十年祭の祭主となつて、ゲラウデアス帝を祝せんがために、異教の神々に犧牲を供へた、と云ふ事であつた。

『アブラハムの裔なる諸君、是は忍び難い事であります。一體ヘロデ王は、カイザリヤでは、律法を破り、律法を瀆す異邦人と成るのに、エルサレムでは、律法を守るイスラエル人の眞似をすると云ふ如な、其樣な藝道は演りかねない人だ、と疾つく分つて居まして、今日迄は此の憎む可き所行を默許して來た譯ですが、併し寛怒にも自ら際限の有るもので、その際限と云ふのも、實に吾等が極めたものでなく、王が足下に蹂躪つた、永遠の神エホバの律法によつて定められたものであり

ます。然れば王は純然たる異邦人と視て、聖き神殿に蹈入ることを遠慮して貰つて、之を瀆させないやうにしようぢやありませんか。』

熱心なパリサイ人で、其名をシモンと云ふ人が、集議所の眞中に突立つて、斯くの如く絶叫したが出席議員中誰一人、眞理を述た、と云ふを敢てする者がなかつたので、折角の誇々の議論も、默々たる議場に葬られて了つた。之がためシモンは、直にカイザリヤに、王の御前にと召喚された。

アグリッパ王は、此の猶太人をば、劇場内に連れ込んで、命じて云ふことには、

『是から我側に侍つて、觀せて遣る丈の事を篤と視て、此所で演つてる事で、何かモーセの律法に背いて居る事があるか、何うか聞かして呉れえ。卿は非常に熱心な人で、エルサレム中で、一等の律法通だ、とかれ〴〵聞及んで居るから、後學のために、卿の智慧を借りたいのだ。』

演劇は死刑の宣告を受た罪人二三百名が、必死の格闘を演る活劇であつたので、シモンは、之を目擊して、喫驚仰天、ぶる〳〵と震へた。王は猶太人が、眞蒼に成つて、戰慄して居るのを見、さも

心地好げに微笑して云つた、

『卿の觀る通り、律法と快樂とは、しつくりと符合してるぢやないかれ。卿の眼に見る、此の殺し合つてる者は、皆種々の罪惡を犯した、死罪に當る可き者で、中に虐殺者もあり、竊盜や剽盜もあり、甚しきは王の尊嚴と權威とを瀆した逆徒もあるのだ。偖之を觀れば、無罪の者が滿足する計りか、無法な者の誠ともなるのだが、モーセは、此樣な結構な觀物にも反對すると思ふか？』

シモンは、齒を戛々云はせながら、王は至上の賢君であると云つた上に、彼が目擊した物には、何一つ律法に反した所が無かつたと答へた。そこでアグリッパ王は、彼に粗末な恩物を取らせて、深切げに暇を遣つた（ヂョセフアス古事記十九卷四章）。

『罪人共の活劇を觀るよりも、彼の野耶の顏を見る方が、遙に面白い觀物であつたな。』

王はけら〳〵笑つて、斯く云つたが、王の上に、依然として制抑を利して居た女王サイプロスは、エルサレムに歸つて、集議所の議員と和睦するやうに、と王に懇願した。夫から心配げに云ふことに

は、

『彼のシモンには、見ん事お勝ち遊ばしましたかなれど、私に能く分つて居まするが、彼の聖さ人々は、中々に聞かぬ氣の連中で厶りますから、彼等に下手をなさらぬやう御用心遊ばしまし。』

アグリッパ王は、『旨く取繕ひをしよう、』と云つた。夫から直にエルサレムに歸り、集議所の重立を召して、重要の件につき、彼等と協議した。

翌日の事、ナザレ人の首領の一人なるヤコブが、捕へられて、獄中で首を刎られた。エルサレムは、此の驚く可き新聞で動よめいて居た。

廿四　強き救主

エルサレムに於ては、踰越の節の週間も、將に終はらうとしてるのに、聖都に充滿した民衆の群は歸途に就かうとする氣色だに見せなんだ。

『明日はナザレ人のペテロが、磔刑にさるゝさうですから、私は明後日まで、エルサレムに滞在することにします。』

とキリキヤから來た猶太人が、レバノンから來た友人に云うと、相手は眉毛を吊上げながら云つた、

『ペテロが、磔刑にされます？』

『人々の噂さは、左樣なんです、さう噂さして居ますよ。彼のガリラヤ人の磔刑さ、殆んど同樣に、大した觀物でせうぜ。有難い事には、私は彼の時も見物しました。』

キリキヤかち來た男は、さも滿足さうに、口髭を撫でながら、語を續けた、

『是でナザレ人も、愈々末路でせうぜ、結構な事です。異邦人に敎へる事の外に、彼等に是ぞと云つて別に、惡い事の無い事は分つて居ます、がその一事が中々に惡い事でありまして、吾々に聖別された民……聖い民です。而て何時までも左樣でなくちやならないので、左なくば吾々は無慘にも、地上より亡ぼされて了ひます。吾々の聖別された事は、エホバが吾々の爲に定め給ふた救拯であり

ますかられ。』

相手は法悦の表情をして、目を閉りながら、『エホバの御名は、高く且つ讃むべきかなです！』と答へた。程經て後彼は、又目を開けて、鋼鐵の光る如な眼光を相手に浴せ掛けて云つた、

『昨日の事、私は彼のナザレ人の一人に、小麥五十俵を賣渡す契約をしましたが、彼は手附金も呉れないで、唯明日來い、と云ひましたぜ。』

相手は樂々と、肩を竦めながら云つた、

『アブラハムの裔ともあらう者が、君は隨分と馬鹿ですね。若し未だ小麥を渡してないとすれば、責てもの仕合せです。夫はヘレナ（註を見よ）と云ふ、異邦人の婦人に賣りなさい、價を倍にして、買つて呉れる事は受合です。彼女は聖都の饑饉を救はう、と云ふ計畫を立て居ますから。彼女は左樣して、自分の罪を滅し、全能の神の恩惠を贖はうとして居るのです：勿體ない、其樣な事は、異邦人には出來ない事であります。』

『夫は主エホバの宣ふた所です、御言の如く成らなくては！』

【註】ヘレナは、アッシリヤのアデヤベネ州の女王であつて、當時エルサレムに住んで居た。彼女は夙に猶太教に改宗した者である上に、巨萬の富を有する者であつたので、折柄の飢饉に際し、窮民救濟のために、極力活動をして居たのである。

兩人が斯く會話つて居た、と丁度同じ時刻に、エルサレムの別の方面に於て、彼等のと同じ言が、余程違つた意味で、語り交されて居た。即ち踰越の節の、此の最後の晩の事、ヨハネの母マリヤの家に於ては、耶蘇の弟子の一團が集合して、その席には、飢饉に惱む兄弟等を慰さめに來た、サウロとバルナバも居た。此の兩人は、アンテオケで、新に回心した希臘人より、エルサレムの母教會に贈るべき、施濟物を携へて來たのであつた。併し數ヶ月間も打續いた飢饉は、大した苦難であつたが、彼等は是さへも、去にし日の事變のために、忘れて了つて居た。耶蘇の愛する弟子と云はれた、その弟子の兄弟であり、最初に主より召されて、從つた者の一人であり、又實に撰ばれて、神々しい變貌の

奇象と、之にも劣らで神聖なる、ゲツセマネの苦惱さを目擊した者の一人であつたヤコブは、突然捕へられて殺され、後に遺つた者共は、彼の亡くなつた事を確實と思はれない場合であつた。剩さへ今はペテロも獄に伏して、彼等の渴望せる異象も及ばぬ、目に見えざる世界から、手が觸られる實際の救助でも來ないなら、その怖しい死刑の屈辱を受るのも、今夜か明日か、と待つて居たのである。

此の悲しい踰越の節の週……彼等が甘若い思出に、打忘れる暇もなかつた、彼の週にも劣らで悲しい、此の週の日毎夜毎、彼等は、ゴジヤウ頭上の髮一筋も、天父の御目を離れて、空しく落つるものでない、と確言なし給ふた主に、熱烈雲の蒸す如な祈禱を獻げた。そが中に、兄弟を奪られたヨハネの云ふこ

とには、

『彼は吾々を棄て、係りが無くなつたのではありませぬ。主は現に彼の最後の晩餐の席上で、「すべて爾曹を殺す者が、自ら神に事へる、と思う時が來るぞ、」と申されて、今日の事を預言なし給ふたのぢやありませんか。私の兄弟は、今天父の家に行つて、天父と偕に幸にして居ます。而て又ペテロの事もですが、「誠に實に爾に告ん、爾幼き時、自ら帶し、意に任せて遊行きぬ。老いては手を伸て、人爾を束り、意に欲はざる所に曳き至らん、」と主の宣ふた預言が、今將に成らうとして居るのですから、吾等は主が萬事を宜く成し給ふと心得て、此の苦難をも忍ばなければなりませぬ。』

衆皆ヨハネの言に服して、厭くるまでも忍んだけれども、益々熱心に神に祈つた。夫と云ふのも、主はヨハネの示した御言ばかりでなく、『若し爾曹何事にても、我名に託りて求はゞ我之を成ん、』との御約束をなされたし。又、『我名の爲に二三人の集れる所には、我も其中に居る、』と宣ふたし、且つ又、『爾曹の中二人の者、地に於て心を合せ、何事にても求めば、天に在す我父は、彼等の爲に之を成し給ふべし、』と宣ふたからである。

彼等が斯の如くに、神に懇求して居た傍ら、ペテロは、ヘロデ王の獄中で、十六人の兵卒に守られ、二個の鎖に繫れた上に、その鎖を繫いだ二人の兵卒の間に挾まれて寢て居た。彼が此樣なに嚴重に警戒されたのも、實にペテロとヨハネが、不思議にも獄屋より脫した事があるが、是は天使が彼等を救

つたのだ、と云ふ噂が、民間に流布するやうに成つた、とヘロデ王が、猶太人より聞いた爲めである。

其時王は、冷笑しながら、唇を尖らして云つた、

『ヤコブの時だつて、その生命を助けようとて、天使が刑吏の劍の邪間する如な事はなかつた。天使にしろ、惡魔にしろ、今度の野郎の鎖を解かしでもしようものなら、その警護者の生命は無いぞ。是は朕の言で、之に相違はないぞ。』

然れば委細の命を受て、警護の任に當つた兵卒共は、自分の生命の惜しさに、精一杯忠實に、任されたペテロを警護した。夫と云ふのも、典獄が拔りなく、部下に王の命を傳へたからである。

ペテロは、七日七夜の間も、死の陰の谷に宿つて、彼と同じく、止なく之に宿つた幾多の者の經驗した如に、此所は不可思議な所であつて、神と神の小羊との位の邊より、湧きて流るゝ生命の河の清流が、天國の無限境と、此の狹隘なる谷間とを隔つる濁流と混じ合つて、渕々音もせずに流れて居る、と視たのである。そこで彼は、七日目の晩となると、一夜を明せば、必ず殺さるゝ身と承知しつゝも、待つ者は唯死ばかりでなく、贖はれて天に住める者の凱歌も聽かれよう、小羊の血にて潔められた禮服も着られよう、何物も及ばぬ、愛する主の御顏が、恍惚たる異象の中に拜まれもしようなどゝ、別に有難い待つ者のあるを知つて、番兵の警固の中に、晏如として寢られたのである。斯て彼は夢寐の裡に、其日の事を思ひ續けた。思想は思想に聯れて、神々しい美しさの人影、〻、さら〳〵と擦れ交ふ天使の羽衣、嚠喨たる天樂の妙調、六合を照す靈光の輝きなど、曇りても榮ある想像に念じ入つた。

突然異象が明瞭りとしたかと思へば、天衣飜ふた神の使者は、天降り來て、ペテロの側に立ち、命令の聲かけて、『速に起て！』と云つた。彼が驚いて起てば、械はその四肢より落ちた。『帶を結びて、鞋を穿け、』と又も耳語く天使の命に、彼は再び從つたものゝ、獨り心に思つた、

『眞にも、此の異象の榮光によつて、此上も無い慰藉を得たが、最早間近く成つた、未來の世の豫味をして居るのだな。』

天使は出立たうとする氣色を見せて、向き直りながら、『外套を引掛けて尾いて來い、』と今一度彼に

命じた。ペテロは、矢張心に訝りつゝも、天使に尾いて行つた。

兩者はやがて街路に出た。天使がペテロの案内して、ちら〳〵と靜に飛んで行つた時に、その總身より照出る白い光輝は、塵芥だらけの敷石の上に、鮮明な光明を射した。馴れた都の大路小路、折れつ曲りつ、兩者が歩む途の上に、暗中朦朧と見ゆるは黑金の大門で、之を潛れば都の內部に這入られるのである。不思議や、天使が靈光の一射に、此門の大月は、音も立てずに開いた。天使は先に之を潛り、ペテロは、事の愈々奇なるを見て、眩惑しながら尾して行つた。

『我は眠つてるな、屹度眠つてる。今見て居る事は、唯夜の幻想だわい。でも街路の石には、自分の足音がするし……向には雄鷄が鳴いて居る。あゝ我主、我主！』

ペテロは、稍聲を高くして斯く云つた。夫から彼は、惱みつ泣きつ、兩手に顏を伏せた。折柄小喇叭の聲が、勇ましく響いた、一度、二度、三度、やがて微に虛空を縫ふて反響したかと思へば、天地は元の寂莫に還つた。彼は潛然たる涙拭ひも敢すに、窶れ果た顏を擡げて、四方を見廻して見ると、

天使は既に去つて跡形もない、が天を仰ぐと、月一輪、慨けさてか、雲より出て雲に入り、眠りては疊り、疊りては眠り、蒼然として彼の路上を照した。向に見ゆるは、ヨハネの家、燈火微に照りてちら〳〵、戸は半分開けてあつた。ペテロは、困惑の中にも、其眼を撫でながら、『彼等は何故起きてるだらう？』と自ら問ふた。

『多分誰か病氣して居るな。それでも我は眠つて居るか知ら。否……否、是は夢ぢやない、主が御使者を賜ふて、我をヘロデ王の手より救つて下さつたのだ。我は救はれた……救はれたのだ。』

斯て差返す生命の潮が、彼の脈管に湧いて流るゝやうに成ると、彼は蹌けて行きて、其家の外門に立ち、どん〳〵と戸を叩いた。やがて躊躇ひつゝも、輕く運んで來る足の音を聞付けて、彼は恬靜に、『萬望開けて下さい、私です！』と云つた。

然れど下女は……戸を開けに來たのは、ローダと云ふ若い下女であつた……戸內の人々の許へ、喜んで馳せ歸り、嬉しさの餘りに、蒼白い頰をば、燈火の如に光らせながら、『ペテロ樣が、門外に來て

居らつしやいます！ペテロ樣が、戸を叩いてゐらつしやいます！』と喘ぎ〳〵叫んだ。が一同は餘りに老成であつた悲しさには、容易に下女の言を信じないで、『なあに、これ、御前は眠不足と悲哀さで、何うかしてゐるんだ、で左樣忘想つたのさ。』と云つた。彼等は七日の間も、自ら全能と信じた神の御手で、ペテロの救はるゝやうに、と祈り續けたのに、疑つて斯く云つたのである。實に若し天父が、唯吾等の信仰に應じてのみ、恩惠を施し給ふものとすれば、吾等の手に握る物は、誠に僅少となる譯であるが、幸にも神は、吾等の創造られた狀を知りて、之を忘れ給はないのである（詩篇百三〇十四）。

『否え、何うしてもペテロ樣ですよ、あの方の御聲でしたもの、私は能つく御聲を覺えてます！あれ、戸を叩いて居らつしやいます……ど、ん〳〵と叩いてよ、皆樣にはお聞えになりませんか？』

『すれば、ペテロの天使です。敵はヤコブを殺したと同じ樣に、又しても突然彼を殺しましたでせう。』

マリヤは、眼を拭ひながら、斯く云つた。然れどペテロは、猶も執拗く、ど、ん〳〵と戸を叩いて止めないので、一同は若しやと膝を立た。ヨハネは、『誰かの來て居ることは確實です、』と云つて、自ら廣く戸を開放した。ペテロは、一同の耳に馴れた、床しい聲で云つた、

『お怖れなさるな、私であります。無事に歸つて來ました、主は御使者の手で、私を獄中より連出して下さいました。が夜が明ると、捕まへらるゝかも分りませんから、緩りして居られませぬ。ヤコブ君（是は主の兄弟で、エルサレムの監督なる人であつて、前記のヤコブ：はない）を始め、其他の諸君へ宜しくお傳へ下さい。皆樣お心丈夫に、主は世の終までも、常に吾等と偕に居たまふのであります。』

廿五　因果覿面

寢殿の侍臣が、入念に敬禮をして、『猶太の議會より、總代が參りまして、王樣を御待ち申して居りまする、』と言上すると、アグリッパ王は、顰面して嚬いた、

『猶太の議會と云つたら、煩厭さい奴だ！朝も朝、こんな時間に來て、野耶共は何用があると云ふか？』

プラスタスは、『ナザレ人、ペテロに關する用向だ、と申して居りまする、』と答へた。彼は例によつて、主君と、宮城外の面倒な世間との間に立つて、程好い執成しの務を盡したのである。

『而てペテロが、如何致したのか？彼の惡徒奴は、今日殺してやるんだ、夫からカイザリヤに歸るんだがの。』

『彼等の申しまするには、ペテロは、脫獄致したさうで厶りまする、が果して然うださしましても、野耶は容易く……』

とプラスタスが、額に皺寄せて、詫入る如に云ふを、アグリッパ王は、尊大な身振しながら、彼の言を遮つて、『即刻猶太人を通せ、』と命じた。

集議所の總代が、王の御前に罷り出た時に、王は不愉快千萬だ、と云はぬ計りの口調で云つた、

『一體如何したの。卿等は多分、彼の四人の萬一に備へて置いた、我が折角の設備に、下手な干渉をしたんだらう、夫で野耶を逃し居つたな。』

『王樣、左樣の譯では厶りませぬ、御命令通りに、野耶は二人の兵卒の間に繫がれて、十六人の兵卒に警固しめられて居ましたが、今朝行つて見ますれば、桎梏は解けて了つて居りまして、右の始末で厶りました。萬々一王樣が、彼の哀願を聞召され、お仁慈を以て、斯の如くに御赦免に相成つたものとすれば、彼是申上るまでも厶りませぬ。』

アンナスの子が。斯く答へると、アグリッパ王は、憤懣の餘り、額の筋を立て詰問した、

『然らば卿等は、我に彼を赦す意志があつても、公然實行を能う爲ない如な者と我を視做して居るんだな。夫は怪しからぬ、卿は我を誤解して居る、我に誰が怖るゝ者があると思うか？』

總代の議員等は、默つて相互の面を見交すばかりで、誰一人答へようとする者がなかつた。王は夫と見て、稍聲色を和げて語を續けた、

『元來我が此事を企てたのは、エホバの御榮と、イスラエルの平和とを思ふためであるぞ。若しペテロが、當然受くべき罪の罰より逃れたとすれば、その衛兵を捕へて、彼等が怠慢の罪を問ふの外はない、早速處罰しなくちやならない。野郎共を曳立て來い。』

『王樣には、彼の囚人の逮捕方について、何等手段を御取り遊ばさらない御所存でムりまするか？民は皆聖き切望を以て、今日の此の日を待つて居りましたのでムりまするが。』

とヨナタンが、不興げに問ふに、アグリッパ王は、苦笑しながら云つた、

『エルサレムの住民が、聖潔を好む事は名物だな。一本の十字架の代りに、十六本を與へる譯だが彼等は夫で得心すまいか？彼の狹猾いナザレ人、ペテロの儀は、許可を與へるから、卿等の適當と思ふ手段で以て、探索するが可からう。我の事にすると、彼の野郎の所在よりも、一層つよ重大な要件のため、即ち不利顛遠征より還御遊ばされた、皇帝の凱旋の祝賀式に列せんがため、明日カイザリヤに參らんければならない。』

『王樣、衛兵は此所で御吟味遊ばさるゝのでムりまするが、但しは……』

『唯今此の場で、エルサレムの、最も聖き議會の、名譽ある議員の面前で。これ衛兵長、其方に預け置いた、大事の囚人を逃したのは、如何なる譯であるか？』

斯く話し掛けられた兵士は、喫驚仰天、腰を拔したらしく、吃り〳〵答へた、

『王樣、私は……私は、何うして彼樣な事に相成りましたのか、殆んど分りかねまする。十六人の者には、順々に交代をさせて、七日間と申すものは、一同一生懸命に番を致しました。囚人は靜穩しくして呉れまして、毫末の厄介もかけずに、頻りに神に祈禱を致しました。昨夜彼は早くから寢まして、私共は……』

兵士は磴と語を止めたが、『これ、すん〳〵申せえ、』と迫られて、憐れや彼は、額から淋漓と滴る汗を拭ひながら、『何うして彼樣な事に相成りましたか、私には分りませぬ、』と繰り返した。夫から又語を續けた、

『然し私共は、變な氣持で、うつら〳〵と昏睡の狀態に成りまして、氣が附いた頃には、囚……囚人は……居りませんでした。』

『其方共は、務めの場で眠り居つたな。でも、十六人中一人も目を覺して、王の命を守れなかつたとは、何たる事ぞ。』

怖しい語調で、王に責め立られて、兵士はもう是までと、絶望の餘り、度胸を据えて答へた、

『王樣、私共はお定りの酸い酒の外には、別に何の酒も飲みませんでした。私は死を覺悟して申上げまする、私は王樣の御言葉を忘れたのでゝムりませぬ。親の魂により、また神々によりて、誓言致しまするが、彼の囚人が、その桎梏を解かれたのは、何等血肉の力によりてゝなく、彼の祈禱を聽き給ふた、あの不思議な神の力のお陰でゝムりました。その證據には、械や鎖に毫も無理なした跡形が見えませんでした。夫に又彼は、靴を穿くやら、現場より七足も向ふの懸釘に懸けてあつた、外套を持つて來るなど、悠々として餘裕を有つて居ましたのでゝムりまする。』

『野郎は何神に祈つたのか?』この王の詰問に、兵士は斷乎として答へた、

『耶蘇、とやら申す方に。彼の周圍に立つて、警護致して居ました私共と、彼の鎖を摑んで居ました兩兵卒とに、彼は入獄中始終耶蘇の事を話して呉れました。』

『彼は其の耶蘇の事に就いて、何と申したか?』『耶蘇は平和の王であつて、獨子を賜ふ程に人を愛し給ふた、最高き神の子である、と聽きました。又之を信ずる者は、亡ぶることなくして、永遠の生命が與へられる、何故なれば耶蘇は、十字架に死して後に甦つたからである、と此樣なに申しました。』

アグリッパ王は、椅子に反り返つて、恨めしさうに、黑い眼をぴか〳〵光らせながら、集議所の議員共に話しかけた、

『始めて事の眞相が分りかけた。彼のナザレ人は、自分の利便のために、此の野郎共を改宗させたので、夫で彼等が彼を逃してやつたものだ。彼等は罰せらるべきだ。彼等を曳立て行つて磔刑にせ

え、今日の日輪の沒しない內に、遺付けて了へ。』

『王樣、一つ御願がムりまする！一つ！王樣でも最期に臨み給ふ時に、御願があらるゝ事と存じまするが、夫と同じ樣に私も。何卒他の者共に課せんとなし給ふ罰は、盡く私に負せて、頂き、何等の罪過の無い、此の同僚の生命丈は御助け下さるやう、お願ひ申上げまする。』

衛兵長が、王の脚下に平伏して、斯くまでに叫ぶを、王は聞いた振もせず、刑の宣告を受た人々の、絕望した顏に一瞥も與れず、前言を繰返して、『彼等を曳立て行つて、我の意志を遂行せよ、』と云つた。

刑は直に執行された。日沒の前に、王の馬車は、不運な衛兵の死體が掛つて居た、十六の十字架の立併べる現場を通過した。

馬蹄は戛々、車輪は轆々、馬鈴は玎々、王の鹵簿の近くと見て、同僚の生命乞して拒まれた兵士はその項垂れた頭を擡げて、怖しい大きな聲で叫んだ、

『王樣、御身の上にも、死は迫つて居りまするぞ！その場に臨ませられて、最期のお願遊ばさるゝとも、夫は叶ひますまいぞ。』

王は鹵簿を駐めもせず、疾風の如くに通過した。踏々と驅け行く馬蹄は、塵埃の雲を蹴立て、息も詰らんばかりであつた。遭難者の物凄い死體は、此の塵埃の雲なば、經帷子に纏ふて、十字架の上に掛つて居た兇惡なる彌次馬は、仇敵か狙ふ惡魔の群の如くに、叫びつ呪ひつ、王の還御の後を追ふた。

翌日の事、力に誇るヘロデ、アグリッパ王の侍從として、威光赫々たるプラスタスは、浮き手の出せない、重事の委任を受ねばならぬ破目になつた。

ツロとシドンとの兩市は、兼て不幸にも、年貢に關する問題で、王の震怒に觸れた事があつたが、剩に今は飢饉の難に遭ふて、猶太との和親が回復するでなくば、市民は全く餓死せねばならぬ程の場合であつた。そこで兩市よりは、祝祭の好機に乘じて、王に懇願する所あらんと、カイザリヤに、

使節を派遣したのである。

『プラスタス閣下、王様のお聞きに達したい事件がありまして、參殿致しましたのでムりまする。天下周知の如く、王様に於かせられては、何人の言よりも、聰明にして愼重にあらせらるゝ閣下の御言に御留意ありて、之を御採用遊ばさるゝのでムりまする故に、先以て閣下をお伺ひ致した次第でムりまする。』

使節の一人なるシドン人の言は、斯も叮嚀であつた上に、大金を贈呈致す、と云ふ前口上も添ふて居たので、王の侍從は、心から耳を貸した。そこで彼は、勿體らしく頭振り〳〵答へた、

『方々が、兩地の窮狀について云つた事は、針小棒大だと思ひませぬ。兎も角も余は、方々の御助力を致さう、と云ふではありません、實は金なんか貰ふから、と云ふでなく……是は余の義務の一つだ、と心得て受合つたのです……夫に、クラウデアス、シーザー帝に比し、その威力に於て、大した劣りのあらせられない御方であつて、神々が人事總覽の首位に置かせ給ふた王様の御氣嫌を損れた事は、兩地方に取つて、一大不幸である、と心に感じて居ますからね。然れば之がために、折角調へて來た品物なり、金なりがあれば、夫を余の手に渡しなさい、余は好い時を見計らつて、之を方々の願望と一緒に、王様に差出すことにし、屹度王様のお情の頂かれるやうにして進ませう。』

此の場合プラスタスは、少くとも其約束丈は履行したと見えて、祝祭の初日の夕方、ヘロデ王よりは、沙汰や如何に、と待つて居た使節へ、翌朝早々劇場で面謁致さう、との下知があつた。

夜明前から場内には、人の山を築いた。名階級の老幼男女、軍人、朝臣、有司百官、奴隷までが、やがて得らるゝ其日の快樂を貪るに、都合の好い場席を取らうとて、熱心に押壓して居た。

『今日は劍客の異合の外に、野獸の勝負もあるさうです。澤山の亞弗利加の獅子が、五十人の死罪囚と格鬪するさうですから、面白い見物でせう。内のマルカス坊は、血を見ますと、何時でも泣きますので、一日中隨分と厄介な事と思ひながらも、連れて來ました。』

一人の婦女が、樂々と其席に就きながら、隣席の者に斯く云ふと、相手の婦人は、可愛い男兒が、當惑顏して、母の外衣の襞に、縮髮の頭を突込んで居るのを、顰面で見ながら云つた、

『おや、笑止な事… 坊樣の癖に！私方のダフネみ御覽下さい、女兒で年齡も坊樣の半分ですのに、劍客の果合を見るのが好きでムりますぜ。坊樣や、血の流れる光景が、大膽に見物の出來るやうに、お稽古み積まないでは、勇敢い兵隊さんには成れませんよ。』

マルカスの母は、燒けて拗ねながら云つた、

『夫ば私から、坊に申聞けますよ。』

『ちよいと御頭を上げて御覽なさい、ちよいと！それ、王樣の御入場ですぞ。』

『おや、魂消ました！あれ、王樣のお召物に、日の照り刚る所を見て御覽なさい、全で光線で織り上た衣服の如ですわ。』

やがて王の傳令官は、靜肅に、と合圖で瞥めて居た。王は頭に寶石を戴き、銀を織り雜た、素晴しい衣服を纏ふて、宮殿內の榮華其儘、燦爛たる容態で、その位の上に坐した、

夫から金口の喇叭が響り出すと、ツロとシドンとから來た使節は、近衛兵の一分隊を先驅として入場し、王の高座の前に來て敬禮をした。アグリッパ王は、彼等が交々伏して、その哀を乞ふた時に、傲然冷淡な風して、彼等の泣面を見詰めた。

『王樣、兩地に饑饉が襲ひまして、民は死に瀕して居りまするが、私共の生命と、兒女等の生命とは、御手の中のもの、何卒お助け下さるやう、お願ひ申上げまする。此の危急存亡の秋に、玉座の下より外に、救助を仰ぐ所はムりませぬ。王樣の御前でお仁慈が頂かれないと致しますれば、私共は死するの外はムりませぬ。王樣…神々が同列の神位に引上げ給ふた王樣よ、何分にも御寬大、神の如き御情を以て、和親の御恩典に與るやう、御取計ひをお願ひ申上げまする。』

『ツロ、シドンの者共や、懇願の條々は委細耳に致した。就而は其方共に、少しく云ひ聞かすべき事があるぞ。』

アゲリツパ王は、斯く答へた上で、兩市の民が、過去に於て、頑冥不逞であつた事をば、苦々しく罵しり、今日の苦境に陷るやうに成つたのも、畢竟は之がためであるぞ、さまで口説き立てた。夫から又王は、語を續けて云つた、

『飢饉に襲はれて、賴みの綱の切れた今日、其方共は、辛ろと目が覺めて、我が神々が人間以上の高位に引上げた者と視、仁慈を求めに來たのだ、而て今其方共は、身を卑くして、過去の罪滅しのため、將來を善くしよ、と約束致したるにより、慈悲を以て、我王國と饑饉に惱む兩市との間に、是迄通り通商を開始するやう、許可を與へることにする。が然し我は、親神樣のヂユピトルの如く、電光を手にして居て、都市であれ、公國であれ、大國であれ、將來我の神威を瀆さうとする者の上に、之を投降す、と云ふ事を忘れてはならぬぞ。』

王は言を終らうとするに臨み、威風堂々として、右の腕を振り上ると、嘩々として漂ふ日光は、翩々たる銀衣の襞に映じて、燦爛目を眩すばかりであつた。その刹那、莊嚴なる王の姿は、赫灼たる光線を衣服の如くに纏ふた、天上の神體が立つて居るかと思はれた。

『神樣だ！神樣だ！お言を下し給ふたのは、人間でない、神樣だ！』

と群集の一人が叫ぶと、畏敬の念に打れて、目まで眩した群集は、一齊に大聲を揚て、『神樣だ！神樣だ！』と叫んだ。

アゲリツパ王は、群集の騷ぎを制しようともしないで、自ら心の裡で、『我よりも大なる神が有らうか、』と言つた。丁度其時に、死の天使は、目には見えねど、威光赫々たる靈體を將て、神劍を手にしながら、王の身邊に立つた。

王は猶も慫りすまに、『我よりも大なる神は有りはしない、』と壯語して、呵々と笑つた。あはれ其の笑の聲は、慮て苦惱の叫聲と成つた。目に見えざる神劍は、既に王の身に下されて、その鋒鋩は、燦爛たる衣服と、寶石入の帶とを貫き、罪深い心臟までも劉つたのであつた。

朝臣共が、驚いて王の周圍に驅け寄つた時に、王は呻吟きながら、『吾は最早末期だぞ、』と云つた

王は兩眼に苦悶の色を浮べ、戰慄する周圍の者の外に、何がな助欲しや、と云はぬ計りに、空を仰ぎ見てから、絶望の身振して、兩手を高く差伸べた。夫から慟哭して云つた、

『連れ出して呉れえ！其所にそれ……運命の鳥が……死の鳥が居るぞ！』

彼等が王を抱き起した時に、今まで澄し込んで、此の現狀を凝視めて居た、小さい茶褐色の梟は、一聲鋭く鳴いたきり、羽音も立てずに、いち〳〵と飛んで行つた。

彼等は王を宮殿に運んで行つたが、王は全五日の間、名狀し難い苦痛に責められて、自分には眞鍮の如に思はれた天空を仰ぎながら、遂に自分よりも大なり、と悟つた神に、聲の限り慈悲を叫び求めた。此の教訓を學び拔いてから、王はその死の體より放たれて、自分の外には、何人も尾いて行かれない、靜寂の世界に逃れ逝いた。

廿六　三人の派遣

アンテオケに於ては、市民は互に賣買したり、爭つたり、愛したり、憎んだり、呪つたり、祈つたり、世態は依然として、舊の如くであつた。弱者は矢張り强者の足下に蹈み躙られて、號泣懊惱を訴へつゝも、淺く掘つた貧者の墓に葬られた。止時なしに驅ぐ叫喚の聲の中に……怖しい苦難や、夫に劣らで怖しい嬉戯やで、變幻極りのない幻影の中に、暗黑より出し無披の魂は、不可坑の渦中に卷き込まるゝ如に、滔々として流れ込むのであつた。而て又そが中よりは、迷へる者……不識我世に生存した故に、迷へる者と云ふべき徒輩が、翻々たる黑雲の漂ふ如に、飄然として浮び出るのであつた。斯の如きは、アンテオケの現狀であつた。

此のアンテオケへ、二人の者が歸つて來た。彼等の信ずる所に據れば、神は世の人を救はんが爲にその獨子を賜ふ程に、之を愛し給ふた。又ナザレの耶蘇なる方……自分共と同じく猶太人で、貧しい名の無い人で、その同胞にすら賤しめられて、遂に耻づ可き最後を遂ぐるに至つた方は、目に見えざる天の、想像も及ばぬ高い所から、純潔なる愛と哀憫とを以て天降り給ふた、肉と成つた神であつた。

此の神人の中に、永遠の災禍を除く永遠の救拯があり、悲しみて泣く者の慰藉があり、病める者、傷める者の治療があり、望なき死を避けて、豐富なる生命に入るの幸福があり、又實に、慈母がその愛兒を抱き上る如に、罪と惱みに泣く、憐れな世の人を救上ることの出來る、無量無限で、人智の及ばぬほどに大なる愛があつた。彼等はモーセの如に、此の愛を仰ぎ見て、その顏に嘩々たる靈光を輝かした。

兩人は彼等の如に、此の愛を見た連中をば、その周圍に集めて、『諸君の使命は、此の地方に福音を傳ふる事でありますが、私共は聖靈の導く所へ行かねばなりません、』と云つた。夫でも彼等は、自分共の心の憧憬を視て、天來の御聲とする如な不都合があつてもなるまいと、暫時逗留して、祈禱をなし、斷食もして居る中に、神の命が下つた、

『我ためにバルナバと、サウロとを甄別ちて、我彼等に命ぜし所の事を行はしめよ。』

そこで人々は、斷食をなし、祈禱をなして、手を兩人の上に按き、その使命の爲に聖別された事の徵證となしたものゝ、彼等は何れも、漠然と神意を解したばかりであつた。

三人……兩人はヨハネ、マコと云ふ青年を伴ふたので……三人は、世界を相手にして起つた！その世界の眼より見れば、三人は、弱い、全で齒牙に掛くるに足りない者で、嘲笑の價値だに無い團隊であつたが、夫でも聖靈によりて派遣さるゝ者であり、不可抗力によりて圍まるゝ者であり、天の萬軍によりて伴はるゝ者であり、又實に上古のイスラエル人と同じく、火の柱で導かるゝ者であつた。三人は唯三人と見えても、彼等は今一人の同行者…預言者が、『その第四の者の容は、神の子の如し、』（但以理書三〇廿五）と云つた、その第四の者と共に行くのであつた。

一行は創々出立て、アンテオケより十六哩なるセルキアに下り、此所から舟出して、クプロの島に赴つた。彼等は島の東端なるサラミスに逗留して、暫時の間、猶太人の諸會堂で、神の道を說いた。

羅馬より派遣された、クプロの總督、セルギチ、パウロは、一般に賢明な人だ、と評判されて居た。

剩に彼は勇敢なる人爲りであつた事は、疑ふべくもなかつたので、此の風光明媚なるククプロの全島を支配して、立派に治績を擧た。そこで彼は、島の西端なるパポスの殿中で、有志百官や、偉い人々さへ見れば、相競ふて之に阿諛するを常とした、朝臣佞人やに取圍まれながら、宛然小帝王見たいな生活をして居た。

或日の事、此のパポスの御殿へ、身窄らしい牛飢えの猶太人が推參した。彼は總督の舘の側に遣つて來て、衛兵に誰何されると、猫撫聲で云つた、

『貴き羅馬人よ、私は寃術師で厶ります。遠く將來を達觀して、人の身上に起る事は、何でも判斷が出來まする。閣下、貴公の御身上の事は、私に分つて居りまする……さても、何うもお淡しい御運勢で厶りまするぞ！』

衛兵は氣も急々と、喜んで彼を營内に連れ込んだ。寃術師は、本當に空腹で遣り切れないので、何でもお粗末な夕飯にでも有附かう、と終日孜々として、その術を行ふた。

『屹度！あの猶太の野郎は、敏活な頓智家であるか、但しは下界の神々と契約を結んで居る者であらう。彼が僕に告た事は、僕の外には何人も思附きやうがなかつた、と思はるゝ事で……而も事實であつたよ。』

百人の隊人の一人が、大聲で云うと、彼の同僚は、奇拔な口調で以て、

『寃神も自分を拜んで吳れる者は、可愛がりもしようが、然し其の同胞が、羅馬や豚などを拜んで居ろとか聞く、猶太人の如き者は、何事か期待されようぞ。』

と答へた。彼の猶太人が、兩人の側に寄つて來て、耳を澄して居たのを見ると、その同僚は、邪慳にも呵々笑ひながら、『おい君、異存があるかれ、』と駄目を押した。

發問者の方に向けた、卜者の黑い眼には、その刹那、煌々と怨恨の火が燃えたなれど、卜者は厭くまでも、圓滑な旨い口調で、

『閣下は間違つて居らつしやいます、私共は、ほ、ほ……ほ……他の物（註を見よ）は拜みませぬ、隱

馬も拜みはしませぬ。』

と云ひかけて、不識我に、獲せた總身を震はせた。夫から又、

『私共の拜みますのは……止しませう、其樣な事を申上る要はありませぬ。閣下は……多分知りたいでムりませう……』

と云つて、羅馬人の側に擦寄り、何事か耳語いた。

【註】猶太人は、律法にて禁ぜられた豚を忌むこと甚しく、何人も豚と呼ぶことすら厭ひ、止むを得ざる時には、之を『他の物』と云ふのである。

『畜生！其樣な事を誰から聞いたか？』

兵士が顔を眞赤にして叫ぶを、猶太人は、呵々と意地惡い笑で受け答へた、

『私が拜むだらう、と思はしやつた驢馬が、その兄弟分なる閣下に傳へて呉れたのでせう。而してもつとお聞かせ申す事がムりまする。』

『いゝや、決して、もう聞きたくない！君は虚言家だわい、一つ折檻してやらう。』

『否何う致しまして、其樣な事をして下さいますな、閣下、夫よりも御自分で、神々の罰を蒙らないやう、御用心遊ばしまし。』

猶太人が、斯く云つて、兩人に背を向けると、百人の隊長は、洪笑一番、君、一本參つたれ、』と叫んだ。夫から又、御幣擔ぎの胴震までしながら語を添へた、

『彼は一體何者だらう？常暗の死の世界から逃出して來たばかりかも知れないれ。』

相手の兵士は、立去る卜者の後姿を目送しながら、獨り口の中で怒罵したが、前の脅嚇を實行しようともしなかつた。

此の奇人の評判が高く成つて、幾日も經ぬ中に、彼は總督の前に召された。セルギチ、パウロは、黄い萎びた卜者の顔をぢつと見詰めて、『これ、其方の名は何と申すか？』と問ふた。猶太人が、莊嚴な大官の威にも動せぬ如な風して、『憚りながら、私の名は、バール、イエス（使徒行傳十三〇六）と申し

まする、』と答へると、羅馬人は、まご〳〵して、『パール、イエス……パール、イエス！』と繰返しながら問ふた。

『何處であつたつけ、近頃其名を聞いた事があるぜ。確か其名に就いて、何か變な話を聞かされた。ふんさうだ、イエスとか云ふ預言者で、奇跡を行ふ者があつたとの事、其方の事かな。』

『如何樣、私は預言者でムります。剰に預言者以上の者でムります。既成の出來事は、勿論一切分つて居まするし、又將に起らんとする事での中、此の私の眼に隱るゝ事は、何もムりませぬ。天上では星の運行、山中では鷲の飛翔、人跡なき沙漠では野獸の疾走、さては是等よりも、一層不思議な事では、人の靈魂が、睡眠中肉體を脱して、遊離漂泊する事等、何一つとして私に分らない事はムりませぬ。之がために私の別名は、エリマスと申しまするが、此の字義を譯けば、智者と云ふことに成るのでムりまする。』

と猶太人が、怪しげなに、〳〵顔で答へると、總督も皮肉な笑顔して、椅子に凭れながら云つた、

『そんな事なら、疾つくの前に聞いて居る。羅馬に行けば、君の如な連中は、蕃々する程居るわい。君の云ふ事が、虚僞であらうと、眞實であらうと、一向構ふことはない。世上幾千萬の人々が、既に經驗した事でなければ、誰の身上にも起るものでないし、而て結局は皆な同じ事で……死んで了うのだ。でもれ、時々暇潰しに、君の占術の講釋を聞くのも面白からう、と思うから、緩り逗留して、何時でも召せば、顔を見せて呉れえ。』

斯て偶然にも、パール、イエス、又の名をエリマスと云ふ猶太人は、パボスに居据つて、總督の家の一員と成り澄することに成つた。彼の性癖は、セルギチ、パウロの夫の如で、行屆いた利口な賞であつたから、彼は油斷なく、その地位を利用して、己が利を計るに勉めた。彼は頓て奴隷や、小役人共の上に、殆んど無制限の權力を振ふやうに成つたので、宮中に備へある山海の珍味には、自由に手をつけて、食前方丈、贅の有丈を盡した。加之その名の如く、本當の智者であつた此の男は、地上のものは、粗末な物でも、輕んじないものだから……金銀銅の貨幣の如きは、寃然淀なく流るる水流の如

に、彼の慾深い掌へ、さつさと流れ込んだ。彼はずん〳〵と繁昌して、血色までも艶々しだした。妙ちきりんな埃及文字で、一面に刺繍をした、絹の正服のさら〳〵と云ふ音も、彼の周圍に居竦めの婢僕の耳には、此の大慾家の身に生えた、怖しい羽翼の音と聞ゆる如に成つた。セルギヤ、パウロは、不相變パール、イエスの大言を聽いて、笑ひ興じたらうが、余まり繁々パール、イエスと密議をするので、是が人目につくやうに成り、剩にその助言に從つて、大事件の處置をした事は、一度や二度でなかつた、と云ふ事實を隱し果せないやうに成つた。

或日の事、寢殿の別當が、手洗の水を持つて來て吳れた奴隷に話すことには、

『新に城下に遣つて來た者があるさうだぜ……又しても魔術師共が。』

『何處の國の者でムりますか？』

『猶太人だ、と聞いたが、併し同類ではなさ……』

と云ひかけて、別當は心配さうに、肩越に顧みて、

『内の魔術師が、何時何時側に遣つて來るか分らないからな、彼の男は……』

と、耳語く如に言足すと、奴隷は大膽に嘴を容れて云ふことには、

『あれは悪魔でムります、屹度さうでムります。あれが口辯で嚇すやうに、たとへ地獄の火で燒かれませうとも、私は左樣言つてやります。』

『これ野郎、必ず左樣してやらうわい、然し火刑にしてやるまでに、お前の無法な舌を懲すために、麻急の苦藥を吳れてやらう。』

背後から皮肉な聲がするかと思うと、魔術師は、長細い食指を、竦み上つた奴隷の額に突付けた。奴隷はきやつと、一聲跳び退つた。夫から奴隷は、荷責者の前に、這蹲ばつて、わい〳〵と泣きながら、

『魔術師樣、お慈悲です！何卒御勘辨を願ひまする、私は悪い意趣で申したのではなく、ほんの冗談でムりました……屹度でムります！』

と云つた。猶太人は、氣味惡い聲で、『野郎、邪魔しあがるな！』と呶鳴つた切り、床の上に這蹲ばる奴隸を打遣つて置いて、總督の許へ、さつさと行つて了つた。

總督セルギチ、パウロは、彼の來るのを樂しんで待つて居たらしく、早速平常にない愛嬌を見せながら云つた、

『エリマス殿や、其方と同國の者で、城下に滯在して居る者共を召して置いた。聞く所に據れば、彼等は自分の神の事に就いて、不思議な教話をして居るさうで、一度聽いて見たいのだ。』

『彼等をお召とは、不穏い事をなさいました！彼等は平和の破壞者として、御城下に遣つて來た者でムりまして、その口には鋭い劍を銜んで居ますし、その舌には蛇蝎の毒を藏して居りまする！玉體の御安泰を希はるゝ限りは、斯る惡徒輩をお近け遊ばしてはなりますまい！』

エリマスは、戲劇的の身振で、手を打振りながら、斯く叫んだけれど、總督は冷然として云つた、

『余は其方が、曾て余の兵營内で、餓鬼の如にして、魔術を賣つて居た時に、其方に耳を貸してやつたと同樣に、彼等の話す事も聽いてやるのだ。』

エリマスは、屢に窮迫して居た時の事を諷刺されたのに閉口して、爪を咬み〳〵、不景氣さうに、ぶつ〳〵呟きながら、畏縮つて了つた。彼は再と口を利かなかつた、やがて珍客共は、總督の前に通された。

セルギチ、パウロは、奇しさうに彼等を見詰めた。彼は獨り心の裡で、『成程、猶太人だわい、』と云つた。夫から、『金に詰つてるな、何れも飢た蛭見たいにして居らあ、』と皮肉な思を添へながら、肌身に吸付かすまいぞ、と覺悟した。遂に彼が、兩人の中の年長者を呼んで、『名は何と申すか、クプロへは、何用ありて來たのか、』と問うと、珍客は恭しく頭を垂て答へた、

『私の名は*ヨセと申しまして、別名はバルナバでムります。私は元來此島の產でありまするが、多年エルサレムに住居致しました。是なる友は、サウロと申しまして、矢張猶太人で、キリキヤの產でムりまする。此度サウロと同道して、歸書致しましたのは、ナザレの耶蘇と、申す方に關

する福音を傳へんがためでムりまする。』

『サウロ！サウロ！君の友達の名は、本當に惡い名だ、でも魔術師には……若し君等が、其名の示す如な連中であるならば……』

【註】サウロとは、希臘語では、saulos 希伯來語では、saul 又は shaul であつて、英語の wanion に譯される語である。その意味は、氣、、、、まぐれ者、、、いたづら者、好色家など、何れも惡いものばかりである。

總督が冷笑しながら、斯く云ふと、サウロは、例の如く、他の注意を強ふるやうな、權威ある身振と語調とで、堂々として云つた、

『セルギチ閣下、私共は魔術師ではムりませぬ。サウロてう名前の儀は、私に取りまして、大事と思ひませぬ。夫に私には別名がありまして、今後は夫で通す積りでムります。信者の中で最小さい私には、其方の字義が適して居りますから。その別名とは、パウロ(小さい者)でムりまする。』

總督が傲然として、『これ、君は何の權によりて、羅馬人の名を僭稱するか？』と云うと、サウロは、斷乎として、『生得の權に據るのでムります。私は猶太人ではありますが、又羅馬の一市民でムりまする、』と答へた。すると總督は、明白に顏色を變へて、慇懃に云つた、

『君がクプロ人に傳へて居た事を聽かして貰ひたいものだ。君は羅馬市民であるとせば、向うに居る、彼の野郎なんかと交はつてはならないね。』

エリマスは、兇惡な顏をば、怖しげにも蒼白くして、前の方に跳出た。夫から彼が、『彼の野郎は、虛言を吐きました！彼の心は讀まれるではムりませんか？』と叫ぶと、總督は聲を勵まして云つた、

『默れ！左なくば衞兵に申附けて、追拂らはせるぞ、パウロ殿や、ナザレの耶蘇の事を話して吳れ給へ、余は少しは聞いた事もあるので、もつと委しく聽かして貰ひたいのだからね。』

そこでサウロは、發端から說き始めて、ナザレの耶蘇は、神の子である上に、又人の子であつて、罪なき方でありながらも、迷へる世の人の救拯の爲に、清淨無垢の小羊として殺された顚末まで、委

しく説教した。セルギチ、パウロは、椅子に凭みながら、深く感動した者の如にして謹聴した。

セルギチ、パウロは、説教者の心腸を縫ふて出た、辯説の遂切れた時に、『新なる生命！然らば死は萬事の終末でないと云ふ事は、本當か知ら、』と囁いた。夫から彼が、深く考へ込んだまゝ、目を擧て見ると、パール、イエスが、隱險な不興面して、彼を見詰めて居るのを氣附いた。抑へ切れない憤悲の情を以て、吾と其心を惱めながら、此の光景を見守つて居た猶太人は、今まで彼を信じて、暴戻にした者と、旅人共との間に割り込んで行つて、息詰つた語調で叫んだ。

『始終の御樣子で見れば、あはれ閣下は、此の僞善の野郎共に瞞着されて、邪道にお迷ひ遊ばさるのでムりますか。彼等の申した事は、皆神を瀆す邪道であつて、虚言……嫌惡むべき虚言でありまするぞ！私も猶太人の一人でありますからには、我民族の聖書と預言とに關して、萬更知らない譯はムりませぬ。もし閣下が、大神エホバに就いて知りたい、と思召さるゝ事がムりますれば、從來私が他の事共をお數へ申しました如に、此事だつて御教へ申すことが出來ませんでせうか？

閣下は御忘れ遊ばし……』

彼は斯く云ひかけて、身を屈めながら、總督の耳に一言二言耳話くと、總督は目に立つほどに、ぶるゝと身震して後退りした。そこでパウロ、即ちサウロは、聖靈に滿されて、彼の男にじつと眼を据え、叱咤して云ふことには、

『さても汝は、すべての詭譎と、凡の奸惡とにて盈る者であり、惡魔の子であり、すべての義き事の敵である、汝は何時までも、主の直なる道を枉げて止めないのか？視よや、主の御手は、今汝の上に置れたので、汝は盲目と成つて、暫時日を見まいぞ！』

不思議や、魔術師の目には、直に霧が掛つて、彼は暗黑の裡に右往左往、己を手引する者を探し廻つた。セルギチ、パウロは、成りし事を見て、大に駭き、此時から主の教を信ずるやうに成つた（使徒行傳十二章參照）。

廿七　異邦人の光明

『私丈は此所より向へは行かない、と決心して居ます、私はエルエルムに歸ることにしませう。』

粗末な食卓に載せた手は、人の目に立つ程に、ぶる〳〵震へて居たけれど、談者は顏を蒼白くして、堅い決心を示した。

三人の旅人は、ペルゲに到着して、埠頭の側の一小旅亭で、朝飯を濟せた所であつた。年長の兩人は、飯を喰ひ〳〵、向後の計を案じ合つて、市民の大半が、例年の通り、將に山地の方に、出稼に出ようとして居るのだから、ペルゲに滯在したつて駄目だらう、と評議一決したのであつた。パウロは、向合つて尼たヨハネを熟視して云つた、

『御互に隊商に尾いて行つて、何處であらうが、機會の有り次第に說敎するとしよう。斯うして、外に入込む術のない諸地方を通過することが出來る譯であつて、思へば眞に、主の御用さへ務めて居れば、萬事は盡く〳〵働いて、吾等のために益をなすものですね。』

青年がエルサレムに歸りたい、と其決意を示したのは、パウロが、斯く云つた後であつた。彼の一言のために、一座は暫時沈つて了つた。やがてバルナバは、心痛に堪へない如な語調で、『卿は具合でも惡いの？』と問ふた。ヨハネは、起ち上りざま、不安げに彼方此方と歩みながら云つた、

『いゝえ、從兄殿、肉體は大丈夫ですが、心に病氣を得たのです。お互の勤勞は果して何の爲に成りませう乎？幾に三人して、世界を相手にするのですが。成程異邦人等は、說いて敎ふれば、信仰の告白は致します、が私共が一朝立去つて了へば、元の偶像に歸依するは必條、之を何うして防ぎませうか？あの羅馬人のセルギチ、パウロの如きも、元來猶太人、バール、イエスの言を聽いて、之を信じた者で、昨日は私共の說を聽き、奇跡をも目擊して……その信仰を起したのですが、思ふに明日カルデヤ人でも流涙れて來て、その不敬虔な妖術でも聽かせようものなら、又候之に信從するでせう。獲る所の物は、唯此通のもので、而も私共は、或は飢え、或は渴き、或は猛獸に迫はる

ゝ如な事の列には、一切事情の分らない、荒れ果た山地に深入しようとして居るのです。隊商に尾いて行く？　夫は無謀です！　迚も〳〵、追附いて行かれますものか。其様な冒險をするのは、結局生命を棒に振るまでの事ですよ。一體其様にまで爲んならん事でせうか？　手近い所に、私共の爲す可き事が、澤山と有るんぢやありませんか？、猶太にも異邦人が居るんぢやありませんか？　最前も申しました通りに、私は不得止、今茲で此事を思ひ止ります。從兄殿、寸前暗黑の地に跳込まんとするに先ち、御再考なされた方が宜いでせう。』

『これヨハネや、神は今日まで、卿を護りて、祝福を垂れ給ふたからには、今卿をお見棄なさる筈はないです。青年血氣の勇を有ちながら、手を鋤に按て、背後を顧りみるやうでは。』

パルナバが、聲を震はせながら、斯く云ふを、青年は機嫌悪げに受て答へた、

『私だつて事を爲すの氣もあれば、意もあります、が思慮ある者は、事の費を計る可きでせう。』

皮肉の一言で、三人共は默つて了つた。やがてパウロは、沈んだ語調で、沈默を破つた、

『實にも君の言の通り、思慮ある者は、事の費を計る可きです、が基督は、罪人……私がその首である罪人の爲に死んで下さつたからには、私は自分の生命を惜む者でないです。兄弟よ、君は耶蘇基督の善き兵卒として、艱難に堪へ得る筈です。競走場に馳する者は、その競技を果るでなければ、冠冕は得られないです。だが御勝手になさい……心から進んで私共と同行されないとあれば、止を得ないことです。而て主が君をして、改心せしめ給ふことを祈ります。』

斯て青年は、痛む心を胸に抱き、獨り歩行を轉して、エルサレムの方に行つた。パウロとバルナバとは、タウラス山脈の方を指して行つた。時には通り掛りの隊商と共に、時には唯兩人徒歩で、殆んど通れない如な無人の境をば、或は煌々と射る正午の日に焦げ、或は沛然として、降り頻く夕立に濡れ、パウロの所謂、『河の難、盜賊の難、の中の難、勞苦、疲勞、不眠、飢渴、斷食、凍寒、裸體、』など千辛萬苦を舐め盡して、長途の旅行の後、遂にピシデヤの境を越え、アンテオケ(註を見よ)は、羅馬人の殖民地に到着した。

別名をアンテオケのカイザリヤと稱つた、此の地に於て、彼等は禮拜の定刻に、猶太人の會堂に出掛て行つた、律法と預言とを讀んだ後で、會堂の宰等が、常例の如く彼等に、『若し民に勸むる事があれば、今話して下さい、』と求めたので、パウロは、起つて說教をした。

【註】 茲にアンテオケと云ふは、スリヤのアンテオケとは別にして、ピシデヤの都である。此地もスリヤのアンテオケと同じく、セリユーカス、ニケートルの建設した所で、後に羅馬人の殖民地となつた。一名をカイザリヤと云ふやうに成つた。

『イスラエルの方々、及び神を敬う方々よ、何卒私の申す事を能つく聽いて頂きたいです。』

パウロが、斯う打出すと、會衆一同は、その說んと欲する事が、彼の顏に輝いて見えたので、熱心に彼を凝視めた。パウロは先づ、イスラエルの民族が、諸民族の中より撰ばれて、神の民となり、埃及より救出されて、荒野の中で四十年間も訓練を受け、遂に約束の地に導かるゝに至つた、不思議なる歷史を概說し、進んでは士師、預言者、王などの事を述べ、ダビデ王の事に就いては、神が、『我ヱッサイの子、ダビデと云る、我心に合ふ人を得たり、彼は凡て我旨を成遂ぐべし、』と宣ふた、此の王の血統から、約束の救主、イエスが與へらるゝやうに成つた、と說き進んだ。

夫から又彼は、理解され易い、簡單明瞭な言で、耶蘇の生死に關する、不思議なる事實に就いて述べて置いて、その論旨を結んだ。

『エルサレムに住める者は、基督を知ずして罪に定め、安息日毎に讀む所の預言者の言を成らせた。既に彼に就いて錄された、凡の言を成らせてから、彼等は之を木より取下して、墓に葬つたが、神は之を死より甦らせ給ふたのです。然れば諸君よ、此人に由つて、罪の赦免が諸君に與へらる、事を知られよ。モーセの律法に依つて、義とせらるゝことの能ない、凡の罪も、信ずる者は皆彼に由つて、之を赦されて義とせらるゝのです。然れば諸君愼まれよ、怖くは預言者が錄して、「藐忽者よ、視て駭き、且つ亡びよ、蓋われ爾曹の日に一の事を行はん、人之を爾曹に告るとも、爾曹信ぜざる可ればなり、」と云つた、その事が、諸君の上に臨るかも知れないですから。』

禮拜が果ると、會堂の宰や、邑の重立共は、パウロの說教に憤りて、兩人の事を馬鹿にして散會したが、多くの謙遜なる猶太人は、猶太教に改宗した、或異邦人等と共に、兩人に從ふて、次の安息日にも、復此事を宣て吳れよ、と求めた。パウロとバルナバとは、猶も彼等に語りて、恒に渝りなく神の惠に居んことを勸めた。

次に安息日に、邑の人々は、神の道を聽かうとて、殆んど皆集まつて來た。禮拜の聖所に溢るゝまでも、群衆の押し掛けて來るのを見て、會衆中の長老共は怒つた。會堂の宰で其名をエリパズと云ふ者の云ふことには、

『諸君心したまへ、潔からぬ獸を喰つたり、偶像を拜んだりする、神を瀆す徒輩が來て居ますぞ。是は彼の兩人が、邑の端々しから集めて來た奴でありまして、彼等のために、吾々の會堂は瀆され、律法も破られて、イスラエルの平和を害せらるゝのです。然れば今彼の男が說教するなら、面と向つて抵抗しようぢやありませんか。打遣つて置けば、シオンの城壁は倒壞されて、聖都は荒れ果て了ひますぞ。』

そこでパウロが、今日も又、耶蘇の福音を語り、耶蘇は罪の救主であつて、唯一度限り、神の意に適ふ聖き犧牲と成り、律法の重荷を除き給ふた方で……死者の中より甦りて、永遠の榮光の中に昇り給ふた基督である、と說くと云うと、彼等は一齊に聲を揚て、パウロの言を拒み、民を唆かして、兩人の言を聽かせないやうにした。會堂の宰は、頻りに兩手を打振りながら云つた、

『彼等に一體何者ですか？理不盡にも、吾等の中に推察するとは、不屆千萬です。視たまへ、彼等は虛言を吐き、神を瀆す事を話すでないか！彼等の傳ふる耶蘇なる者は、既にエルサレムの最聖會議によりて、死罪に處せられた者で、吾等は彼が當然の處罰を受たのだと思つて、滿足して居るのです、地上に高いも聖いも、集議所以上の法庭があらうか？羅馬人たる諸君にしても、耶蘇が磔刑にされたとすれば、彼の大罪人であつたに相違ない、と云ふ事は分つて居らるゝでせう、羅馬人の公義てう事は、我同胞の中にする、里諺と成つて居る程ですもの。あの饒舌家の旅人共が、律法

に反して喋々するのを、律法に從つて、聖い生活をして居る吾々として、許して置けませうか？吾々は約束された王の降臨を待ち焦れて居る者ですもの、彼の不敬虔な野郎共が、此の聖所に推參して、呪はれた木の上で殺された罪人を指して、イスラルのメシヤであると宣傳するのを、抵抗もせずに、默つて聽いて居られませうか？』

宰が斯く怒號すると、群衆は口々に、何うの斯うのと叫き立て、その紛擾の光景は、筆紙にも盡し難い程であつた。然れどパウロとバルナバとは、此の喧囂のために默ぜざるを得なかつたけれど、荒て狂へる猶太人を怖れもせず、泰然自若として立つて居た。やがて或者が叫んだ、

『彼等を追拂つて了へ！彼等を追拂つて了へ！神を瀆す者を石で打つてやれえ！』

『聽け！聽け！彼等の既く事を聽いてやらうぢやないか！』

會堂の宰共の有力なる干渉によりて、辛つと少し秩序が回復されたので、パウロは、兩人を侮辱した男の方に向いて、顏にも聲にも、毫しも怒つた氣色を見せずに云つた、

『一體神の道は、先以て猶太人たる諸君に告ぐ可き筈であつたのです、が諸君は之を棄て、且つ永生を受く可き者でない、と自ら定めたるにより、私共は轉じて、異邦人の方に參ります。と申すも、主は私共に命じて、一印敎と成りて、地の極にまで及ばん爲に、我爾を立て異邦人の光明となせり、』と仰せられたからであります。』

是に於て會堂に居た異邦人は、希臘人を始め、他の國人に至るまで、皆パウロの言を聽いて、抃舞雀躍、歡呼の聲を揚げた。夫が中には信する者も多く起つて、之がため福音の道は、アンテオケの周邊に、遍く傳へられるゝやうに成つた。

猶太人は、該件を泣寢入にする積りでなかつたが、幸に猶太敎に改宗した者の中に、異邦の貴婦人達で、その貧しい心より出る熱情を以て、猶太敎を信じて居た者があつたので、彼等は此の婦人連に賴めば、官憲の協力を得る道もあらうか、とその消息を能く飲み込んで、高貴の家の裏門を叩いた。羅馬の代官の妻を訪ふたのは、彼の喰へない男のエリバズで、彼は彼女に斯う云つた、

『貴き奥方よ、貴女は古代の女王エステルの如く、今日の如き場合に、何か御使命があつて、此の國に神の御召を頂かれたかも計られませぬ。若し貴女の御力に依りまして、彼の危險な不虔の徒輩を追拂ひ、此邑が彼等の難を免るゝことに成りますれば、エホバは、御身の上に、無量の祝福を垂れ給ふであらうことでしまする。』

彼女は直に夫の前に出て、問題を提示した。代官は顏をしかめながら呟いた、

『事を好む旅人が……會堂で騷動を起した……猶太人を離間したさな。それは有勝の事だ、猶太人は、喧嘩が好きだもの。是れまでは迫害を加へてあつたさ云ふの？夫は然うだ。而して猶太の宗教ばかりが眞の宗教ださ云ふの？然うれ……何時でも御身から、然う聞いた事があつた。夫で、此事に就いて、何うして臭れえさ云ふのか？』

彼女は青い眼に、憤怒の火花を散しながら、『神人を死刑に！彼れ等は神を瀆す者です！』と云つた。代官は肩を竦めて、拇指と人差指とで、彼女の淡紅色の耳を彈きく云つた、

來て貰ひたい、余は實の所、猶太教は好かないからね。でも彼の乞食共を迫拂う爲には、一つ即刻をしよう……即刻さ。余が牧民の務をして居る間は、此地に何等の騷動をさしてはならないから。』

斯くてパウロさバルナバさは、思掛もなく、以後アンチオクに留る事は相成らぬ、さ云う官令を受るやうな破目になつた。その文書を見れば、

『若し正午過ぎて、市内で見附るやうな事もあらば、最早生命の安全に就いて、責めは負へないぞ。』

さあつた。バルナバは、之をパウロに渡しながら、『此邑にて人爾曹を責なば、他の邑に逃れよ』さ主は仰せられた、さ云つた。パウロも、深く考へ込んで云つた、

『火は既に燃き附られた、猶太人の抵抗は、空吹く風の如きもので、お墜で火炎は八方に擴るのだ、さあ、行きませう。』

廿八　最高き神の使者

『神を瀆す奴共を追拂つて、厄介離れをしたものゝ、悲い事には、義務の果し方が下手かつたやうで、氣掛りである。』

ピシデヤのアンテオケの會堂の宰、エリパズは、感極りて物も言はれぬ、と云はぬ計りに、其頭を徐に左右に打振つた。

『何の點が下手かつたのですか？イスラエルは、確に立派な勝利を得ました。敵は敗て、屈辱を受けながら、打萎れて出立しました。エホバは讃む可き哉です！兩人が汚れた異邦人や、彌次馬連に伴はれて、邑の門を出た時に、人々はです……兩人が礙々とお追從言つても聽かばこそ、石を投るやら呪ふやら、拔りなく遣付けましたよ。』

『兩人を石で打殺して遣れば宜つたのです！アブラハムの裔なる方々よ、既のことに、惱めるイスラエルの體に卷き閉いて、呼吸も出來なくさせようとした、毒蛇にも等しい、彼の忌々しい異端を追拂ひましたが、吾等が罪を犯した、と申すのは、畢竟此點なので、寧ろ律法に從ふて、彼等を殺す可き筈でありました。』

エリパズが、俄に元氣附いて、斯の如く叫ぶと、議員の一人は、溫和に異見を述た、

『兄弟よ、夫は羅馬の官憲の許可がなくては、不可能の事であります。彼の兩人は、何一つ羅馬の律法を犯しませんでした……異邦人の承認せる律法は、唯羅馬の律法ばかりです。』

エリパズは、眼球をぎよろ〳〵させて、天空を仰ぎ、骨太の手を固く握つて、その胸を打ちながら

『あゝエホバよ、斯て幾何の時を經たまふぞ！』と號泣した。議員等は大に感服して、恭しく彼を見詰め、口々に囁いた、

『何と熱心でないか！何と聖い熱心でないか！嗚呼！エリウドの子なる、宰エリパズは、何と敬虔な人でないか！』

暫くしてエリウドの子は、胸を打つことを止め、瞑目して静坐した。同役の連中は、默然として、その立派な鬚髯を撚つて居た。やがてエリパズは、感激のため疲れ果た者の如に、微細い聲で云つた、

『私はイコニオムの邑に行く積りです。彼の神を瀆す徒輩は、彼所へ行きましたから。』

議員等は嬉しいやら、魂消るやらで、有頂天に成つて、相互の顏を見合せた。此の宰は、許多宰のある中でも、誠に不思議な人であつて、他人の知つてる程の事なら、誰よりも先に、疾つく分つてるな、と斯う彼等に見えたらしい。

そこでエリパズが、細い灰色の眼を開けながら、徐に語を續けて、『彼處で彼等の惡事を發いてやりませう、機會好くば……殺してやりませう、』と云うと、滿場一齊に、『エホバは讃む可き哉！』と絶叫した。

抑も此のイコニオムと云ふは、草木の茂れる膏地の眞中に在つて、荒涼れた高原が、蜿々と地勢を張り、遠き彼方に白皚々と雪を戴へる山脈に連なつて居る、その無際限の廣野の境界に、番兵見たいに位して居た。此の小都會は、居心地の好い、平和な所であつて、永の月日、天下泰平であつたが、月輪の一盈虛の內に、風變りな戰爭の場と成つて了つた……實際戰爭が行はれた、舌を武器として。『舌は小きものにして、誇ること大なり、』と聖書に錄してあるでないか。遂にイコニオムに於ては、邑の住民であつて、此の小くて、而も大なる武器を用ゐ得る程の者は、源平兩黨に分れて、間斷なく激戰をした。その果何う成つたやら。

二人の旅人は、その頭に聖靈の神火を戴き、その唇は祭壇からの活火に觸れ、唯簡單明瞭なる數言で以て、炎々たる火焰を煽つた。曰くナザレの耶蘇は、至高き神の獨子……メシヤであるぞ！彼は十字架上で殺されたけれども、神は之を死より甦へらしめ給ふた。彼は律法を成就なし給ふた。即の救免と、永遠の生命とは、唯彼にのみ有るのだ。是れ即ち、彼等の戰く所であつた。

斯て求むる者は、生命の麪麭と水とを得て、直に心靈の飢渴を愈されたが、求めざる者には、折角の言も、惡鬼に憑れた者の囈語の如に聞えた。

『此の人々は、眞の預言者だ！視よや、手づから醫療の奇跡を行つたでないか！』

と群衆の中の一人が叫ぶと、エリパズは、會堂の階段に立つて、歎聲を揚げた、

『あゝ馬鹿だ、盲目だ！彼の兩人は、アンテオケでも、呪はれた異邦人の彌次馬連を啖かして、夫が爲に大恥かいて、邑から追出された者ですぞ。彼等は惡魔の子であつて、魔力の力で以て、醫療の眞似を行るのです。彼等の手で汚された病人共は、明日にも苦惱の中に亡んで了うだらう、御用心召されよ。』

猶太人と、異邦人の屑どより成れる民衆は、是以上煽動さるゝ要は無かつた。足を止めたと見る間に、彼等は街路の敷石を拾つて、わい〳〵と騷ぎながら、兩人が說教場と定めてあつた、邑の中央の廣場へと押寄せた。

『あの外道奴の手も足も千切つてやれ！石で打殺してやれ！小刀で料理してやれ！』

然るに旅人は、何所にも見附からなかつた。彼等は虐殺の企を警告されて、何時間か前に、緩

と邑を出で、四十哩も向うの小都會なるルステラへの街道に逃げ延びたのであつた。

ルステラの山村には、會堂は一個も無かつたけれど、ヂユピトルの神殿があつて、村の門外に祠殿の石垣が築かれてあつた。古風の住民は、常に此の神殿に詣で、その守護神の加護を祈るのであつた。彼是さ相談をした後で、旅人は、市場で人民に說教を聽かせたい、と願ひ出たが、容易に許可を得たので、彼等は不思議がる村民に、十字架の福音を宣傳した。

再三熱心に聽いた連中の中に、憐れな蹠があつて、毎日他人に助けられて市場に來り、往來の人に物乞しながら聽いたが、パウロの鋭い眼は、之を見逃さなかつた。乞食が耶蘇の不思議な物語を聽いた三度目の事、パウロは、乞食が天來の光明を受けて、その兩の眼に、隱し切れない、不思議な光輝の浮んでるのを見て、『彼には癒さる可き信仰が有るな、』と心の裡で思つた。そこでパウロは、威あり て逼る如な眼を蹠に据えながら、大音聲を揚げて、『汝の足にて、正しく立よ、』と云つた。

乞食は直に踊り上つて、歩き出した。斯と見た見物人の一人は、ルカオニヤの鄙びた方言で叫んだ、

『驚く可き奇跡だ！　視よ神々が、人間の形に成つて、我儕に天降り給ふたものだ！』

パウロとバルナバとは、大騒ぎのため村民に説教が聽かされない、と視ながらも、村民の談合つてる事は、珍糞漢で何の事やら分らずに（註を見よ）、一應その宿所に引上げた。

【註】使徒パウロは、疑もなく希臘語で以て、ルカオニヤ人に説教したのであらう。而して希臘語は、當時廣く行き渡つて居たから、村民は能く彼の意を了解したであらうけれど、彼等が感激した時には、必ず方言を以て語り合ふて、パウロには、了解が出來なかつたであらう。

『彼の神々しい旅人が、私の側に近寄つた時に、私は威壓されたんぢやないか？　あの凛とした身幹あの多々と垂れた鬚髯、あの仁慈の容姿、何所から見ても唯人ではない、視よ、守護神ゼウス様が、人間の形を取つて、氏子共を御見廻り遊ばしたものですぞ！』

村の首長が、感激の余りに、荒々しく手振して、斯く云うと、群集は無我夢中で、『今日は不思議な日だ！　吉日だ！』と絶叫した。夫が中に今一人の者が、差出つて云ふことには、

『眼光の烱々たる、辯口の達者な、小柄で敏活い、若い方の旅人は、大神ゼウスに侍つて、御使役を務め給ふヘルメス神であるに違ひあるまい。彼の生れてから一度も黒土を蹈んだ事のない、蹠の歩きだしたのも、畢竟此の神様が、その有翼の御足に備へ給ふ神力のお陰であらう。』

急使の注進によりて、奇跡の行はれた現場に駆付けて來た、ヂユピトル神の祭司は、一同に勸めて云つた、

『早速御両人の御祭をして、その御怒に觸れず、罰も當らぬやうにするがよからう！』

そこで祭司等は、三年目毎に行はるゝ、オリムピヤの神々の大祭の爲に飼つてある、純白の牛を幾頭か、家畜の群の中から撰り抜いて、之を讃歌の調子に連れて、村の門前へと曳出した。其所には御祭氣分の民衆が、天來の神を祭らうと熱狂して待つて居た。彼等が素速く列を正すと、祭司等は、花で飾つた牛を追ひながら先導をした。夫から村民は、槍や楯などを携へて、整然たる歩調で續いた。中には馬上に跨る者もあつた。村の老人連は、橄欖の枝を手にし、重立の女房連は、奉納の品々を

捧げて歩いた。其後に續いたのは、二列に併んだ處女で、犧牲を屠る牛刀や、容器などを運んで居た。最後の列には、身分の賤しい既婚女や、子供連が併んで居た。全體員何れも喜色滿面に溢れつゝ、感謝の歌を歌ふて、村の街々を紆り曲り、二人の旅人が宿所を指して遡り行くのであつた。

『仁慈深き神樣よ、群衆が歡呼の聲をお聽き遊ばせ。勿體なくも賤が伏屋に、枉駕の榮を賜はりました、天來のお客樣よ、何卒非常貴き御同行にお取次をお願ひ致しまする……私は畏多く御前に參られませぬ……祭司や、村の衆が、お祭り致さうとて、犧牲の物まで用意して、今に此所に參らうと致して居りまする、と彼の御方に御傳へ下されまし。』

宿所の主人が、恭〳〵しくも客人に擦り寄つて、斯く云うと、パウロは、喫驚仰天、讀みかけた卷物を置いて、仰ぎ見ながら、『貴公は屹度誤解して居らつしやる……』と云ひかけて、急に口を噤んだ。折柄わい〳〵と騷ぐ歡呼の聲や、もう〳〵と鳴く牛の聲が、開放した窓に響いた。

『一體村の人々は、私共を何者と思つて居ますかれ。』

大きい恭〳〵しい眼で、パルナバを凝視めて居た家主を顧みて、パウロが、嚴然として斯く云うと、家主は跪いて歎聲を揭た、

『あゝヘルメス樣、村の者共は、御兩方の御神性が、肉の面帕に蔽はれて居るのを發見致したのでムりませうが、然ればとて私をお叱り遊ばされますな。』

パウロは、大に驚いて、『ヘルメス！飛んでもない、何うして其樣な迷信を起しましたか、』と叫んだ。夫から彼は、パルナバの腕を掴んで、惶しく云つた、

『村民は御互を神と思つてますぞ！さあ出て行つて、彼等に會つて見ようぢやありませんか。』

既に家の周圍に集ふて居た群集が、『視よ神々が！』と叫ぶと、寄せ來る行列は、歡呼の聲を揭て、之に應じた。

『皆樣！何故此樣な事をなさるんですか？』と、パウロが、衣服を裂きながら、大聲を揭て、彼等の中に飛び込むのを見て、ヂユピトルの祭司は、鹿爪らしく云つた、

『氏子の衆や、御兩人は、その神性を顯現はさるゝ御思召で居らつしやらないです、夫でも犧牲を捧げることは當然です。』

『夫は不可ませんぞ！明言して置きますが、私共も諸君と同感同情の人間でありまして、諸君に福音を傳へますのは、諸君が此樣な虛忘しき事を止めて、天と地と海と、その中に在る萬物とを造り給ふた、活ける神に歸らんがためであります。』

祭司共は身を退いて、不審さうに談者を見詰めて居た。パウロは、猶も言を續けた、

『過去の世に於ては、神は凡の民族に、思々に己が道を歩む事を恕し給ふたなれど、また吾等を惠みて、天より雨を降せ、豐穣なる時候を與へ、糧と喜樂とを以て、吾等の心を滿しめるなど、御自分で證たなさらなかつた事はありませぬ。』

祭司共は、決然歩行を返して、奉納物を運び戻した。彼等は行く〳〵云ふことには、

『何だか不思議でならない、御神殿の前で牛を屠り、その臟腑を檢べて、吉凶を判じて見よう。』

一人頭巾被つた、髭男の旅人が遣つて來て、退去する祭司に從へる村民の一人の前に立ち、禮儀正しく挨拶をして問ふた。

『今日此の邑で、何事か起りましたか？街々の騒いで居る樣子で察しますると、何か容易ならん事件が起つた如ですれ。』

『本當に容易ならん事件です！過ろ三日の間、當地に滞在した……剩に變な分らぬ事を話して吳れた、二人の旅人が、此の地方なんかにては、未だ曾て見た事のない奇跡を行ひました。然るに私共が、彼等の御祭をしようとしましたらば……神樣だらうと思つたもんですから……彼等は私共の言を聽入れないで、或變な神樣の事を宣て、上代から今日までも、私共を守護つて下さつた祖先の神々を棄て了へ、と勸めて吳れました。』

村人が澁り〳〵、斯く答へると、新來の旅人は、その衣服を裂いて、大聲で叫んだ、

『哀哉！イコニオムや、アンテオケで、散々荒し廻つた欺瞞者が、此所までも遣つて來てるぞ！

ルステラの方々よ、御氣毒です、彼等は惡魔の子で、忌々しい神を瀆す者ですから、抵抗もせずに打遣つて置けば、必ずや君方を迷はせて、永遠の死に至らしめまするぞ！』

『神を瀆す者……魔法師……虐殺者！』

口々に罵る呪詛の聲は、叉狀の電光の閃めくかと思はるゝ如に、絶望して險惡な氣分と成れる群集の中に響き渡つた。彼の新來の男は叫んで云つた、

『諸君にして若し、大御神の罰を免れよう、と欲はるゝならば、彼等を村から放り出して、殺して遣りなさい！』

イコニオムに於けるが如く、民衆を煽動するには、此の一言で澤山であつた。彼等は手に〳〵石を掴んで、唯一時間前には、感謝の歌を歌ひながら、凛々として立つた、彼の場へ殺到した。パウロは依然として、居殘れる二三の者に話して居たが、彼等は夫と見て、猛烈に彼を掩擊した、棒や石や摩芥や、旋風の一時に渦卷くが如く、或は息詰つて唸るもあれば、或は荒々しく叫き呪ふもあり、見物して居た婦人子供は、此の慘景に怖れて、泣くやら喚ぶやら、やがて事は濟んだ。筋張つた逞しい百姓は、顏の塵を拭ひながら、呶鳴つて云つた、

『あの喧ましい虚言者も、最早ルステラを惱ますことはあるまい！』

『律法に敵する者は、皆此通りにして殺さるゝんだぞ！然し急いで歸らうぢやないか、御互に偶像を拜む異邦人に接觸して、甚う汚されたぞ。』

頭巾被つた髭男と、その一味の彼共は、斯く囁いた。夫から彼等は、その信心振つて遣つた仕事も果たので、己がじゝ平穩に歸途に就いた。

ルステラの郊外では、暮色蒼然たる中に、一群の者は泣きつゝも、地上に打倒れた不動の體を取り卷いて居た。夫が中に、彼のバウロに療された乞食は、哀泣して云つた、

『此の方がお死なさる筈はないです！そ……そんな筈はありませぬ！』

ルナバは、打倒れた友の側で、悲しさの餘りに、全く昏迷して、躊躇んで居たが、『冷水を飲して、

見て下さい。』と小聲で物言ふのを聽いたので、彼は力を得て云つた、

『彼は唯氣絶して居たまでの事かも知れぬ。それ！確に彼は動いた！』

やがて朦朧たる兩眼は開いた、誰しも又と聽かれようと思はなかつた、嘶きの聲が聞えた、

『茲に信ず可き話があります、御互に若し基督と共に死なば、彼と共に生きられる、御互に若し忍ぶならば、彼と共に王と成られる。』

廿九　テモテの奉召

ルステラの町端の鬱せき家に、亡夫アンドロニカスの妻が住んで居た。彼女は近隣の俗人とは疎遠勝で、井端にも、市場にも、滅多に出ないで、ヂユピトルの神殿なんかには、決して寄附かなかつた。希臘人のアンドロニカスが、此の陰氣な目附した新婦を迎へて、始あて此村で同棲した時には隣の者共は肩を竦めて、『彼女は猶太人だ、』と耳語いた。其後年々歳々、幾度となく此の耳語は繰り返されたけれど、サンドロニカスは、喧嘩にでもなれば、無事で濟されない男だ、この評判であつたので、誰しも高聲では彼女を嘲し切らなかつた。結婚してから三年目に、兩人が間に、男兒が生れたが、六ケ月の後に、父は熱を病んで死んだ。斯うなると云うと、不躾け同情が、四方より集まつて來て、寡婦は否みも切らず、溫柔しく之を受た。

常に親切振つて、慰めて吳れる村人の一人が、彼女の可憐はしい涙だらけの顏を、奇らしげに覗き込んで云ふことには、

『坊樣を御神殿參りに連れて行つて上げなさい、さうでないと、坊樣の生先が不吉う厶りますぞ。嫉妬の神やが、既に御家に祟つて、御主人をお奪り遊ばしたのに、又候ふ坊樣が奪られて、不信心なナイチベ姫（註を見よ）の如に、獨法師に成つて了つたら、何うなさるんですぞ。』

【註】是は希臘の神話に出て居るが、此のナイチベ姫は、タンタラス王の女であつて、テーベス王に嫁して、六男六女の母となつた。然るに彼女は、兒女の多きを誇りて、リート姫が、唯アポ

ロとアルテミスとの二兒を擧げたのを罵つた。アポロとアルテミスとは、母の恨を晴さうと、九日の間に、ナイチベ姫の兒女を盡く殺して了つた。ナイチベ姫は、悲嘆にくれて、ルデヤ州は、シピロス山に蟄居して、その體は石の如に冷く固く成つて了つたが、涙は乾く時が無かつたとの事である。

寡婦は之を聽いて……彼女は其名をユニケと云つた……血涙を絞つて、聲高に叫んだ、

『あはれ、私は、既に寂しい身と成果て居ます！イスラエルの律法を離れた爲に、神は私を罰し給ひました。エホバの祭司の申された如に、私は祠に咒はれたのでムります。でも仕方がありませんね、私の心は、愛する者の後を追ふて、私の胸から鳩の如に飛んで出たんですもの。嗚呼寡婦と孤兒との祠であらせらるゝエホバよ、何卒私の息子丈はお助け下さいまし！』

『貴女はもう異神に祈らない方が可いでせう。さあ戀愛の神樣にお伴して、御供物を献げませう、さうしたら神樣は、多分別の聖樣をお下げ下さるでせう……貴女は中々に綴縹の好い方ですから。』

彼の患告をした婦人が、執拗く斯う云うと、ユニケは、すらりと起立つて、嚴めしく構へながら、

『其樣な事は、二度と聞かして下されますな、』と云つた。その口振は閑雅であつたけれど、その目付には、威嚴の畏る可きものがあつた。こそで隣人は、此の邇間の麵麭燒きの事につきて、何やら囁きながら、そこ〳〵に逃げて歸つた。

夫から二三日後の事、町端の此の伏家に、二人の老婦人が入つたかと見れば、あの若後家は、涙に咽びながら、此の老婦人の肩に寄り掛るのであつた。

此家の家族は三人であつて、其後は年々歲々、平穩無事で、大した變りもなかつたが、唯年と共に嵩るのは、赤坊の身上で、彼は村人の不吉な預言のあつたにも不拘ず、段々に成人して、齡は正に十有五で、細長い身幹の、眞面目な少年と成つた。

テモテ……少年の名は、斯う云つた……は、幼少の時滅多に、母の膝下を離れて、戸外に出ることを許されなかつたので、邑の子供等とは、違つた所があつた。そこで段々成人して後は、邑の辻

つゞに群れて、餘念なく喧嘩口論をする惡少年には、自ら嫌つて近かうとしなかつた。

六歳の時の事であつた、彼は或日音樂の音に誘はれて、家門を忍び出た。異教徒の行列が、深沈な讃歌を歌ふやら、笛を吹くやら、琵琶を奏づるやらで、賑々しく通過する所であつた。テモテは、宛然魔術にかゝつた如に、日光を受て、後光見たいに光る黄色の縮髪を垂れて、優しい顏を照々させながら立つて居た。がその歡樂の夢は、突然滅茶々々に破られて了つた、と云ふのは、大きい奴やら、小さい奴やら、行列の殿りをして居た男兒の一群が、テモテの其所に立つてるのを見附たのであつた。

『やい、猶太人！猶太人！彼方へ行つて了へ、御前の眼は、凶惡い眼だ！魔法師のお袋の許へ歸つて了へ！』

聲高に嘲弄した彼等の言が、殘忍な拳骨で打れたかの如に、テモテの頭腦に響いた一刹那に、彼は耳の邊で、がちや〳〵と音した飛礫の傷の、づく〳〵と淵し突く如に痛むのに氣が附いた。

彼は庭に驅け込んで來て、『御母樣！お母樣！』と泣き叫んだ。何の爲に泣くのやら、一向で譯も分らず、彼は唯、『御母樣、お母樣、』と繰り返すばかりであつた。

夫を見て彼を膝に抱き上たのは、賢い祖母のロイス、彼女は暫時宥めつ賺しつした後で、有りし事の仔細を聽取つた。夫から彼女は、兩の眼を光らせながら云つた、

『村の子供が、お前を猶太人と云つたと！夫は有難い事だ、神樣にお禮を申しなさい。坊やの脈管には、イスラエルの血が流れてるんだ！これ娘や、坊やの相續權を定めずに、此樣なに永く打遺つて置くとは、惡い事をしましたれ。』

其時からテモテ坊は、毎日の日課として、母の民族の不思議な歴史を敎へられた。或日彼は、深く考へ込んで云つた、

『お母樣、救主が天降るとしても、本國から遠い〳〵、此地に居る私共に、夫が何うして分りませうか？』

『坊や、メシヤの君は、凡の國から人を撰んで、之をお側に集め給ふのです。』

と優しく答へたものゝ、ユニケは、熟々とテモテの顔を覗いて、その額と口とが、希臘人其儘で、憂に沈んだ目付が、猶太人の夫の如だ、と見て、其心に不安の念を浮べた。イスラエルの王は、變節した猶太婦人と、異教徒なる希臘人との間に生れた、此の息子を受て呉れるだらうか？猶太人の何の會堂でも、愛兒は蛇蝎視されて、放り出さるるだらう、と彼女は能く合點して居た。そこで彼女は、遺所なき憂慮を携へて、老母の膝下に伏し、心の限り哀泣した。心情善きロイスは、雄々しく答へた、

『娘や、聖書には律法ばかりでなく、他に錄された言もあつて、夫は哲吾等の爲に錄されたものです。市場に行つて御覽うじ、其所には色々な食物が陳列べてあるでせう、魚類の肉、鳥獸の肉、鷄卵、果物、五穀、野菜、蜂蜜、牛乳、牛酪、山羊の乳の乾酪等、夥しい品々、誰だつて之を一日に喰べないで、その内から、欲しいと思う丈の物を撰り取つて、夫で滋養を攝り、毎日の働も出來る譯です。丁度その通りに、聖書の中には、固い食物の律法も有るが、別に又甘露滴る無花果の如な、弱い魂を養う所の、情の深い美しい言もあるです、旨い蜜と、新鮮しい乳とは、弱い體の滋養には成ろが、固い物は反つて病氣の原因と成りますから。今茲に、神の御前で大なる罪を犯しながらも、赦されて義とせられた、ダビデの言の中から、讀んで聽かせる事があるから、能つく御聽き。

「われエホバを愛くしむ、
そは我聲とわが願とを聽き給へばなり。
エホバ耳を我に傾け給ひしが故に、
我世に在ん限り、エホバを呼びまつらん。
死の繩われをまとひ、
陰府の苦み我にのぞめり、われは患難とうれへとに遭へり。
其時我エホバの名をよべり、
エホバよ願くばわが靈魂を救ひ給へと。
エホバは憐憫豐にして、

公義ましませり、我儕の神は哀憫深し。

エホバは、愚なる者を護り給ふ、

われ卑くせられたりしが、エホバ我をすくひたまへり。』

『而て又、此樣なに錄してある、

「主よ汝若し諸々の不義に目を留めたまはゞ、誰かよく立つことを得んや、

されど汝に赦あり……エホバにあはれみあり、又ゆたかなる救贖あり。」

『娘や、御前は此樣な聖語を味はつても、慰安と滿足とを得られないの？』

ユニケは、『はい、御尤もでムります、でも……』と云ひかけて、悲しげに頭を垂れた。夫から又語を續けて『愛兒は撰民の子で無……無いんですもの、』と云つた。

ロイスは、その窶れた頰を赤らめた。テモテは、彼女に取りては、秘藏の孫であつたものを。何うしてユニケが思う如であつてならうぞや。そこで彼汝は叫んだ、

『考へて御覽うじ、モアブ人のルツも、異邦人でなかつたの… その婦人の事に就いて、隣の婦人共は、猶太人なる姑のナオミに、「汝を愛する汝の嫁、即ち七人の子よりも善き者」と云つた……そのルツの孫こそは、イスラエルの王ダビデであつて、其王の系統より、時期滿れば、救主が生れる、と錄されてあるのです。御前の愛兒のテモテも、祝福を受けます、私は此の眼で、夫を見屆けるでせう。』

心立の善い姻は、答も待ずに、その席より起上り、面帕を掛けて市場に行つた。彼女は行く〳〵心の裡で謂つた、

『上等の鷄肉を買つて來て、坊やと娘とに、旨しい御馳走をしてやらう。自分の手で料理をしてやつて、二人に喰させて、喜んで貰はうわい。實に人は口に旨しい物を喰ると、機嫌の好くなるものだ、兎角我家は陰氣で困るよ。』

市場に行つて見ると、其朝は何時になく、大勢の者が集つて居た。ロイスは、心潛に怪しみながら

も、早く用を足さうと、一圖に鳥屋の露店の方に驅け付けて行つた。

『今朝は上等の鷄一羽幾何しますか？』

ロイスが、斯う云うのに、店主は一向で氣にも掛けずに、自分は口と目とを開けらるゝ丈開けて、轉覆した籠の上に立つて居た。その樣子より見れば、彼は魚場の眞向で、誰かゝ何か話して居るのを、現抜して聽かうとしてるやうであつた。

『不精者が！御前樣は自分の商買に心を用ゐた方が宜いだらうに。眼を彼方此方に迷はせたり、耳を雙にして、義務の呼聲を聞かなかつたりすれば、貧乏は武裝した敵見たいに、御前樣に攻め寄せて來ますぜ。』

ロイスは、慾然として斯う叫んだものゝ、自分も鳥屋の見て居たものを見よう、と振り向いて、即時と鳥屋の事も、その用向も忘れて了つた。

見れば色の淺黑い小男が、田舍臭い群集に取卷かれて、小高い所に立つて居た。所を隔てゝも、彼の辯說の片言は、明白に耳に取られた。

『基督は我儕がなほ罪人であつた時に、我儕のために死たまふた、玆に基督の神の子たる事が彰はれて居る。罪の價は死であるけれども、神の賜物は、我儕の主耶蘇基督に於て賜る所の永生である。』

ロイスは、顏色を變へて、喘ぎ〳〵、『救主だ！彼は救主の事を話してる！』と云つた。夫から彼女は、籠を打棄て置いて、驀地に町端の家に馳せ歸り、驚き迎へたユニケの腕を掴んで、息も絶え〳〵云ふことには、

『さあ〳〵、片時も速く、救主の福音が聽かれろ！坊やもお行き、坊は何處に居るの？』

ロイス、ユニケ、テモテ等は、此樣な機會から、端なくもパウロの口より、耶蘇の物語を聽くやうに成つた。彼等の單純な心には、パウロの人物に就いても、將又その使命に就いても、更に疑念が起らなんだ。三人は一念怖しい十字架の事に及ぶと、情迫つて泣きもしたが、靈感に溢るゝ說敎者が、恥辱と死との表象なる十字架に、榮光を被せながら、得意げに打喜ぶを見ては、彼等も共に喜んだ。

三人は又、彼の璧の癒された事を目撃したが、亂暴な群集の騷ぎに驚きて、早々家に逃げ歸つた。彼等の心靈に、斯ばかりの喜悅を與へて吳れたパウロが、狂熱なる村民の手で、危い目に遭はされようとは、彼等の思ひも寄らぬ所であつた。

彼等が溫い氣持の好い、夕日の光を浴びつゝ、家の庭に腰落着た時に、ロイスは、嗤々顏で云つた

『あの憐れむ可き偶像教徒が、パウロ樣の如な方を神樣と思つたのは、無理ならぬことだね。だが何れ將來の日に、彼等はパウロ樣より、萬事を敎はるでせうよ。』

夫から一時間後の事、村民が言つた通りに、實際最高き神の使者であつたパウロが、打據られて動きもせずに倒れて居た所へ來て、三人は泣きながら立つた。パウロが、息を吹き返しだしたのを見てロイスは囁いた、

『拙宅へ連れ申しませう、町の端ですから、何人にも分りますまい。』

斯て三人は、其夜中パウロの側に侍して、打潰ぶされた彼の心靈に、愛の酒と、同情の油とを灌ぎつゝ、傷口の手當をした。

パウロの幻想を曇らした、苦痛の雲霧が晴るるに從つて、彼はテモテ顏が、天使の夫の如に愛浮べて輝くのを意識するやうに成つた。心寂しき彼は、現拔かして少年の顏に見蕩れた。

『我子よ、卿は我儕の贖罪のために、十字架に死たまふた、而てその御名のために、余も今日死の味を試した、主耶蘇基督を信じますか？』

パウロが、テモテを側に呼んで、斯く云うと、テモテは、寢臺の下に跪づいて、『私は信じます、全心を靈して、』と答へた。

『然らば卿は、召されて與へられた、永生を確乎と保つて、之を失はぬやうにしなさい。主は今後永久に、順逆成敗何れの場合にも、卿を守り、且つ祝福を與へ給ひますぞ。』

未明の中に、パウロが、一同を呼寄せて、

『もう追付け夜が明けますし、夫に私共は、此地から幾哩も向へ行かなければなりませぬから、出

立せなければならないです。』

と云うと、ロイスは、周章狼狽いて叫んだ、

『だつて其の御體では、お旅行は出來ませぬ。傷の癒えなさるまでは、是非御逗留遊ばしませ。』

『私は私に力を與へたまふ基督によりて、すべての事を爲し得るのです。』

パウロは、肅然形を改めて、斯く答へた。夫から新禱を共にして、彼等を祝福した上、へ告別のい挨拶をした、

『神の御意に適うならば、是迄福音を傳へた邑々へ行つて、信者を慰問し、その信仰を堅めるようにしたい、と欲つて居ますから、又遠からず御目に當る事もありませう。』

二人の婦人と少年とは、曉入の薄明の中に、悄然として立つた。彼等は目に涙を湛へて、立ち行く旅人の後影を見送つた。あはれ重傷に憊むパウロは、跛引き〳〵、苦しげに歩みを運んだ。その樣を見た婦人二人は、又もや涙潸然、ユニケは、咽びつゝも云つた、

『哀哉！斯樣に御無理なされては、路頭にお斃れなされますわ。』

然れどテモテは、顏を照やさせ囁いた、

『私はパウロ樣を愛します、私は何時までも愛します。』

卅　エルサレムよりガラテヤへ

反覆常なきルステラの村民が、彼等を回心させて、死より生命に移さん、と念じたパウロをば初めに拜み、後には石で擊つて、大騷ぎを起してから、三年以上も經過した。此の三年間、パウロは、孜〻として傳道に勵み、之がためアンテオケでは教會は大に發展して、月々に會員の數を增すやうに成つたが其後猶太人の某々等が、教會の中に遣つて來て、異邦の回心者も、モーセの律法に從ふて、割禮を受け、猶太人と成るでなければ、救はるゝことが出來ない、と宣言した（使徒行傳十五〇一參照）。

『割禮なくして潔からぬ者、禁ぜられた獸肉を喰ふ者は、律法の例に從ふ可きで、左なくば呪は

ふゝぞ。』

彼等が喧々囂々、斯く主張したので、パウロは、斷乎として答へた、

『基督は我儕を贖ふて、律法に呪はれない者となし給ふた。何人も律法によりては、神の前に義とせらるゝものでない。若し律法によりて、義とせらるゝものであれば、基督の死は、無用と成る譯である。』

兩派相對して、論戰愈々甚しく成つたので、パウロとバルナバとは、エルサレムに上京し、使徒等や、長老等を召集して、彼の有名なる大會議を開いた。討論審議の結果、苟くも異邦人にして救はるゝとせば、その救拯は主耶蘇の恩惠に由るべきだから、猶太教の重き軛を以て、彼等の首に負はすべき筈でない、と云ふ事が議定された。是は全基督教國に、一大影響を與ふるに至るべき議決であつた。轉々パウロを追跡して、律法の煩累の下に、純美なる信仰の光明を消さうと勉めた、彼の執拗い猶太教主義者は、頻に此の議決を論難した。パウロは、苦々しくも彼等を呼んで、

『耶蘇基督に在りて、我儕が有する自由を窺ひ、我儕を奴隷とせんとて、私に入つて來た所の僞りの兄弟。』(加拉太書二〇四)

と云つて居る。アンテオケの教會が、誠心誠意、喜んで受たペテロでさへ、彼等の口舌に乘ゥて、その感化を受るやうに成つた。パウロが他日、彼等の浸入によりて、大なる困難と混雜とに陷るやうに成つた、ガラテヤの回心者に贈つた書簡を見ると、此樣なに其消息を洩してある(加拉太書二〇十一―七)。

『ペテロが、アンテオケに行つた時に、彼に責む可き事があつたから、私は當面之を詰めました。夫と云ふのも、ヤコブの許から、某々の兄弟等の來ない内は、ペテロは、異邦人と共に食したのに、彼等が來ると云ふと、彼は割禮を受た彼等を懼れ、異邦人より退避して、之と別れたからであります。その餘のユダヤ人も、ペテロと共に虛僞の所行をなし、バルナバも、誘はれて彼等に與するやうに成りました。

『私は彼等が、邪徑に蹈み迷ふて、福音の正道を歩まないのを見、一同の面前で、ペテロに云ひましたのは、即ち此樣です、貴公は猶太人であつて、自ら常に異邦人の如くに行ひながら、異邦人を強ひて、猶太人の例に遵はせんとするは、何う云う譯ですか？一體御互は、生來の猶太人であつて、異邦人でありませぬ、が人の義とせらるゝは、律法に由るのでない、と承知して居るのです。斯るが故に、基督を信ずるに由りて義とせられんが爲に、御互に耶蘇基督を信ずるのでせう、何となれば何人であれ、律法の行に由りて、義とせらるる者は無いからであります。』

基督を信ずるに由りて義とせらるゝ、この一言は、ペテロの尊大な衝動的の心に、何んなにか強い刺激を與へたらう。彼は必ずや、祭司の長の庭で、敬虔もなく主を否んだ、彼の夜の事や、主が身を振向けて、ペテロを見たまふ時の、その御目付等、幻影に見たであらう。さては又、三度までも、『ヨナの子シモンよ、爾我を愛する乎、』と尋ねられた事を、三度までも、『我羊を牧へ、』と諭された事共も、壯嚴に思起したであらう。

他日ペテロは、『ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アシヤ、ビテニヤに散在せる異邦人』に書簡を贈るに當りては、此樣な風に謳めた、

『讃むべきかな神、我儕の主耶蘇基督の父、かれその大なる矜恤を以て、我等を再び生み、われらをして耶蘇基督の甦へり給ひしことに由りて、活る望を得させ、亦われらの爲に、天に藏めある、朽ず汚れず、衰へざる嗣業を得しめたまふなり。爾曹信仰に由りて、神の能に護られ、既に備へある所の、末の時に顯はれんとする救を得るなり。之に由てなんぢら喜べり、今暫く各樣の艱難に遇て憂へざるを得ずと雖も、却りて喜ばなせり。爾曹の信仰を試みらるゝは、壞る金の火に試みらるゝよりも貴くして、爾曹耶蘇基督の顯はれ給はん時に、稱讃と尊貴と榮光とを得るに至らん。爾曹耶蘇を見ざれども之を愛し、今見ずと雖も信じて喜ぶ、その快樂は言ひ難く、且つ榮光ありて蓋なんぢら信仰の効、即ち靈魂の救を得るに因る。

『爾曹の中にある神の羊の群を牧へ……なんぢら牧者の長の顯はれん時に、壞ることなき榮の冠冕

を得ん……互に皆相服ひて謙遜を衣よ、夫れ神は驕傲者を拒ぎて、謙遜者に恩を與へ給ふなり……諸の恩惠を予ふる神、即ち爾曹をして、暫く苦を受る後、基督耶蘇にある窮なき榮に入しめんとて爾曹を招きし神、爾曹を全うし堅くし強くして、基の上に置き給ふべし。願はくば榮光と權力世々神にあれ、アーメン。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其後パウロは、バルナバに云つた、

『また出て曩に主の道を宣た所の邑々に往き、兄弟等の近狀を視て來ようぢやありませんか。』

『喜んで御伴しますが、何卒從弟のマコも同行させて下さい、御互の勤勞の上に、その要があるでせうから。』

バルナバが、斯く答へたけれど、パウロは、

『曩にパンフリヤで働いた時に、我儕を棄て去つた如な者を伴ふことは、宜しくないと思ひます。』

と言切つて、バルナバが、何と云つて懇請しても、切論しても、毫もその意見を枉げないばかりか、彼は遂に、

『此事に就いては、御互の意見が一致しないですから、貴公は御勝手にしなさい、私も自分の思う通りにしますから。』

と云つた。そこでバルナバは、マコを伴ふて、クプロに航り、パウロは、シラスを撰び、兄弟等より己を主の恩に托れられて、スリヤに出立した。

■ハネ、マコは、兩友が疎隔の因と成つたので、而もパウロとバルナバとは、是より終生共に働くことをしなかつたので見れば、彼等の疎隔は永續的のもので、あつたので彼は今更の如に耻入つて、腸を斷たるゝやうに思つた。

『私は神の御助によりて……不束ながらも、全然主の御役に立たない、と云うでもなからう、と思ひますから、將來の行動によりて、之をパウロ樣に證明しませう。』

青年マロは、讓歩嫌ひの使徒が、同行を許さぬ、と宣告した時に、正直にも恥て、その顏を光らながら、斯く叫んだ。彼は能く其言を守つた。後年彼は、壯烈なる元氣を以て、獻身犧牲パテ、の大活動に參加したこともあるし、第二福音書に、彼の名を冠ぜらるゝやうにも成つたし、剩にパウロさへも、コロサイの教會に彼を推薦して、

『マコが若し諸君の所へ行くならば、彼を受て下さい、彼は神の國の爲に働いた、わが同勞者の一人であつて、私は彼に由りて、安慰を得た者であります。』

と云ひ、又晩年羅馬の獄屋から、テモテに書簡を贈つた時にも、

『マコの奉事は、私の働の上に益となるから、彼と一緒に來て下さい。』

と云つて居る。

パウロとシラスとは、スリヤとキリキヤとを經て、銳意諸教會を堅うすることに勉めた。ルステラに行きては、前約の如くに、ロイスとユニケとを其家に訪ふた。彼の少年テモテは、最早少年ではな

かつた。彼は體軀も充分に出來て居たが、主耶蘇の恩惠にも育ち、その智識にも熟して居た。パウロが、村の市場で人民を教へた時に、彼は此の若い弟子の活動振に、大に見る可きものゝあるに氣附いた。隣村のデルベに於ても、四十哩も向のイコニオムに於ても、すべての兄弟等の間に、その令聞を傳へられて居た。

『主の御用の爲に、令息をお獻げなさらないですか?』

とパウロが、ユニケに尋ると、寡婦は涙ながらに、答へて云つた、

『主若し愛兒をお召し遊ばすと致しますれば、何うして御意に逆らうてなりませうぞ。』

そこでテモテは、教會の全會衆の前で、按手の禮を受ることに成り、パウロと長老等とは、肅然として其手を彼の頭上に按た(提摩太前書四〇十四)。其時よりして彼は、パウロの忠實なる伴侶として、何所へでも伴うやうに成つた。パウロは、衷心彼を愛して、之を呼ぶに、『信仰に由る我が眞の子。』を以てし、又實に夜も晝も、祈禱に斷ず懷ふ所の、『我が愛する子。』と呼ぶに至つて(提摩太後書一〇二

—五)。

其後久しからずして、三人は相伴ふて旅程に上り、邑々に往きて、エルサレムに在る使徒等や、長老等が、モーセの律法に關して議定した條規を守るやうに、と各教會に諭告した。

ガラテヤに於ては……滯在せずに通過する積りであつたなれど、三人はパウロの難病のために、數月間逗留しなくてはならぬことゝ成つた。此の事に就いて、パウロは、自ら哥林多人に書簡を贈つて、此樣なに言つて居る、

『わが傲ることなからんが爲に、一の刺を我が肉體に予ふ、即ち我が傲ることなからんために、我を擊つサタンの使者なり。我之がために、三次主に之を我より離さんことを求めたり。主我に言ひ給ひけるは、わが恩なんぢに足れり、蓋わが能力は、弱きに於て全くなればなり。』

而て又パウロは、苦難の中で建設した、ガラテヤ數會に書簡を贈つて、此樣な事も云つて居る、

『曩に我弱き身にして、爾曹に福音を傳へしことは、爾曹の知る所なり。なんぢらを試むる者の我身に在りしを爾曹は卑しめず、また厭はず、反つて天使の如く、基督耶蘇の如くに我を待ひたり。なんぢら其時の福は如何ありしや。われ爾曹に證す、若し爲し得べくば、爾曹自身の目を抉りて、我に予へんとまで願ひたり。』

此樣な文言のあるがために、此の『試むるもの』と云ひ、此の『刺』……此の『鋭い杙』と云ふのは、惱みて震うパウロの肉體に、時々深く打込れた物であつて、是は今も猶ほ、パウロが傳道をした諸地方で流行する、怖しい嫌衝を起して、眼の潰爛することもある、難症の眼病であつたらう、と思う者が多いのである。がその臆測の當不當は兎もあれ、神の恩惠は、パウロの身に足りて、その力は

パウロの弱きに顯はれ、彼は異邦人なるガラテヤ人の前に在りて、云はゞ十字架に掛りたまへる耶蘇基督の畫をば明白に且つ筆太に畫いたやうなものである。實にや、『猶太人また希臘人、或は男、或は女、或は奴隷、或は自主。』彼等の中の多くは、皆その疲れた目を擧て、自己とその罪惡とを見ずに、信仰を賜り、且つ之を完成して下さる主耶蘇を仰ぎ見て、その救拯を得るに至つたのである。

卅一　ピリピの傳道

三旅人はガラテヤを引上て、遂にトロアスの舊都に來た。『愛する醫者』と呼ばれたルカが、一行に加はつたのは、此地であつて、彼は此後殆んど切目なく、大使徒の伴侶と成つて、旅行記編纂の任に當り　パウロの勤勞、受難、捕囚等諸事の記錄に勉めたのである。

トロアスに於ても、彼等は暫く逗留した……耶蘇の靈は、彼等がアジヤと、ビテニヤとに傳道しようとした計畫を許し給はなかつたので、何方に行つて可いか分らないから……或夜パウロは、異象を見た。即ち羅馬武士の盛裝した、人の姿した者が、臥床に横はれるパウロの側に立ち、怪しみて打見るパウロに向つて、その手振に懇請の意を讀ませながら、『マケドニヤに渡つて、私共を助けて下さい、』と云つたのである。ルカは簡潔に記して、此樣なに云つて居る、

『彼が之を幻に見た後、我儕は誠に主の我儕をして、マケドニヤ人に福音を傳へしめようとて、我儕を召し給ふたものだらう、と推量つて、直にマケドニヤに往かうとした。

見ればトロアス港内に碇泊して居た船が、將にネアポリスに向つて、出帆しようとする所であつたので、一行四人、パウロ、シラス、テモテ、ルカは、之に乘り込んだ　折好くも南風は順に吹いて、船は飛ぶが如く、本土が右に、テネドス島を左に、何時しかイムブロス島を後に見て、日の正に暮る頃、峻峰聳ゆるサモトラケの島陰に着き、此所に碇泊して、一夜を明すことにした。翌日は航路を北西に取りて、豫定の如くに、ネアポリス港に着いた。ネアポリスより九哩、坦々たる敷石の公道傳ひに行けば、羅馬の軍用殖民地なる、ピリピと云ふ都會がある。一行は兎や角と協議の末、路をパンザアスの山道に取り、地味肥えて、薔薇の花咲く平原に出で　やがて『百泉の地』と呼ばれた、ピリピに安着した。此の地は昔時アレキサンドル大帝の父、ピリポが、國境を犯すトレースの山民を防がんがために、守備兵を配置した所であつた。又彼のブルタスと、カシアスとが、シーザーを殺した餘勢を以て、大軍を率ゐて進み、アウガスタスと戰ふて、その鋭鋒に挫かれ、不面目にも敗衂の果、此世

の仇敵の追ひも及ばぬ、冥土に落ちて行つたのも、此のピリピであつた。

羅馬の民族たるを誇とせる殖民が、劇場、浴場、宮殿、神殿、さては宏莊なる住宅に至るまで、出來得る限り、久遠の母京、羅馬の眞似をしようとて、慘憺たる苦心に成れる、此の小都會の肩摩轂擊の眞中に、一行四人は飛込んで來て、何事もなく二三日を過した。何所を見ても、異教の神々を祭れる、大理石の神殿の許多ある中に、エホバの禮拜に捧げた會堂とては、一個所も見當らなかつた。繁忙なる市場にも、街路の辻々にも行き交ふ人々の中、その面にイスラエルの銘打てる者には、一人として出合はなんだ。遂にパウロの云ふことには、

『此地に何人か、眞の神を拜する者が居るならば、河端の祈禱の場所で、彼等に逢はれるだらう。』

そこで四人は、大門を潛つて都會を出た。此の門は、クラウデアス帝が、新に殖民地に下賜した物で、工事未だ成らずして、工夫等は忙しく働らいて居た。指して行くカンヂテズ河は、名にし負ふ激流で、滔々漠々、宛然瀧の水の落つる如であつた。河に通ずる數石の土手道より遠からぬ所に、彼等

はその豫想の如く、爵き祈禱の家のあるを見た。是ぞ即ち會堂ならぬ祈禱所で、河に面して建られた、屋根のない、一時的の建物であつた。

見れば此の慘な構の中に、數名の婦人連が、地味な外套で面部を包んで、頭を垂れて、蹲踞んで居た。彼等が玆で斯うして祈つたとすれば、定めて婦人に有勝の、靜な悲しげな口調で祈つたであらう。此の淋しい覆面者共の樣子見て、パウロは、何か心に感じたらしく、『彼等に話して見よう、』と云つた。

斯て皆で四人の婦人等が靜坐すると、パウロは、極單純な辭を以て、福音を說き始めた。遠き猶太の國で、不思議な、罪の無い生涯を過された耶蘇の事、その十字架上の死や、神秘な復活や、昇天等に關する物語をば、パウロが、懇々と話すと云うと、婦女共は一人々々頭を擡げて、一言半句でも聽き洩しては、と云はぬ計りに、面部の被を押し除た。靈感に溢れたパウロが、說き去り說き來つて、此の耶蘇を信仰する事により、過去一切の罪惡の赦さるると云ふ事や、耶蘇の死によりて、墳墓の悲痛は通り越して了つて、現世の沙漠に、永生の泉が流るるやうに成つたと云う事や、而も何人で

も求むる者は、自由に此の泉の水が掬まれると云ふ事など、仔細に福音を説き聽かせると、今まで默つて聽いて居た連中は、俄に聲を揚げて、神を讃美した。中に丈の高い立派な婦人が居たが、彼女は銳立つて叫んだ、

『エホバよ、汝は我神なり、われ汝崇め、なんぢの名をほめたゝへん、汝さきに妙なる事を行ひ給ひたればなり。我は汝の宣ひたる事を喜びて信ず、蓋我心自ら御言の眞實なることを證しすればなり。』(以賽亞書廿五〇一)

全都を擧て、浮華放逸なるピリピに於て、四圍の惡風に染ず、安息日を覺えて守つた、篤信なる婦人の一團に、神の使者の遣はされた事は、深い聖旨より出たるものであつて、歐洲に於る最初の基督者たるの光榮は、染料の販賣者(譯者曰く、使徒行傳に於ては、紫布の販賣者と記してある)たる、無名の一婦人に與へられたのである。彼女はパウロの尋ねに對して、溫雅に答へた、

『私は猶太の者ではありませぬ、私はルデヤ州は、テアテラの邑に生れた者でムりまして、名は州の名と同じく、ルデヤと申しまする。幾年も前に、私は猶太人の信ずるエホバより外に、眞の神はない、と教はりまして、先祖の祠々を棄ました。夫でも猶太教の律法は、盡く之を完全に守ると云う事は、到底不可能の如に思はれますし、而もその一點一畫を守り得ないならば、その守る所まで も、皆徒事と成る……私は其樣なに教はりました……と申すことですから、今では之を酷い重荷と見るやうに成りました。』

貴い福音の內容が、盡く說明せられて、充分に腹に入ると、ルデヤは、洗禮を受けることを快諾して、簡明に云つた、

『私と家の者と、皆一緒に受けたうムります。家には紫や紅や、色々の値高い染料を調製させるために、多勢の下女下男を雇使つて居まするが、疾くよりエホバを拜むやうに、と教へて置きましたから、今は皆異神を拜みませぬ。主耶蘇若し私を受けたまふならば、必ずや彼等をも御受け下さるでせうと存じまする。』

そこでルデヤは、家の者と共に洗禮を受けた。式果てから彼女は、一行の宿所は何處かと尋れた。彼等がその宿所……都會の場末の惨な代家……を明すと、彼女は無理強に懇請した、

『皆樣若し、私な主に對して忠信な者と御判斷がお附きに成りますれば、私方へ居らしやつて、御逗留なさつて下さいまし。』

耶蘇は口づから、何の邑里に入らうとも、好き人物を尋れて、其地を出るまでは、福音宣傳のために、其家に留れ、と弟子達に命じ給ふた事であるから、一行は強らるゝがまゝに、ルデヤの家に行つて、滯在することにした。而て主の約束したまひしが如く、彼等の祈ふ平安は、ルデヤの家に與へられた。

此の同じ安息日の朝の事、此所とは全く方角違の所で、一人の少女が、臭氣紛々たる中庭の一隅の地上に平伏して居た。彼女は被物も附けない頭なば、熱い日光に曝しても、一向で氣に掛からないやうに思はれた。一群の蠅は、宛然運命の織機織る、見えざる手で投る梭の如に、變な鬱みのない力で、煌めく日の光を浴びつゝ、ぶんとも云はずに、彼方此方と飛び交ふて居た。彼女はその鈍い、突き出た黑い眼で、此の蠅の群を睜つて居たが、折々はきい〳〵と叫びながら、痩せこけた蒼色の手を面上で打振るのであつた。

庭の左の方にあつた、低い天井の室からは、大きな笑聲と、碗や皿の音とが聞えて居た。やがて一人の婦人が、大皿に一杯食物を盛つたのを携へながら、庭に出て來た。

『メーラ！さあ御喰り、』

彼女は鋭い聲で呼んでも、少女は身動きもせなんだ。そこで彼女は、ぶつ〳〵言ひながら、づか〳〵と驅けて來て、荒々しく少女を揺り起し、忿然として云つた、

『狐憑き奴が！御前は耳も目も利かないの？さあ御喰りと云へばさ。』

あはれ少女は、あゝと溜息吐いて、面部に垂れ掛つた、縺れた黑髮を撥除けながら、見るともなしに眼を大皿に向け、何も言はずに、之を婦人の手から掴み取つて、畜生見たいに、唸り〳〵、意地汚

くも貪り喰ふた。婦人は之を見て、無禮千萬にも、素足で少女を蹴飛しながら『畜生』と呶鳴つた。

折柄ぶらりと庭に出て來た二人の赭顔漢、その一人は、組合せた革の鞭の短いのを携つて居たが、彼は少女の側に行つて、串戯に之をひゅう〳〵と鳴らした。少女は叫きながら跳起きた。

『旦那樣、厭です、厭です、厭です！打つては厭です、言ふ事を聽きます。參ります…　參ります！はい、色々な…色々な事が分ります、旦那樣　…奥樣、夫を皆申上げます。』

鞭を携つた男は、わつと吹出して笑ひながら、呶鳴つて云つた、

『これ女郎、お前はやつぱり旦那が分つたな。さあサツサと起きろんだ、もう廻つて行く時間だよ。宜いかね、今日こそはシツカと聲を張り揚げてやつて呉れな、啞者の眞似なんかして呉れな。』

少女は眼を光らせながら、出鱈目に叫んだ、

『あい、あい、畏りました、啞者の眞似なんか致しませぬ……夫どころですか、轟々と廻轉する車輪、ざわ〳〵と流る、水、炎々と燃……燃え上る火！』

今一人の男は、彼の前に立つて、兩臂を張つて、少女を見詰て居た婦人に向ひ、舌で頰を突張りながら、彼女に目示して、『今日は女郎が上元氣だ！』と云つた。

『夫ぢや女郎を連れてゐらつしやい、ちつとお金を儲けて來て呉れなければ、彼女はもう内に置けませんぜ……彼の汚い畜生奴は。』

婦人は斯く云つて、身を屈めたかと見ると、少女が魂消て取落した食物の切端を拾ひだした。二人の男は、氣毒な狂女を先立て、街路を下へ驅けて行つた。彼等はてく〳〵と歩きながら、大聲で云つた、

『貴い旦那樣方や、美しい奥樣方や、さあ何方でも、さあ皆樣、唯人でない女豫言者メーラに、將來の事を占てお貰ひなさい！天の靈氣を吸うたメーラの申す事は、デルフアイの御託宣よりも、一層神妙でムりますぞ！何か御紛失の物でもありますか？メーラには、其物の所在も分りますぞ！明日の投機が當るか當らぬか、疑惑つて居らつしやる方がありますか？メーラより、御心添致すことが出來ますぞ！御病氣の方がありますか？メーラが、癒して進ることが出來ますぞ！』

彼等は此樣なにして、諸街を彼方此方と、當所もなく歩き廻つたが、折々は怠惰者や、輕信者に點頭かれて、足を止めた。怖しい鞭を旨く揮り廻すと、狂女は續けざまに囈語を喋るのであつて、男共はその手に引掛けた事柏に合うやう、言巧に之を譯解した。日も將に暮なんとて、彼等が都會の大街道を通つて居た時に、例の河邊に出て居た、男女の一團に落合つた。その刹那狂女は、團中の丈の高い婦人が、熱心に連中に話して居た事をは、その鋭い耳に挾んだ。それから彼女は、金切聲で叫んだ、

『救拯の道を宣て下さる、至高き神の僕！至高き神の僕：救拯の道を宣て下さる方々！』

少女は一生懸命に、亂れて垂れる髪を毟りながら、繰返し〳〵頻く叫んだ。忽にして群衆は、現場に蝟集して來た。少女の非道な主人は、銅貨銀貨の山を掴まうと、鵜の目鷹の目で驅け出した。日も愈々暮れ果て、彼の男共が、歸宅を急ぐ途上、その一人の云ふことには、

『吃度だ！今日は運の神樣が、豐富に惠んで下さつたのだ。思出して見ると、僕は前方彼の奴共を見た事があるよ。大丈夫猶太人だ……狡猾い野郎共だ、が内の此のお寶、へイ、此のメーラ程に利口な筈はなからうで。』

彼が斯く云つて、少女の肩に手を置くと、少女は身震しながら、取止めもなく囁いた、

『至高き神の僕！至高き神の僕！』

『然うだ〳〵、娘や、明日も夫を覺えて居て吳れえ、又旨い事もあらう』

翌日一日どころか、其後來る日も來る日も、此の薄命兒は、その主人に追立られながらも、祈禱所に往復するパウロと、その同行者との後に尾して、千篇一律『此の人々は、至高き神の僕だ！救拯の道を宣べて下さる方々だ！』と其心を全然捕へて了つた、と思はるゝ如に、此事ばかり叫んだ。無爲安閑の群衆は、彼女に附き纏ふて來て、忌はしくも亦口汚なく、呪ひつ笑ひつ、彼女の口眞似をした。

パウロは、事の眞相を悟つてから、奴隷の慘狀を思うて、哀憫の情に堪へなかつた。そこで彼は、突然振返つて、少女が取憑れて居る、と人々の思つてる惡魔を呼んで『我耶蘇基督の名に由りて命ず、

此の婦人より出よ。』と云つた。

すると立所に、狂女が甲走つた聲は、淀みて默し、その狂態は失せ、怖しい目附までも和いで、嬉し涙がほろ〳〵と、火の燃えてる如な頰を傳ふて落ちた。彼女の主人は、斯と見て、怖しい鞭をひゆう〳〵と鳴しながら呶鳴つた、

『メーラ、メーラ！これ娘や、何所か加減でも惡いのか。きゃん〳〵ぬかす猶太人なんか、決して怖れろでないぞ！』

猫も杓子も寄つて居た、群衆の顏をば、夫から夫と見廻してから、少女は主人の鬼面を覗きながら、しとやかに云つた、

『私は何うして此樣な所へ來たんでせう？もう是非共家に歸らんければなりませぬ。』

『ふうん〳〵！彼の猶太人は魔法師ですぞ。大將、大事のお寶を臺なしにされましたね。是から娘は貴公の商賣のためには、一文にも成りませぬわい。』

群衆の中から、或者が金切聲で、斯く叫ぶと、鞭を携つた男は、大聲で云つた、

『馬鹿云ふんでないぞ！神かけても、女郎を打宥めして、靈を歸して吳れんだらう。』

夫から彼は、鞭を振り翳して、少女の纖弱い頸や肩を亂打した。少女は不憫にも、泣くやら呻くやら、慘な中にも、例の嘸話は云はなんだ。

『〳〵〳〵〳〵、遣られて了つたな、宜いねえ、此上は彼の呪はれた猶太人を打つて懲してやり給へ。』

と男の同類が、さも憎らしげに呶鳴ると、其所へ一人の肉附の良い婦人が出しやばつて來て、聲高に云ふことには、

『能く仰有りました！惡戲者を捕まつて來て、羅馬の律法を味はしてやりなさい。』

一聲高く叫ぶと見れば、奴隷娘の主人等は、後に續く彌次馬の勢を得て、祈禱所の方に突進した。一時間も經たぬ中に、憤激した暴民は、市場に黑山を築いて、旅人等の糾彈處罰に闕し、早く委細の樣子を知りたい、と急つて居た。夫が中へ、狂女の主人の一人が、勿體振つて、群衆を押分けながら

遣つて來て云ふことには、

『猶太人？ 然う、あれは呪はれた、いいおせつかひの乞食連だ！ 一つ懲しめて遣つたわい。彼等は今後は能つく考へて、滅多に他人の商賣に干渉するやうな事はあるまい。懲めの鞭と仰有る？ 憚りながら嘘は申さぬ、健か殴つて呉れましたよ。淋漓と血の出るのを見て、氣持が好うがんした！ 而て奥の獄に繋いで置いたから、彼等は次第に氣力が失せて、何も心配はなく成るでせう。』

彼は民衆と一緒に成つて、奴隷の事は全然忘れて居たが、今は之を捕へてやらうと思ひながら、元の道へ出て、歩き〳〵獨り囁いた、

『若し女郎が本氣に成つたとすれば、他に色々と使ひ樣もあらう。財産は貴い物なので、見す〳〵廢物とする譯には行かないな。』

ところが少女は、其日も翌日も、一向で目に掛らなつた。彼女は泣きの涙で、茫然彷徨い出て、河に行く大門を拔け、奔湍の轟々として不斷に響く、壯嚴なる音調に誘はれながら、進み進みて、河岸

の屋根の無い小屋に這入り、やれ〳〵と打寛いで溜息を吐き、どつかと坐した。何となく嬉しき思の胸に滿ちて、彼女は晴れ渡る青空を仰ぎ見つゝ、婉かに囁いた、

『神樣……神樣！至高き神の僕！』

『おや、誰かと思へば、御前樣ですか？』

少女は喫驚して喘ぎ〳〵、跳起つて見廻した。青年は至極柔和な、而も悲しげな顔付して、彼女を凝視ながら、恬靜な口調で、『彼の方が、御前樣を癒した時に、私も彼所に居合せた一人です。』と云つた。夫から又青年は、俄に眼に涙を湛へて、『私……私は、彼の方が殺されたんでなからうか、と氣掛りです。』と云つた。少女は驚破と跳上り、元の狂氣染みた口調と身振とで云つた、

『斯うして居てはなりませぬ。若し彼の方が殺されなさつたとすれば、私も死にます。』

『否え、是から連れて行つて進る所があります……左樣した方が、一等彼の方の御意にも適ひます。實はね、ルデヤ樣が、御前樣を探して來るように、と私に申されました。』

斯て薄命なメーラは、身を寄する家を有つことに成つた。夫と云ふのも、彼女の主人共は、その財産の一つであつた彼女が、不思議な事から、抱へて置ても、金に成らない者と成つたので、之を手放しするが、萬更厭でもなさゝうであつたのと、殊に又彼の慈善心の深い、染料屋のルデヤが、少女の身受の爲に、多額の金子を出して呉れたからである。

彼の野郎共は、パウロとシラスとを毆打して、之を拘禁するまでの運を付けた翌日、最も面白から ぬ破目に陷るやうに成つた。即ち彼等は、市の役人共に召喚されて、此通りに嚴重な申渡しを受けた

『其方共が、世に害をする猶太人だ、と誤つて官に告發した、彼の旅人共は、取調べて見ると、羅馬の市民と判明致した。而て之を毆打することの無法である位は、其方共の合點の筈である。然れば其方共は、再び斯る不心得をしないために、罰の何程辛いものであるか、自分の體で試して見るが當然であるぞ。』

斯く申渡された揭句、彼等は役人の命により、獄屋の深窓に押込められて、パウロとシラスとが、夜半讃美の歌を歌つた現場で（使徒行傳十六〇廿五）、手足に枷の憂目に遭つた。夫から此の惡漢共は、來る日も來る日も、斯る慘なさまで呻吟したが、パウロとシラスとは、ルデヤの家に往き、信徒に遇つて勸めをなし、テモテを伴ふて、新なる旅程に上ることゝつた。

卅二　アテンスに於ける旅人

所はアテンス、時刻はもう正午であつた。市場の眞中に据えてあつた、素敵な水時計は、正しく午時を示して居た。水時計を製作して、之を据え付た者は、時計の萬一の狂ひに備へる積りなのか、但しは疑念深い者に、その手工の完全を證する積りなのか機械を据付てあつた、美しい小な建物の外側に、入念にも日時計を裝置へてあつたが、その正確な指針も、同じく正午を示して居た。

人間の自然に食物飲しく成る時刻なので、アテンスの市民は、皆空腹であつた、せつせと商ふて居た水菓子屋では、水に冷した甜瓜の片や、早熟の葡萄の房が、格別に速く捌けて居た。肉屋と菓子麪

麭屋との前では、群なす顧客が、焦躁しさうに待つて居た。一錢に三箇の駄菓子を賣る者でも、再三その平籠を空にした。

赤帽子を阿彌陀に被つて、竪琴を革紐で肩に吊した青年は、甜瓜を一片添へて、菓子の九箇も喰つた、が輕い財布を弄りながら、口惜しげに頭を垂れた具合で見れば、未だ空腹じさうに見えて居た。

『忌々しい、幾何喰つても腹の蟲が承知せぬわい。何だ、金は無いらしい、だから御馳走には有付かれねえ。だが待てよ、羅馬への道は、一筋ぢや、ないて。』

青年は面を顰めて呟きながら、づか〳〵と、肉屋の露店の方に驅け付た。見れば涎を啜る陳列品の許多ある中に、燒鳥、牛肉や羊肉やの大片、犢の肉や豚肉やの油煎、さては多汁い生菜の山と積んだ物があつて、夫が合間々々には、野菜を煮込んだ汁の鉢が、ぽつぽと湯氣を立て居た。意地汚い大勢の者が、此の素晴しい御馳走を喰ひ荒した後であつたに相違ないが、餓鬼の口に涎を儘させる丈の物は、未だ大丈夫殘つて居たのである。竪琴を携つた男は、その大膽な黑い眼で、商人を見詰ながら云つた、

『もうし、シモン樣、此の彈唱者、オネシモの面には、屹度見覺があるでせうね。私は君の店で、吸物を幾杯吸つたか、その數が知れないですぜ。ところで今日も一杯吸ひたいんです……口惜しいことには、昨日喰つた飯の味を覺えてるもんだから、今日も食ひたいんですわ……併し大將、腹も財布も一緒に空々となれば、誰だつて必ず一奮發しなくちやなりませぬわい。音樂で銀貨が儲からぬとあれば、筋肉を働かして、稼いで見なくちやなりませぬわい。時にその汁を一杯吸ほして御呉んなさい……私が吸つて進げなきや、多分腐つて了ひませうぜ……その代に此の竪琴を置いときますから、今夕受出しに來るまで、之を預つて置いてお呉んなさい。此の樂器はね、貴店の御馳走の賞本全部に、大貨幣を一枚添へた程の價値がありますぜ。是れ此の通りに、銀で捲いてありますからね。』

商賣柄で肥滿した、赤面の男であつた肉屋は、返答の代りに、唯ぶう〳〵云つた。夫から彼が、

竪琴を取らうとて、手を差出すと、自稱の顧客は、さつさと之を渡した、肉屋は脂肪だらけの指で、絃を彈きながら、唐突に叫んだ、

『ふうん、屹度アテンス製でないな、でも音色は惡くないです。』

彼は又、樂器を持上て、嚴密に調べた上、口を窄めて云ふことには、

『コロサイ製だ！もうし、若衆、お前樣は何うして、之を手に入れなさつたんですか？』

オネシモは憤つて、顏一面と頸までも眞赤にして、氣味惡い風して、肉屋を睨みながら、低い語調で、『竪琴は返して貰ひませう、』と云つた。

『もうし、其樣なにお急きなさるな、そんなに御急きなさるな。道に外れぬ事を聞いたつて、惡い事ぢやあ！ますまい……之に答へて下さつても可いでせうがれ。さあ汁を召しあがれ、四錢は夕方持つて來て下さい、琴は微塵も損まないやうに、大事に預つて置きますから、其時に返しませう。』肉屋はもう決心したらしく、樂器を側に置いた。

夫から彼は、別の顧客が、ちりん〳〵と面白さうに、胴亂の金を鳴せながら、金の有るのは受合だ、と思はせ振して這入つて來たので、之を待過さうと起上つた。

オネシモは、決心しかれた如な風で、一寸立竦んで居たが、やがて陰欝な顏付して、汁の鉢を引寄せ、見る間に、つる〳〵と啜つて了つた。夫から匙を回しながら、打切棒に、『復夕方遣つて來ますぞ、』と云うと、肉屋は冷淡に、『御勝手になさいまし、』と答へた。夫から又彼は、後から來た顧客が、さて一興とばかり、音樂者の後姿を一瞥するのを見て、之を呼びながら、語を續けた、

『もうしお客樣、立派な樂器でせう。若し彼の野郎が歸つて來なくとも、私には別に損は厶いませぬ……實の所是は私から求めてした事ではありませぬよ。』

やがて肉屋の大將シモンは、獨法師となつて、見るともなしに目を擧て、市場の亂雜極る廣場の上に、峨々として聳るアクロポリス城を眺めた。城中眞白く鄰くは、パールテノンの神殿、彼は正に夫が影に生れて、幼時より目に見古したれば、奇觀も奇觀と思はれずや、之を眺めながらも欠伸して、

例の琴を引寄せ、滅多矢鱈に掻き鳴らした。

其間にオネシモは、パイリアス港に通ずる、左右に長い城壁を築いた賑な街道に唯一人。快々として、潤歩する途上、漫々たる港の水上に、點々碇を打つて居た橈走艘を心配げに眺めながら囁いた、

『二時間計でも、荷卸の仕事が出來れば宜いがな。若しか出來なんだら……其場合は何うしよう？何んな事に成つても、もう奴隷は御免だぞ。』

彼は頭を後に振上て、呵々と笑つた。笑つても見聞の悪い、不興な笑聲なので、はてなと怪しみて彼を目送する者は、一人や二人でなかつた。その一人が淡しげに、『向の野郎は、御機嫌好しと見えるな、』と云うと、今一人世故に長た者は、『彼は多分氣狂ひだらう、』と云つた。彼等が臆測の對象は、矢張歩行を續けながら、氣毒な感想の筋に心を馳せて居た。

『己はもう身に主人有つ奴隷ではない、が山と積む必迫や、心配苦勞や、恐怖豫覺などの奴隷と成つた。友もない、家もない、神もない、憫然な逃亡者だ。』

斯く謂つたのを見れば、オネシモは、憂世の厭な經驗の頁なば、精出して勉強して居たらしいが、前も之によりて、大した慰安も見附からなかつたやうである。

此時は既う海岸に着いて居たが、彼は埠頭の人込の中へは押掛けないで、今し卸した商品の山に凭れて、長い間機嫌惡るく、頻繁に出入りする船を見詰て居た。

『皆樣、私は此上御世話頂くことは要りませんから、ペリアに歸つて、私の同勞者である、シラスとテモテとに、出來る丈速く此所に來るやうに傳へて下さい、私は此所で彼等を待合せることにしますから。』（使徒行傳十七〇十五）

オネシモは其側で誰かゞ、腹から絞り出した如な、響きの好い聲で、斯く云つて居たのを聞付けて、稍元氣を取直したものゝ如く、早速振向いて、彼の側に蹈止まつた三人を凝視た。三人は明白に、向の船から上陸したばかりの土地に馴れない人達と見えた。刹那の衝動に喰られて、彼は急に足を進め、恭々しく赤帽子を脱いで、三人にお辭儀をした。

『、、、、もうし、皆様は始めてアテンスに來つしやつたのでムりますか？さう……左様でムりますか？都市の御見物かたく、お旅宿や、商店や、市場などに案内させる者が、、、イ御入用ではムりませんか？此のオネシモが、御用を申聞かる譯には參りますまいか、アテンスの事でしたら、夫ば〳〵委しいものでムります、、、もうし皆様、屹度私に勝る案内は有りませぬ。』

前に話をした彼の旅人は、之に答ふるに先ちて、暫時鋭い眼で、オネシモを視た。旅人は年齢の故か、或は病氣の故か、稍胴の風んだ小柄の男であつた。頬髭と一緒に成つて居た鬢の縮髪に、夥しい白髪の交つてた所を見ると、彼の若年でなかつた事が、一層能く確められた。濃い眉毛の下に光つた、灰色の眼には、彼の確乎とした、而も深切な人爲りであることが讀まれ、顔中の表情は、すべて慇懃と愛嬌とを示して居た（註を見よ）。旅人は身を切る如な海風を防がんために、長く御暴に着古したに違ないと見えた、廣大い外套が、厚羅紗の上衣か見たいな物に包つて居た。オネシモは、彼の打扮を知らんではなかつたけれども、不識我お辭儀を繰返した。

【註】使徒パウロの風來に就て、此の記述を爲したのは、第三世紀より、第六世紀に互りて、世に流布された傳説を典據としたのであるが、哥林多後書十章の十節より、十六節までの記事も參考した。

『君はアンテオケに居た事はなかつたの？』

と旅人が、物靜に尋ねると、オネシモは、荒々しく跳立つた。夫から顔を眞赤にしながら、吃り〳〵云つた、

『ア……アンテオケに？何處で……如何して……』

『あのそれ、八年計も前の事、オロンテイズ河で、舟に乘せて呉れたんではないですか？』

オネシモは、旅人に始めて面會した時の事を追懐しながら、頭を垂れて『如何さま、乘せて進ましたン』と答へた。夫から又語を續けた、

『シンゴン街でなされた御説教も拜聽致しました、が御説教のあつた爲に、石や棒を投ました連

中には加はりませんでした。私はあの當日、譯あつて……ウウン、仕事の都合上、アンテオケを出ました。でも別の所でもですが、アテンスでも、御案内が出來るのでムります。』

『一行の者に要談をして來るまで、此所に待つて居てお呉れ。夫から早速旅宿の案内を頼みませう、而てお禮には四錢進げる。』

半時間も經つてから、不釣合な二人連は、パイヤアス港より、アテンスの市に通ぜる、長い街道を上つて行つた。オネシモは、運漕業の盛んな辻々の周圍に、宛然八幡藪の如に入組んだ街々を指しながら、『あの海岸に旅宿があります、』と云つた上に、旅人の着古した衣物をちよこつと見て、『安宿でムります、』と云ひ添へた。やがて旅人は、外套を脱いで、之を腕にしながら、靜穏に云つた、

『安直い宿が期望です、が市中に宿所を定めたいんです。』

二人が長い阪を登つて居た時に、旅人の氣遣が苦しげで、痩た顔が全く蒼白く成つたのを見て、オネシモは、打切棒に云つた、

『外套は私が持つて進ます。ツイ御病氣に成つたんでせう。』

『前方病氣でしたが、有難い事には、今は直つてます、神に感謝しなくちやなりませぬ。』

旅人が斯う答へると、オネシモは、公然冷笑しながら云つた、

『何神様にですか？アテンスでは、途上で人間に遇うよりも、神様に遇う方が多い、と世間で能く申します、でも私なんかは、神様にも人間にも、お禮を云ふ事は、何物にもムりませんな。私は或は餓えて死んで、腐つて了うかも知れません、而て腐つて、世人の鼻吼を襲かない中に、屍を野外に放り出されたとしても、私に一片の思ひだに掛けて呉れる者はありやしないです。』

旅人は緩つと、オネシモの腕を摑んで云つた、

『、、、これ、現世の事相が、夫程能く分つてるなら、夫は結構な事です。此上は精々氣を附て、有ゆる神々の上に在す神……永遠不朽の、目に見えない、智の神について、教へて進る事を悟つて下さいれ。』

『此の祭壇は、多分上代の人が、その神様を拜む爲に設けた物でせう。』

オネシモは、苦笑しながら、斯く言つた。二人は粗末な飾のない石材で建た、古い拜殿の前に足を止めたのであつた。見れば殿上に、殆んど磨滅しかゝつた文字で、『不識る神に、』と銘刻してあつた。旅人は頭を垂れて囁いた、

『不識とあつて、不可識と銘してない。有難いな、その恩惠の能力によりて、吾等に不可言る神の愛を顯示し給ふた、主耶蘇基督に感謝しなくてはならないな。』

旅人が宛然衣物で包つた如に、沈默の中に包つて了つたのを見て、青年は遠慮して、その言動を謹んだ。二人が、アクロポリス城の麓を麗々しく周つて居た、有名なる三脚臺街に這入つて行つた時は、旅人は一旦夢心地らしい心狀より覺めた。夫から彼は、一見無際限と覺しき、雅美なる偶像が、オリムピヤの神々の神龕や堂を守る番兵見たいに、立併んで居る中を通り拔た時に、煌々と其眼光らせた。

『神々しい美しさではありませぬか！いい、もうし、能つく御覽うじまし、山上に白く輝く、向の神殿内には、ピデヤの名作なる軍神の像が安置してありますが、是こそは本物の象牙で作つて、純金を被せた物でムります。』

オネシモが、その民族の誇を誇として、威張りながら、斯く叫ぶと、旅人は、不朽の美の宿れる、此の古典的の神境内に、奇妙に反響した語調で以て絶叫した、

『是は皆偶像だ！偶像であるから、皆呪はれた物ですぞ。』

オネシモは、唇を咬んだ。夫から中は侮り、中は憫れんで囁いた、

『猶太人である計りか、狂氣の猶太人だわい。』

斯て彼等は、河岸に沿ふた、狹い上に、何方かと云へば汚穢しい街に出る迄、何れも復と口をきかなかつた。遂に希臘人は、無愛想に云つた、

『いい、もうし、此街には御國の人々が住んで居ます。向うに會堂があります、此邊に御宿泊の便がある

に違ないです。』

彼は斯く云つて、立去らうとする如く風して、向き直つたが、旅人は彼を呼び止めて、『君、待つて下さい、聊差上んならん物があります。』と云ひながら、貨幣を一枚差出した。

オネシモは、一寸默つて、貨幣を見詰た。夫から頭振り〳〵、斷乎と、『否え、御禮なんか欲しうムりません。左樣なら、』と云ひ棄て、相手の返す言も待ずに、さつさと去つて了つた。

三日も經たぬ内に、市場では此の旅人の取沙汰で、がや〳〵と騷ぎ立て居た。

『あの猶太人が……彼の狂人が……あの異神を傳へる者が、何うしたと云ふの？同國の者も、彼を相手にしないさうだぜ。夫だのに彼は、斯の通り大勢の前に立つて、全で哲學者氣取りで、駄辨を捏てるわい。』

アチンスに遣つて來たての、「身裝の惡い奴」、「取るに足らぬ奴」、「胴の曲つた男」、「鈎鼻の男」などゝ罵られた、猶太人に對する世評は、先づ斯樣なものであつた。

博學なる教授、談論家、講演者、哲學者の連中で、常に歩廊に立つて、死んだ學問を筺示して居た徒輩は、パウロと云う名前を口にする丈でも厭ふて、肩を竦めると云う程で、彼等は此樣に批評した、

『吾等は彼の男の事について、少く聞及んだ事がある。彼は基督と同類か、但しは同人かで……何方でも構ひはしないわい……野蠻な猶太人で、先づ口論者位の者だね。君達は彼が、吾等に分らない奥義を知ることが出來ると思ふの？彼は文が書ける？左樣かね。なあに書けるかも知れない。おや、あの猶太人が、門弟を探して居るつて！多令夫は奴隷の事だらうて。彼の教義なんか、本氣の者では、信じようたつて信ぜられまいよ。』（ブラウニングの『男と女』參照）

此の歩廊派の競爭者である快樂派の徒輩は、氣取り切つて、此樣なに叫んだ、

『なあに彼が猶太人であらうと、希臘人であらうと……誰か、彼は羅馬人だ、と云つてたぜ……吾等に取つては同一だよ。彼の嘆賞る事を聽いてやらうわい、今日は別に新奇な面白い事もないぢやないかね。』

彼等は半ば眞面目に、半ば愚弄して、彼をアレオパガスの丘に伴ふた。彼等は岩に刻んだ段を登りながら、見透いた嘲弄の口調で云つた、

『貴公の說かんとする新教義とは、何んなものか、私共に聽かして貰はれませうか？』

そこでパウロは、世に『豚突の石』と傳稱されて來た、昔時ソクラテスが、其上に立つて辯論をしたと云う傳說のある、突出た石壇の上に立ちながら、會衆に向つて、此樣なに說いた。

『アテネスの方々よ、私は諸君が、萬事に敬虔の念の極厚い事を覺まする。私の途を行く時、諸君が拜する者を見ました中に、「不識る神に」と刻書た、一の祭壇を見付ました。夫で私は、諸君が識らずして敬う、其者を諸君に示さう、と存するのです。

『抑々宇宙と、其中の萬物とを造り給ふた神は、是ぞ天地の主でありますので、手で造つた殿に住み給ひませぬ。且つすべての人に、生命と氣息と萬物とを予へ給ふた神でありますから、物に乏しくあらせらる筈がないので、從つて人の手で以て事へらるゝ者でありませぬ。また此神は、凡の民を一の血より造つて、悉く地の全面に住ませ、預じめ其時と住む所の界とを定め給ひました。是と申すのも、人をして神を求めさせて、彼等が或は揣摩り得ることもあらうか、との御意によるのです……併し神は、私共、各人を遠く離れて厶るのではありませぬ。抑々私共は、彼に賴りて生き動きまた生存ふることを得るのであつて、現に御國の詩人の中に、『吾等もその裔なり、』と歌ひ居る者もあるです。斯の如く私共は神の裔であつて見れば、其神を金銀または石など、人の工と巧とで造つた者と均しく思ふてはなりませぬ。』

『往時の人の蒙昧であつた時は、神は之を不問になし給ふたのですが、今は何處の人にも、皆悔改むることを命じ給ひます、何となれば神は、既にその立て給ふた所の人により、義をもて世を鞫くべき日を定め、此事に就ては、彼を死より甦らせて、その證を凡の人に予へ給ふたからであります。』

或者が出しやばつて、愚弄する如な口調で云ふことには、

『聽き給へ、聽きたまへ！此の不識る神は、本當に不思議だ！死者を甦らせるつて！人の無智も不

間に附するつて！その拜殿に謁て、之を拜まうぢやないか！』

衆皆わつと吹出して、此言に應じた。彼等は一齊に起上つて、謹聽する者は無くなつた。

『無禮な明盲奴が！あの立つてるざまを見給へ。まだ喋る積りと見えるんだが、誰が斯樣な駄辨に耳を貸して、貴い時間を空費するものかい。さあ歩廊へ降りて行かうぢやないか、今朝はアポロニアスの講演があるぜ。』

高襟の身髮した、一人のアテンス人が、旅人に怖しい顏を向けながら、斯く嘲つて云うと、その同伴は晴れない顏付して、彼を熟視した。夫から遂に思切つて云つた、

『あの人は、アポロニアスの如な、復聞き學問の掃溜ではない。僕は此事に就いて、もつと能く彼に尋れて見よう、御互に公平に聽いてやらなんだぢやないかれ。』

相手は呵々冷笑しながら、仰け反つて、咬付く如な高調子で云つた、

『い、い、ちよいと君、向の花賣娘の女郎を見給へ、彼女も君と同意だわい、今お轉婆奴が、あの野郎と共に喋つてらあ。君も早く行つて、是非彼女のお附合をしたまへ。左樣したら晩にもなれば、裁判人のデオネシアスと、花賣娘のダマリス（註を見よ）とが、改宗した猶太人の連中に加入したぞ、とアテンス中で、噂が立つだらうで。』

【註】アンテスの上流婦人は、嚴重な習慣によりて、滅多と外出しなかつたから、ダマリスは當時アテンスの街々や、市場に徘徊した花賣娘の一人である、と想像しても、強ち不道理な事とも思はれない。なほ使徒行傳十七章の三十四節を參照すべし。

デオネシアスは、返答もしないで、早や『豚突の石』の方に行つて居た。同伴は肩を竦めながら彼を目送した。同伴は又氣取顏して、

『アテンスでも、馬鹿者が居ると見える！』

と云つたが、その馬鹿者は、誰であらうと、その言ふ所は、本當の事であつた。

卅三　天幕製造人

天幕の製造人共は、開放した中庭で作業中であつた。婦人一人と男二人と三人して、夜の引明から、働き續けて居たが、今婦人は其坐を立つて、丈高い倔強の體を眞直にして、元氣好く云つた、

『さあ、一時休まうぢやありませんか、兄弟は疲れて居らつしやいます、あの顔の御樣子で分つてますわ。もう二個所縫目を合しますれば、此の仕事は濟みます。』

夫から彼女は、山羊の毛の、目の粗い織物を御寄せ、大きな縫針を衣物の襠に突刺して、手掌から亞麻布の手當紐を解いた。一人の男は、婦人のお手本通り、いいさつさと仕事を置いて、引鉤つた手足を伸し、溜息吐きながらも、打寛いで、

『プリスキラや、麵麭と乾酪とを一口、夫からね……』

と云ひ出したが、婦人は既う居なかつた。男は滿足の態で、深切な眼を伴侶に据えて、

『云はなくとも、分つて居て、氣を利かして呉れますよ。パウロ樣、良い妻は本當に神の賜物でムりますよ。夫につけても、お氣毒なことには、御前樣は……』

と云ひかけ、磴と口を噤んだ。夫から彼は、厨房道具のがちや〳〵と音のする家の方を心配げに一瞥して、怖々云ふことには、

『此儀に就ては、彼是申すでない、と彼女が諭して呉れましたけれど、誰だつて心に思う事は、口に出さずには居られませぬ。兄弟や、御前樣は何うお思召されますか？』

斯く話し掛けられた男は、硬張つた、通りの惡い布に、再三不器用な針を通した後で答へた、

『私の身に定まつた、千辛萬苦を分て取つて呉れよ、と何の婦人にでも賴入る事は、縱し夫が私の身に取つて、都合の宜い事としても、私に出來ない事であります。でも御前樣が、妻君を神の賜物と視て、愛情一杯に善く考へて進る事は、夫れや當然であります。さあれ、主の日は近いですからね、その賜物よりも、之を與へ給ふた神の事をば、もつと能く考ふる事を忘れてはなりませぬぞ。』

『御前様は今後も是迄通りに、安息日に會堂で説教なされますか？』

彼の男が、暫時思案してから、斯く云うと、相手の天幕製造人は、素速く顔を上げて云つた、

『屹度致します、アクイラ様、何んで其様な事を聞くんです乎？』

『猶太人の某々の間で、愚圖〳〵申してる事がムりますので。多分申上る程の事でもありますまいが、夫でも……』

アクイラが、躊躇しながら、斯く云うと、パウロは、煩げに吐息を吐いて、『止むを得ません、若し福音を宣傳へなければ禍ですからね、』と嘶いた。そこでアクイラは、勇を鼓して、語を續けた、

『彼等は御前様が、律法に關して仰有つた事のために、小言を申してます。で次の安息日に、能く御辨明になれば、事に都合好く纏りませう。』

此の刹那に、プリスキラは、狹苦しい流し場から出て來て、聲高に云つた、

『何んさ、未だ仕事して居らつしやいますか？不可ませんね、私の所存から申しますると、御前様は御自分の手で、勞働なんかなさるべき筈でない、と存じまする。最早私共信者の數も多く成りました今日、私共は天の麵麭を價なしに頂かして下さつた、御前様を御扶養申すことは、私共の責任でムりまする。』

『姉妹よ、お言御尤に存じます。福音を宣傳ふる者は、之によりて衣食するやうに、と主も御定めして他人を救ひたいばつかりに、自主の身でありましても、凡の人の奴隷と成ります。』

天幕製造人が、感傷的の顔を赤らめながらも、恬靜に斯く云うと、婦人は冴えた茶色の目に涙を堪へて、『主は酬ひ給ひます！主は必ず酬ひ給ひませう、』と云つた。夫から彼女は、景氣好く語を添へて云つた、

『さあ、御飯を喰べませう、また働かんければなりませんからね。働く者の食を頂くのは當然でムりますわ。』

彼等は一ヶ月以上も、一週の六日間は、夜明から夕方まで、その針仕事に從事した。アクイラが、『コリントでは、仕事が切れないから、誠に有難い事であります、』と云ふ事があれば、タルソの人も、實にもと同して、その頭を垂れた。

安息日が來ると、三人は打連れて、此の俗惡なる大都會の殷賑な大路小路を通りて、會堂に出席した。パウロは、その會堂で、熱辯を揮つて、奇しき神の道を宣傳へた。彼が始めて講壇に立つた日には、民は皆唯に好奇心を以て、彼を凝視るのみであつたが、其後に至りて、或者は預言の研究を始め、或者は十字架に釘られた救主の物語を聽いて、その眞理を確信し、或者は疑ふて頭を打振つた。厭に利口振る徒輩は、異邦人がどし〳〵と、押掛て來だしたのを見て、警戒の目を配つた。

此の異邦人は、何れも改宗の申出をしないで、パウロと云う猶太人が、死者を甦らす、異なる神の事を話すのを聽きに來たのだと云つた。

アテンスの商人で、ベン、イスエルと云う者が、商用を帶てコリントへ遣つて來た時は、事態斯の如き場合であつた。彼は名望家であり、財産家であり、又從つて勢力家である、と云う事であつた。

『パウロ？では彼の野郎は、此邊までも遣つて來居つたな。』

ベン、イスラエルが、眉を吊り上て、斯く云うと、會堂の主立の一人で、其名をソステネスと云う者が問ふた、

『貴公は彼の男の事を御承知ですか？』

『仕方の無い奴でさあ、アテンスでは、幸に撰民の間に脚を立たせませんでした……異邦人の間にもです。アテンス人は、容易に瞞着されないですからね。』

商人は斯く答へかけて、一寸口を噤み、得意げに、指で口髭を素扱きながら、語を續けた、

『彼の目的は、とお尋ですか？　夫を看破することは、造作がなさそうですな。考へて御覽うじまし、彼の男は、饒舌の恥知すで、剰に一文なしの逃亡者でムりますぜ。彼に從へる、所謂回心者なる者は、何者でムりますか？主に汚れた異邦人ばかりです。彼は猶太人だ、と吹聽しながらも、彼

等と一緒食を共にして居ます。聞く所に據れば、ピリピでは、不逞の徒や、猶太教に改宗せる異邦人や奴隷共の間に騒動を惹起して、あの野耶と今一人、同類の旅仲間とは、官憲に捕へられて、健か殴られたさうでムりますぜ。テサロニケでは……該地在住の親戚から聞きましたが……彼は餘り旨く行かないで、夜逃をするの止むなきに至り、ベリヤでも、同斷であつたさうでムります。』

翌日の事、逆上し切つた猶太人は、パウロの下働きが二人も遣つて來て、東西奔走、十字架に死して、天に昇つた救主の事に就て、彼等の視て危險有害とする、新教義の宣傳に從事して居るのを見附た。そこで會堂内は、暴風雨の光景となつた。天幕製造人……猶太人の金持連は、パウロを輕蔑して、此の綽名を命けたのである……は、同勞者の到着したために、靈感新に增して、更に熱烈となりしものゝ如く、勇み起て、力の滿た說教をした。猶太人のちやき〳〵は、現場に立つて論戰し、喧々囂々、律法の矢玉を取つて、大膽不敵の背教者に浴せかけた。後聽者は情熱に燃えて、狂氣の如くに成つてわいわいと泣き叫んで、その衣物を引裂くもあり、ハレルヤ！と聲限りに歌ふもあつた。

『神を瀆す嘘吐奴、立ち去れえ。勿體なくもエホバの家を瀆し、至上者の住家で、忌々しい毒舌を弄したぞ！』

ソステネスが絶叫するを見て、天幕製造人は、眼光を烈火の如くに耀かせ、凄じい身振で、その衣物を振ひながら云つた、

『諸君の血は、諸君の首に歸すべきです。私は潔くして咎はありませぬ。私は今より此地を去つて、異邦人の所に適きますぞ。』

賤しめられた天幕製造人は、斯して會堂の外に出で、再び此の會堂に來ることはなかつた、が其名をクリスポと云つた、會堂の宰さもある人物は、その全家族と共にバプテスマを受て、パウロに從ふた。他に其例に倣ふ者も多くあつたが、そは主に異邦人であつた。此の十字架に釘られた大工を信ずる者は、曩に猶太教に改宗した者で、會堂の隣に住んで居た、ユストと云う人の家に、日々相會して、天幕製造人の教導を受た。彼等は共に集つて飲食した……何等秘する所なく……異教者の市で

購求めて來た、潔き物も、潔からぬ物までも。

正統の猶太人等は、『忌々しい！人を惑はし、世を荒して、』と歎息した。彼等は又切齒しながら、『惡人共は、青草の如に蔓るでないか！でも屹度刈倒してやらうわい、』と續けた。

天幕製造人は、人間の子であつた。剩に彼は弱體であつたので、勤勞と苦難とで疲れ果た。彼は時として、其身に捲附いてる如に思はれた、憂慮と責任との重荷を頂ふて、その曲つた身體を曳摺りかれた。彼は夜もまんじりと眠らずに、祈り續くることもあつた。遠方の邑々には、信者の小團體が、敵の憎惡迫害を受ながら、定つた牧師もなく、その祝福された生活の記錄もなくして、惱み苦しんで居た。パウロは、之を思ふて惱み、慰藉訓諭の書簡も認めねばならなんだ。彼は終日の勞苦に疲勞困憊しても、彼等にその心腸を吐き出さうとするのである。彼の愛するテモテは、其坐に侍して、彼の云うが儘に筆記するのであつた。

『パウロとシルワノとテモテ・書を父なる神、及耶蘇基督に在る、テサロニケ人の教會に贈る。願くば爾曹恩寵と平康を受よ。

『我祈禱の中に、爾曹の事を陳て、常に爾曹衆人のために神に感謝す。是れなんぢらが信仰により て行ひ、愛によりて勞し、我儕の主耶蘇基督を望むに因て忍ぶことを、我儕の父なる神の前にて、斷ず念ふが故なり。

『神に愛せらるゝ兄弟よ、又是れなんぢらの撰ばれたる事を知るによりてなり。われらの福音なんぢらに來りしは、只言に由りてのみならず、能により、聖靈により、また篤き信仰に由りてなり。即ち我儕爾曹の中に在りて、なんぢらの爲に、如何に行ひしかを爾曹の知るが如し……彼等我儕の事を語りて、われら如何なる樣にて爾曹の中に入り、且つなんぢら偶像を棄て、神に歸して、活る眞の神に事へ、その子の天より臨るを待つと言へり。其子は即ち神の死より甦らしゝ所の耶蘇にして我儕を來らんとする怒より救ふ者なり。

『兄弟よ、われらが爾曹の中に入りし事の徒然ならざるを爾曹自ら知る。なんぢら知れる如く、我

儕先にピリピにて苦を受け、また辱を受けたり、然ど尙ほなんぢらに至り、われらが神に頼りて憚る所なく、神の福音を大なる紛爭の中にて爾曹に語れり。我儕の勸は惑より出るに非ず、汚より出るにあらず、亦詐を以てせず、われら神の撰を得、福音を傳ふる事を託れられたるに因りて語るなり。此は人を悅ばすに非ず、我心を察し給ふ神を悅ばするなり。なんぢら知れる如く、我儕何時も諂ふ言を用ゐず、また事に藉せて貪ることをせず、神これが證をなす……兄弟よ爾曹われらの勞と苦を知る、なんぢらの中一人をも累はせざる爲に、夜晝工作をなして、神の福音を爾曹に宣傳へたり……兄弟よ、爾曹猶太の中なる、基督耶蘇に在る神の教會に倣へる者となれり、蓋彼等猶太人に苦められし如く、なんぢらも己が國の人々に苦められたればなり。猶太人は、主耶蘇と己が預言者とを殺し、また我儕を窘て逐出せり、彼等は神の心に合はず、且つ凡の人に逆へり、また我儕が異邦人に救を得させんとて語るを阻めり。此の如く彼等は、常に己が罪を盈しむ、神の極めて大なる怒は彼等に臨れり。

『兄弟よ、我儕暫時爾曹に離れ居る、是れ面のみなり、心にあらず、切りに願ひて急ぎ、なんぢらの面を見んとせり……然れど惡魔われらを妨げたり。我儕の望、また喜悅、また誇の冕は誰ぞや。われらの主耶蘇、基督の臨らん時、その前にて爾曹も此者と爲るにあらず乎。それ我儕の榮と喜悅はなんぢらなり。

『是を以て我忍ぶこと能はず、故に獨りアテンスに留ることを意に定め、基督の福音を傳へ、神と儕に働く、われらの兄弟テモテを爾曹に遣しゝなり。是れ爾曹を固くし、又なんぢらの信仰の爲に爾曹を慰め、一人も此の患難に搖されざらしめんがためなり……試むる者のなんぢらを試みて、我儕の勞の徒然ならんことを恐れたるなり。今テモテ爾曹より我儕に來りて、なんぢらの信仰と愛との善音を聞せ、又なんぢら常にわれらを切々に念ひ、我儕に遇ふことを欲ひ、われらが爾曹に遇ふことを願ふが如しと告たり。是故に兄弟よ、我儕さま〴〵の禍害と患難との中に、爾曹の信仰に因りて安慰を得たり。』（帖撒羅尼迦前書）

斯の如くパウロは、冒頭より末尾に至るまで、言々句々、深切なる愛情を込めて、或は誡しめ、或は勸め、或は辯じ、或は勵し、殊に教會を慰むるに、自ら亦之によりて慰藉を得た、と告白するなど、誠に床しき限りであつた。斯までに教會を思ひ、人を思ふ彼は、或夜異象の中に、主が現はれて語りたまふを聽いた、

『懼るゝ勿れ、默せずして語るべし、蓋われ爾と偕に在れば、なんぢを害せんとて責る者なし、且この邑に我民多く在ればなり。』

斯てパウロは、コリントに一年以上も留まつた（使徒行傳十八〇十一參照）。其間彼は道を傳へて怠らず、或は罪惡の滓溜の中に、或は無智と迷信との掃溜の中に、或は奴隷の中に、或は迷へる婦人の中に或は各階級の墮落せる偶像の禮拜者の中に、神の撰べる者を求めて、之を得、之を救ふためである。他日パウロが、エペソの邑から、コリントの教會に贈つた書簡の一節は、正しく此の消息を洩したものであるが、是そ即ち夫である、

『兄弟よ、召を蒙れる爾曹を觀よ、肉に循れる智慧ある者多からず、能ある者多からず、貴き者多からざるなり。神は智者を愧しめんとて、世の愚なる者を撰び、强き者を愧しめんとて、世の弱き者を撰ぶ。又神は有る者を滅さんとて、世の賤しき者、藐視らるゝもの、即ち無きが如きものを撰び給へり。是れ凡の人神の前に誇ることなからんためなり。』（哥林多前書一〇廿六一九）

會堂の宰ソステネスも、度々幻象を見て、今にその憎める天幕製造人を道附けることが出來るだらう、と空想した。と云ふのも、アカヤの新總督ガリヨと云ふが、將に赴任せんとするのであつた。此のガリヨと云ふは、ネロ帝の師傅なる哲學者セネカの兄弟で、剩に性溫厚にして、與し易い質の人物だと云う世評なので、ソステネスは、彼に空頼みをしたのである。

『此の羅馬人は、我黨の肩を持つて吳れる積りだらう。吾々猶太人は、此の州の富の大部分を代表してるんだもの。然れば彼が着任すれば、早速此件を訴へることにしよう。』

ソステネスは、斯く論斷した。そこで新總督が來て、その公務を始めた當日、猶太人は總立と成つ

て、天幕製造人を作業中に捕へて、ガリヨの法廷に曳立た。法廷は當時の慣例によりて、總督廳の前にある、碁盤形の敷石の廣場と定められた。ソステネスは、此所に立つて叫んだ、

『至高至正なる總督閣下！御裁判を仰がんと存じまして此の野郎を曳立て參りました、彼は國法に違反（註を見よ）せる神を拜め、と人に敎ふる者でムりまする。

【註】猶太敎は、公認の宗敎（レリヂヨ、リシタ）であつた、即ち羅馬の政府の公認した宗敎であつた、パウロの敎へた宗敎は、そが公認された猶太敎と異なる限りに、國法に違反せる宗敎であつたのである。

ガリヨは、傲然侮蔑の振しながら、騷々しい群衆を見渡した。猶太人に對する彼の感情は、他の羅馬貴族と同じく、純然たる憎惡輕蔑の夫であつた。口々に罵り騷ぐ告訴者の背後に詰掛て來て、多くの希臘人や、他の異邦人等までが、その顏や身振に、猛烈なる憤激の情を表して居た。被告はと見れば、『あはれや、見窄らしい老人で……而も告訴者と同じく猶太人であつた。此の老人は、年は老いても、許さるれば、何か辯論も仕兼まじき風をして居た。總督は焦躁げに、澁い顏をして、冷な決意を言明した、

『事若し民事上の惡事か、或は道德上の非行かであれば、我が爾曹の告訴を聽くは、當然の儀であらうが、若し唯に言語や、名字や、又なんぢらの律法の事等の論爭であるならば、爾曹は自分で夫を調るが可からう、我は斯る事の裁判人と成ることは厭である……警吏共、一同を追拂へ。』

被告は、震へながら判決を待つて居た數名の友に擁せられて、直に法廷を出た。見物人は、之を見て歡呼した。ソステネスと、その一味の者共は、群衆の中を押しつ押されつ、總督の頭上に、呪詛の言を浴せて居た。

折しも赤帽を阿彌陀に被つて、肩に竪琴を吊せる一人の希臘人が叫ぶを聞けば、

『ふん、猶太人奴が！こら、猶太人……虛言者……泥棒……汚れた畜生　家に歸つて、豚肉でも喰つて來い……歸れ〳〵！』

ソステネスは、磴と足を止め、さつても憎しと、眼球をぎろ〳〵、大膽不敵の希臘人を睨み、頭上高く片手を振り翳しながら、『活る神、エホバの罰こそ……』と呶鳴つた。

然るに彌次馬連は、耳も聾せんばかりに怒號して、ソステネを目掛て殺到し、怒り狂つて叫んだ、

『己等も呪つて呉るか？ふん、貴様の神に、貴様を救う意があるなら、吾身を救つて頂けやい。』

夫から彼等は、法廷の見ゆる邊で、手に〳〵棒を持つて、彼を毆り据えた。ガリヨは、肩を竦めながら、事の成行を傍觀して居たが、警吏に之が制止の命を下さなかつた。

『コリントの猶太人共は、詰らない爭論で以て、何んなにか己を困らせることだらう、將來の事が思ひ遣られるわい。』

と總督は、椅子の後に立つて居た衛兵の一人を顧りみて、煩さげに云つた。

其後ソステネスは、斯る憂目に遭つた事の爲に、天幕製造人に復讐をしようとて、エペソまで遣つて行つたが、神は彼の眼を啓いて、眞理を明示し給ふた、と確言する人々がある。哥林多前書の冒

頭に、左の如く記してあるのは、正しく其の消息を洩したものであらう。

『神その旨により、召て耶蘇基督の使徒となし給へるパウロ、及兄弟ソステネス、書をコリントに在る神の教會、即ち基督耶蘇に在りて潔められ、召されて聖徒となれる者、および彼等の所にも、我儕の所にも、諸の所に於て、我儕の主耶蘇基督の名を呼ぶ者まで贈る。なんぢら願くば、われらの父なる神、および、主耶蘇基督より、恩寵と平康を受よ。』

卅四　エペソの實業家

羅馬の皇帝、クラウデアスは崩御した。女皇が毒殺をしたものだ、と不祥い噂が立つた。此の兇變に關した、怪しき事情の數々、一として之を取調ぶることもなかつた。正統の世嗣である皇子、ブリタニカスと、皇女オクタビヤとは、云うまでもなく、悲歎憂懼に沈んだなれど、一萬五千の朝臣從者を有する大宮殿中、誰一人眞情を寄する者なく、あはれ彼等は無援孤獨、奴隷にも劣る慘情であつた。

抑も此の女皇は、アグリッピナ、アウガスタ（註を見よ）と稱つて、皇帝の姪に當り、その六度目の后と成つた人である。彼女は或日の事、宮中の試嘗役、ハロタスと稱う者が、食膳に供へて奚れた銀の皿より、蕈を一個、その美しい手にて取り、甘言蜜の滴る如にして、之を皇帝に進じた。皇帝は之を食して間もなく、甚い痙攣を起し食堂から運び出されてから、二三時間も經たぬ内に、敢なき最期を遂げた。高貴の人々は、唯その肩を竦める計りであつた。當時の最も巧妙な毒殺者であつた、ローカスタと云う者は、未だ宮中の牢獄内に生存て居た……帝王の權勢に取りては、貴重な附屬物なので、輕々には殺さる可き者でなかつたのである。余り嚴密に事相の詮義立をする事は、分別ある者の好む所でなかつたのである。然れば皇宮を去つて、唯神と成るの外なかつた人の爲に泣くのは、畢竟野暮と云う可きでなからうか？

【註】此のアグリッピナは、ゲヤーマニカスの皇女の一人で、ケーアス、シーザーの妹であつた。彼女は追放されて居たが、クラウデアスに召還され、後に女皇メッセリナが崩じてから、自ら女皇と成つた。彼女は無瑕放埒の婦人として、史上で有名な人物である。

アグリッピナ后は、皇帝の神化祭の當日、親しく壯大なる式場に臨んで、祭司格で以て司式をした。列席者の面々にして彼女が着流して居た、眞珠で刺繍した、猖々緋の上衣を見て、少々氣味惡げに、血を思起すやうな事があつても、彼等は唯目を擧げて、傲然たる美貌を仰ぎ、眩惑するか、畏縮するかして、夫を忘れるの外はなかつた。夫に何よりも勝りて、彼等を威壓したのは、ネロが皇帝であつた事である。ネロ帝は、紅顔の美少年で、その爽快にして、愛想好き風貌は美しく彫刻した神像を仰ぐ如に思はれた。帝を位に引上た寶玉で飾つた雙手の美には、更に汚點の見る可きものがなかつたので、億兆皆目を擧て、之を拜んだ。彼等は、死して……その死樣の如何は問ふ所でない……代々の皇帝が、逝いて住へる冥土の位に上つた、先帝クラウデアスを拜んだ。彼等は、威勢の好い……皇太后、アグリッピナ、アウガスタをも拜んだ。彼等は又、后の愛子にして、將來の幸福と生命の主たるべき、羅馬の大皇帝ネロをも拜んだ。

時至りて此の兇變の報は、帝國の諸州に傳へられた。新帝の即位！此事よりして動もすれば、各州總督の黜陟、新軍團の配置、新稅の課徭、新法令の發布等、諸般の政變を起すことがあるし、而も政變の結果は從前よりも善く成ることもあり、惡く成る事もあるのである。そこで民は、殊勝にも能く忍んで、讀み聽かせらるゝ告諭に耳を傾け、一齊に歡呼の聲を揚て、忠順の意を表し、依々として其家業に就くのであつた。

クラウデアス帝が崩御し、ネロ帝が位に即く、縱し何方が何うならうと、民は今日も明日も、麵麭を喰はなくちやならない、がその麵麭を得る事は、容易の事でないのである。ところが茲に、エペソの銀工の親方、デメテリヲの店では、その商賣の繁昌は不相變、づん〳〵と富を增した。然るに黃な澁い顏した、幾歲か見當の附きかぬ、小造りの主人公は、不機嫌にして居た……平常だつて左樣だが。彼は二三十人もの職工が、胴を屈めて働いて居た、暗い蒸れた工場に行つて、彼方此方と立廻り、齒がゆさうに目を配つた。夫から側に立る監督の方を向いて、ぶつ〳〵と呟いた、

『此節の仕事は下手いぜ、もつと能く氣を附けて磨くやうに、と野郎共に申聞けてお呉れ。而てね、今度のから、斯樣なに重くすることは要らないよ。巡禮者が、ダイアナ樣の聖像を買うのは、何も銀の重量で買うのぢやないからな、有難い事だわい。』

デメテリヲは、斯く云ひながら、出來上つたのを一個手に取つて、篤りと之を檢べた。是は世界七奇の一である、エペソのダイアナの神像を入れた龕の摸型であつて、小いけれど念の入つた作であつた。その原物は婆婆の人の目を避けて、大神殿內の幽闇で壯麗な奧の院に安置されてる物で、是は祖神ダイアナが、何物やらわからぬ材料で以て、手づから之を製作し、人間の慰藉醫療のために、想像も及ばぬ別世界から下したものだとの事……その由來を物語れば、ざつと是位のもので、人は幾時代も、此通り丸呑に信じて來たのである　此の神像は水乃伊の如に、ぐる〳〵と捲き締めてあつて、頭の天邊から足の爪尖まで、造花の豐富なる乳房を示すものだ、と思つた隆起物で蔽はれた、忌はしい不細工な物であつて、デメテリヲが、檢べて居た銀の摸型は、即ち之を象つたものであつ

た。不恰好な足の臺にしてある、倒さの尖塔形の面には、神秘な意味の語が、幾何か銘されてあつた。

『此の語こそは、人の諸病に奇效のある、神聖な原語を譯したものだ、』とは、デメテリチが、常に顧客に確言する所であつた。

デメテリチは、今しも眉宇の皺を伸しながら、獨り口の中で囁いた、

『アスキオン……カタスキオン……リツクス……テツラス……ダムナメニアス……アイシア。』（フアーラー著、使徒保羅の生涯と事業三六〇頁參照）

彼は其心の中に、迷信的の畏敬と、貪慾とを、等分に掻雜て、染々考へて見ると、此の神秘な語の御利益で、不思議な好運が向いて來た、と思はれたのである。彼は固より、强慾な祭司連に大金を絞られたのだ……でも續々起つた出來事によりて、死金を費つたでない、と云う事が判明した。夫で彼は、來るべき大祭に、銀の瓏の幾百……否な幾千も賣りたいものだ、と心に期して居た。彼は既に一廉の富者であつたが、此上にもぐん〳〵と富を增したかつたのである。

彼は神像を下に置きながら囁いた、

『何うなることやら分りやしない、でも神事係（エシアーク）（註を見よ）には成れさうなものだな。』

【註】エシアークとは、亞細亞の主なる邑々より、年々選擧するもので、ダイアナ神の大祭に關する事を總轄する後目である。年々の祭費は彼等の負擔する所であつて、之がため其名を貨幣に銘刻したり、また公所に掲示したりした。彼等は紫衣を纏ひ、花冠を被つて祭に出でた。一旦エシアークに成ると、最高の地位にある、名譽の人として、世人より仰がれ、大に巾を利かしたものである。

店の各部の撿分を濟ませてから、銀工殿は帖簿の調査を始めた。調べて見ると、此の場合萬事は益〳〵思ひ通りに成れさうであつた。利益は十分であつたし、材料の銀は澤山であつたし、勞銀は安くあつたし、剩にダイアナ神の參詣者は、年々歲々、段々と增加する一方であつた。而て宮の繁昌するのも、一は銀工エデメテリチの家業が助成したものであつた。彼の神像製作の業は、前途益々有望で、

光明は目も眩まんばかり、何所まで發展るものか、彼にも分らなんだ。龕を賣れば賣る程、來る年毎に州禮者は、益々〳〵多くエペソに押寄するのであつて、彼等は皆天成の神像其物の名で誘致さるゝのであつた……とは云へ、デメテリチは、心潛にその原物を視て、出來立の自作の物と比べては、極詰らない作だと思つた。參拜者は各自何か巡禮の記念物を家苞且にしたが、女神の像と例の神語とを、、、、そつくりと揃へた、此の美しい銀の龕ほどに、彼等の氣に入つた物は、何一つ無かつたのである。

デメテリチは、得々として、『此度神事係に成れるだらう。左樣成つた曉には、誰が羅馬の天子に成らうとも、僕不關焉だ！』と云つた。彼は帖簿を弗箱に仕舞つて、圓錐形の帽子を被り、ぶら〳〵と市場に出て行つた。此所は宛然蜂の巣を攪ぜた如で、露店で客呼ぶ小買の聲や、路で物賣る行商の聲など、喧々囂々たる上に、調も律もなく、ぴい〳〵と笛吹いて、ダイアナ神の若祭司達が通行を知する音に、無數の群集が、がや〳〵と語り交ふ聲が雜りて、さても騷々しい事であつた。デメテリチは、既う神事係に撰ばれて、紫色の衣物を纏ひ、月桂冠を戴いたかの如に、威丈高に成つて、

此の光景を見渡して居た。

『デメテリチ樣、羅馬からの報知は何うでムる？』

と側で或男が叫ぶと、デメテリチは、『なに、デメテリチ樣とは！トロピマスの如な、乞食野郎に名を云はれては。』と思つた。そこで彼は、冷然として、聲高に云つた、

『羅馬から何んな報知があらうと、僕には關係が無いれ。』

彼に話し掛た男は、その鼻の脇に指を按けながら云ふことには、

『おい、デメテリチ樣、今日は風の方向が違つてますれ。夫ちや宜うがす、羅馬からの報知に關係がない、と仰有る上は、貴公に關係の有る事を聽かせませう。あのれ、向のダイラナスの學堂で、エルサレムから來た、博學の旅人が、新しい怖しい神樣の事を宣傳へて居ますが、その神樣は、今にも參拜者括み、ダイアナ神の宮を亡さうとしてるとの事ですぞ。左樣なつた日には、銀の龕が幾何賣れると思ひますか？』

『エルサレムから！汚穢はしい猶太人が、幾ら間の抜けた囈言を云つたつて、一向で構う事はない
れ。僕は前方スケワ（使徒行傳十九〇十三―七參照）と云う者と、その民族との事に就て聞いた事
があるんだがな。』

デメテリチが、嘲笑しながら、斯く叫ぶと、トロピモは、聲を潜めて云つた、

『私の申すのは、パウロと云う人の事です。何を隠しませう、私は彼の聽かして呉れた眞理に、六
七分通り服して居るんです。』

デメテリチは、彼が斯く云ひ棄て、彼方に行くのを目送しながら、無禮な風して、『木偶漢奴が！』
と囁いた、

廣場の向側に、前面に柱を立並べた、長い矮い家があつた。是は往年に、タイラナスと稱う、有名
なエペソ人が、多くの熱心な門弟を集めて、學問を授けた所なので、タイラナスの學堂、と稱するや
うに成つたのである。近頃は或は長期間、或は短期間、諸派の巡廻哲學者や、星學者や、魔術師

共に賃貸をして居たが、彼等は實學又は虚學を頭に詰込んで、大聲疾呼、大口開けて傍聽する市場の
遊民に演説をした。

『馬鹿野郎が！ダイアナ神のお宮を毀すつて！』

デメテリチは、ぷり〳〵怒つて斯く云つた。夫から彼は、大神殿の燦爛たる石垣を仰ぎ見た。此の
神殿は、實にエペソ第一の誇であり、且つ世界七奇の一であつて、その大きさは、アテンスのパルテ
ノン神殿の四倍もあり、パロス島産の大理石を、イオニア式に刻んだ柱は、其數一百と二十本、之を
繞柱式で立て併べ、香柏造りの屋根は、碧玉の圓柱で支へられ、壁はプラクシテレス、パールヘシア
ス、アペレスの三大家の名技に成れる、貴重な塑像や、繪畫で裝飾され、殿内深く壯嚴な幔幕の垂る
る後には、彼の天成の神像の安置された神聖な龕があつて、なほ金銀寶石の珍寶奇品は、山の如くに
奉納されてあつた。デメテリチは、呵々と笑ひ、手を擂りながら囁いた、

『天涯地角、何所の何者が、久遠の大神、ダイアナの力を動すことが出來ようぞ。思へば有難い事

ぢや、わが身の好運幸果は、一に大神の御蔭に由るんだ！』

彼は斯く囁きながらも、タイラナス學堂の方に歩行を轉じて云うことには、

『何事だらう、どうれ、一つ見定めて來よう。』

來て見れば、群衆は堂門を蔽ふて雲霞の如く、彼は押しても壓しても、なか〳〵に入場することが出ぬなかつた、が洩れ來る誰かの聲を聽けば、或は高く、或は低く、熱辯を揮つて、頻りに說き勸めて居る如であつた。其間に突然嬉しさの餘り、聲高に泣く者があるかと思へば、群衆も感激して、止所もなく囁くので、辯士は遂に默して了つた。やがて一人の繼續着た、見窄らしい婦人が、憫然げにも、その痩せた手を揉みながら云ふことには、

『後生だから、お通し下さい！一人癒された方があります……むう、、、私も是非入場りたいです。』

此時にはデメテリチは、既に門前に一歩を押進めて、場内の樣子を見よう、と決心した所であつた。

『後生だから、お通し下さい……私も癒して頂きたいもので厶ります。』

乞食婦人は、頻りに哀願した揭句、死物狂に成つて、荒々しくも、銀工殿の體に突當つた。デメテリチは、拳骨を固めて、『こん畜生！』と云ひざま、彼女の面部を健か打つた。婦人は口から淋漓と血を流し、低い聲で唸りながら、身を退いた。群衆は之を見て、わつと吹出して嘲笑した。

『ふうん、銀工樣、貴公も人併に好奇心がありなさると見えますれ。』

デメテリチは、振り向いて、恭しく帽子を脫いだ。話し掛た男は、プラクテアスと稱つて、大きな銀山の所有者で、從つてデメテリチを親方とせる職業とは、關係のある人物であつた。その男が、一笑して云ふことには、

『デメテリチ樣、貴公は拔目のない方です、如才のない方です。が請合つときます、入場つて聽きなさることは無用ですよ。私は今まで、全一時間も場内に在つて、辛抱の出來る丈聽きました。あの野耶は猶太人であつて……外の事は分りやしないです……死んで甦つた、十字架に釘られた犯罪人の基督さかえう者を宣傳ふる者で、惡魔祓ひか、魔法師か見たいな奴です。早い話が、蠅に敎

へる駿馬さ。さあ斯うして居られないです、一寸お打合せ致したい用向があります。』

斯てデメテリチは、プラウテアスの如な、賢明い財産家の心添のお陰で安堵して、トロピマスが聞いた事は。全然忘れて了つた。一體エペソでは、幾千のべてん師が、覺束ない職業で、喋々喃々と稼いで居たものだが、手堅くて貴い實業の親方に取りては、其樣な事は、何も頓着するに足りない事であつた。剩に年毎の大祭の期日も切迫して、巡禮者は、アツヤの各方面から、ぼつ〳〵と邑に流れ込んで居た。大行列に出て、神々に扮する幸運な市民共は、既に撰擧されて、一船市民から、眞似事の拜を受て居た。此月には、エフエツヤと稱する祭市が立つのであるが、是も既う始つて、あの神に扮した連中が、市に最氣を添へて居た。劇場と競走場とには、毎日お祭氣分の群衆が押寄せて來て、音樂や辯論の競爭、兵車の競走、諸種の競技、劍客の格闘、さては又、人間と野獸と格闘等を見物して居た（哥林多前書十五〇三十二參照）。

間斷なくダイアナの大神殿へ邁り行く、索晴しい行列や山車は、びい〳〵と笛を吹くやら、鐘々と太鼓を打つやらで、市中は晝夜鳴り轟いた。淫慾に耽り、殺害を敢てする徒輩も、公然街上に横行した。高慢な青二歳の祭司連は、扈從の尼連と手に手を取つて、路上を邂り廻り、名狀すべからざる醜態を演じて、天日爲に光を失ふと見えた。神の福音を宣傳へんがために、召されて使徒と成つたパウロが、『廣く且つ功効を成すの門、開けて我前に在り』（哥林多前書十六〇九）と云つた、その門を見たのは、墮果たる人性の演じたる、一見嘔吐を催ふすべき、此の光景の眞中であつた。

パウロは、夜は深更まで、天幕製造の賤業に身を勞して、獨り吾身のみならず、同勞者の生計を立てて、晝はタイラナスの學堂に行き、街頭に立ち、市場に出で、且つ又家々に訪ふて、福音を宣傳へたが、其間彼は、至る所にて唾棄され、罵詈讒謗、叱咤呪詛を以て酬ひられ、剩へ飢え、また渴き、また裸にされ、また撻れるなど、甚く身を惱めて、慘の又慘、恰も世の汚穢、また萬物の塵垢の如くに、恥辱の高座に曝されて、『人の子と天使とに見する見世物の如くにせられたのである（哥林多前書四〇九—十三參照）。

斯の如きすること二年、猶太人も、希臘人も、すべてアッヤに住める者は、悉く主耶蘇の道を聞いた。其間デメテリヤは、漸次に其資を増して、最早饅頭帽の銀工変も而白からず、さ彼には悠に長なる大

霊と氣取つて、立派な服しい服装に改めた。それで、彼は矢張り毎日工場に行つて、従来通り銀像の亜

量や、仕上具合を精査した。世人の噂に據ると、彼はダイアナ神の寵の御蔭影に、神秘で不可犯る

庫を有つて居る、これに澤山の財宝を蔵めてあつたが、その高の多い事は、昨年神事係であつた、プロ

クテアスでも追付かなかつた、さ云う事であつた。彼が折々店の口に立ち、傲然さして手を振り腕し

ながら、路通る知人の挨拶に應ずる様子を見ると、何うやら前方よりも一層達者に成り、顔色も艶々

しく見受た。

『あの太腹抱へて、渋い酸い小面したデメテリヤは、寸毫もその手作の神像に似合つてないな。』

何時か、プラクテアスが、斯かく嫉妬口を言つた事があるが、此事が何時となく、デメテリヤの同業者

間に噂つたは、皆大に面白がつて、其所でも此所でも、悪口の受賞をした。

氣持の好い春の或日の朝、銀工人盛の例の小面は、何時もより渋い酸い見栄であつた。彼は今しがた

ラナス學堂前の廣場に集つて來た群衆を眺めながら、折々小聲で、何やら分らぬ事を呟いて居た。突

然群衆が、一斉に、わつと叫んだと思へば、其所にも此所にも、濃の霧なる極の雲が、炎々たる焔の舌

と共に、惨しく渦巻いて居た（使徒行傳十九〇十九参照）。

『馬鹿野郎共が！言語道断の奴共だ！彼等は今にこの店を焼く、と云うのか！』

デメテリヤが、歯をきりく云はせながら、聲高に叫ぶと、その側で厳めしい聲がした。

『デメテリヤ様、然うですとも。悔改めて信仰しなさい、悔改めて信仰しなさい。左なくば家はか

りか、あはれや身隠まで、消えざる火で焼かれますぞ。』

デメテリヤは、激怒の余りに、その黄いろい面を眞青にし、額に筋を立て、恨めしげに唾吐きながら、

むにやくと云ふ、ここには、

『トロヒマスは、何時から彼の乞食野郎の猶太人の商賣を始めたんだらうか？昨日の事、乞食野郎

は、襤褸を着て、裸足で、痛さうな目をして、市場をとぼ〳〵と遣つて行く所を、群る惡少年共に取巻かれて、散々嬲物にされて居たんだよ。』

之を聞付けたトロピマスは、落着拂つて答へた、

『夫でも彼は、エペソに横行する惡魔に勝ちましたよ、而も立派にさ。御覽の通り、汚れた邪い書物の燃えてるのは、今に惡魔を亡して、更に得ようとして居る、大勝利の前兆たるに過ぎないです。貴公には活る神の日の近げる事が分らないですか？その前兆として、病める者を癒され、盲者の目は啓かれ、跛者は歩み、哀む者は望んで喜んでるですが、貴公には夫が分らいですか？然れば、い、あ、偶像を携つて來て、あの火焔の中に投げ込み、夫を賣つて溜た惡錢は、貧き者に施してやりなさい。左樣すれば貴公は罪惡より救はれて、家族の方々と共に、主に祝福されまするぞ。』

デメテリチは、呵々と聲高に笑つた、夫から云うことには、

『ふうん！其點だ！「貧しき者に施してやりなさい。」れ、トロピマス君や、君は幾何あれば足りるの？君の先生の賀猶太人は、幾何要るの？金額を云ひ給へ…　ふうん云つて見給へ！』

トロピマスは、顏を外向けた。夫から悲しげに云うことには、

『主は貴公に御慈悲を垂れて、基督耶蘇に在る眞理を悟らせて下されます。』

デメテリチは、俄に樣子を變へて、劇暴な身振をなし、寶玉を嵌めた懷劍を引拔いて、嘗ては友と呼んだのあるトロピマスの後姿を目掛て、之を投げ付けた。劍は標的に外れて、敷石の上に、がい、ちゃ〳〵　音立て落た。彼は叫んだ。

『ダイアナ神の罰！ダイア神の罰が當るぞ！アスキオン！カタスキオン！リツクス！テツラス！ダムナメニユース！』

然れどドロピマスは、泰然自若、振り向きもせずに思ふ方指して行つた。

三十五　エペソ人のダイアナ大明神

デメテリヲは、『アスキオン、カタスキオン、リツクス、テツ……』と、例の神語を唱へかけて、礑と口を噤み、怒つた鬣狗の如に、一聲高く唸つて、首を回らし、店に跳込んで行つて、職工長を睨み付け眞二に引裂くぞ、と云はぬ計りの權幕で、

『一昨年の祭市には、龜が幾何賣れたのか？』

と詰問うと、職工は不安らしい矣顔で答へた、

『親方樣、ダイアナ神の御陸で、二萬以上も賣りまして厶りまする。』

『昨年は幾何おい、いいさつさと答へんかい。』

旦那樣、御存知の通りに、昨年は巡禮者の來やうが澤山さてなかつたので厶いまして、すつと少なう厶いまして、而て……』

職工は申譯でもする如に、兩手を擴げながら、斯く云つた。するとデメテリヲは、地蹈鞴蹈んで吸鳴つた、

『いいん、分つてちあ、巡禮者が少なかつて、唯た一萬五千賣れたのさ。』

職工長は肩を竦めて、怖々云つた、

『少ない數では厶りません……一萬五千も賣れますれば。偖て今年は……』

『いいん、今年は何うか？唯た五千！詰らないね。エペソ人のダイアナ大明神！アスキオン、カタスキオン、リツクス！……詰らない！』

『だつて唯た今お祭が始つたところなんですもの、旦……』

『畜生、余が吠えろと申すまでは、舌を抑へて、默つて居ろ。驅けて行つて、女神の像……種類の如何を問はず……を製造する同業者共に、即刻此所に寄つて吳れえ、と徇れて來い。聞えたか？』

『旦那樣、分りました。然し屹度何で厶りませうれ、彼の詰らない、粘土像の製造者連や、まつた不埒にも青銅細工で、旦那樣の生高な御製作を眞似て居ます、向のヘロタス奴の如な連中共には、徇れなくとも宜しう厶りませう。』

職工か喫驚仰天、主人を見詰て、斯く答へると、デメテリチは、額の大靜脈を顰縄の如に脹らせて、甚く喉が鳴せながら、猛々しく云つた、

『否や、皆連れて來い……誰も彼も。何うでも斯うでもして、皆寄せえ。デメテリチが、重要の件金に關する問題に就いて、話したい事がある、と彼等に申せ……ふうん、金だ。』

一時間も經たない内に、デメテリチの店向の廣場には、筋骨の逞しい職人共が、許多群つて居た。そが中には、職業月の手道具を携つてる者も多くあつた。此の連中の氣合を見ると、必定事は音で濟まないと思はれた。

『デメテリチ樣は、何處に居らつしやるか？金に關する事とは、一體何うした事だらう。必ず親方に心得て居て貰ひたいね、時是れ金だ、と云うことを』

帶の間に大金槌を挿込んで居た巨漢が、斯く呶鳴ると、一同も之に和して云つた、

『然うだよ、親方は何處に？今若しか是か、已等を店から誘き出す手段として、串戯でもし居つたものだとすれば……』

然るにデメテリチは、既に身支度をして手づから店の奥から曳摺り出して來た、長椅子に上らうとして居た。彼は冶工の親方らしく、饅頭帽を被り、見窄らしい職人服を衣て居た。

金槌を携つた男は、進み出て、『デメテリチ樣、御前樣は何用あつて、私共をお呼びなさつたんですか？』と叫んだ。此男はヘロタスと稱つて、デメテリチの商賣敵であつたのである。デメテリチは氣の知れぬ怪しい笑顔して、彼を見下した。夫から云うことには、

『兄弟分方、大に用ありだ、い、はあ、大有りだ。あの夫れ向に見える、タイラナス學堂前の山と積んだ灰を御覽なさい。彼の灰の山は、曾て五萬銀の價格のあつた物ですぜ……はあ、五萬銀！』

ヘロタスは、今一歩進み寄つて、『夫が私共に何の關係がありますかと？』呶鳴つたデメテリチは、眼と光らせて繰返した、

『大に！あの高價な書物が焚れたのに、パウロと稱う者で、此地に三年計りも滯在をして居る、猶

太の曲者の教唆に由るのでした。彼は又、お互がダイアナ大明神の御威徳を形取つて製作する、神像をも焚かうとして居ますぞ。』

衆皆此言を諒として、憤然一齊に怒號した。斯と見たデメテリチは、金切聲を振立て、泣かぬ計りに語を續けた、

『金の問題ですぞ、皆様、お互に富を有つて居るのは、此職のお蔭である事は分つて居られるでせう。夫に又皆様も見聞さるゝ通り、わがエペソ計りか、殆んど全アジヤを通じて、あのパウロは、手にて造れる者は神でないなどゝ説いて、民を惑はしたんです。然れば此儘に打遣つて置けば、お互の職業が滅亡々々にされる患があるのみでなく、全アジヤと世界の尊信する、ダイアナ大明神の神殿も汚されて、その御威德も無に歸して了ひますぞ!』

『大なる哉、エペソ人のダイアナ大明神!大なるかな　エペソ人のダイアナ大明神!』

一同は喉を嗄して、斯く絶叫した。デメテリチも、頭上高く帽子を振翳して、之に和した。彼は長椅

子の上から、市民が四方八方から驅け付けて來るのを見て、聲高々と笑つた。

『大なるかな、エペソ人のダイアナ大明神　大なる哉、エペソ人のダイアナ大明神!』

驅け來る群衆も、喜び狂つて、斯く叫んだ。向を見れば、一群の祭司は、蓬々長髪を垂れて、躍りつ舞ひつ、聲高に取止もない祝詞を唱へて居た。

『大……ダイアナ大明神!エペソ人のダイアナ大明神!大……大!』

『エペソ人のダイアナ大明神!此の神の御名を瀆した、彼の男を殺すべき筈だ!』

とデメテリチが絶叫すると、彌次馬も之に和して、

『殺せ!殺せ!大なるかな、エペソ人のダイアナ大明神!』

と怒號した。そこでデメテリチは、群衆の中に跳入つた、又も絶叫した、

『私の行く通り、尾いて來たまへ。あの猶太人を殺してやれえ!殺してやれえ!』

天幕製造人のプリスキラは、その夫と共に、猶太人の住へる、狹苦しい街の一隅で、せつせと仕

事をして居た。彼女は此の物音を聞付て、溜息吐きながら首を垂れ、敏い逸りげな顰面して云つた。

『市民は何時にない大聲で、騒々しく偶像を讃美して居ます。私は活る神の御寛容に驚きます。此の都會は確に、火で燒かれた古代のソドムよりも又エホバが、種々の苛責を以て惱め給ふたエゲプトよりも、ずつと厭ふべき邪惡い所であります。此樣な詰らない市民のために、パウロ樣は、千辛萬苦を忍び、寢食を忘れてまでも世に活きてゐるです。あの方は、純金に價する程に貴い方であつて又實に彼所に叫んで居る、敬虔のない、性根の拔た、偶像を拜む徒輩を千萬と加せても及ばない程に偉い方であられるに、宛然一錢銅貨でも數う如に、御身を惜みたまはないのですが、思へば勿體ない事でゐりますわね。有難い事には、終夜お働きなさつた御疲勞で、今すや〳〵と眠つて居らつしやいますわ。』

アクイラは、空の針に絲を通して置いて、徐々と『御身は何うして、其樣な知識を得たんだらう?』と云つた。夫から悠然と力を入れて、二針歩運びながら、語を續けた。

『御身は又、邑々と其民とが、審判のために、その罪惡を較量らるゝ、天の天秤を有つてるの?』

プリスキラは、答もしないで、中庭の入口を見詰めて居たが、驅け來る男に向つて、吃り〳〵云つた、

『ガイアス樣、な……何です乎?』

急いで入つて來た男は、入口の戸に錠を下して、閂まで渡した。彼は怖れて顏を青くし、眼球を飛拔けさうにして、『パウロ樣は居らつしやつて?』と耳語いた。

『は……はい、向で寢て居らつしやいますが、何です?』

『片時も速く、隱匿つてあげなくてはなりません。暴徒が……貴女には聞えませんか?』

プリスキラは、失望落膽、きよろ〳〵と四方を見廻し、手を擦りながら、『だつて何處へ?』と叫んだ。

『大なる哉、エペソ人のダイアナ大明神! 殺してやれえ! あの猶太人を殺してやれえ!』

ガイアスは、耳語いた、

『パウロ樣は、入裂にされます、然し私の眼の球の黑い間は、左樣はさせません……アリスタルカスが外に居ますので、暫時は門で防いで呉れませう。

偖て此のプリスキラは、工夫に富んだ婦人であつた。數月前の事、彼女は當張る天幕用の布片が、家事の整頓上、不都合な來すのを見て、中庭の蹈馴した所に、小な方形の穴藏を掘り、之に食品や、燃料や、其他の雜具を貯藏して、大なる便利を得て居るのである。此の穴藏には、きちんと合う蓋が取附てあつたが、彼女は偶と之を思出して、急き込みながら耳語いた。

『是へ御連れ申すことにしませう……臥床に御寢なつた儘で。お目を覺させては不可ないですぞ、暴徒の前にお出なされますから……何と申してお止めしても。さあ速く、左樣致しませう！』

彼女は蓋を緩と落して、其上に縫ひかけの幕布を擴げ、夫から何喰ぬ顏して、一本調子の針仕事を始めながら、兩人に點頭いて云つた、

『是から御兩人共、街路に出て行つしやいまし。私一人で居る方が、一等宜しいでせう。』

然しアクイラと、ガイアスとは、プリスキラの言う通りにする意圖であつたけれども、外に逃出す間がなかつた。と云うのは、荒々しく戸を亂打する音は、『猶太人！猶太人！ダイアナ大明神の御用だ、戸を開けろ！』と耳も聾せん計りに怒號する聲と打雜りて、デメテリチと、その一味徒黨とが、遣つて來て居ると知れたからである。

プリスキラは、鳶色の眼に怒氣を光らせて、肩を竦めながら、何がとばかりに云つた、

『木片野郎が！我夫、戸を開けてお遣りなさいまし、戸は唯木です』。

庭は忽にして溢れた、最初に亂入した連中は、彼方の壁に押付られて、萬力に攝まれた如にして居た程に。デメテリチは、プリスキラの手首を握つて叫んだ。

『猶太人……猶太人を出せ！猶太人パウロは、何處に居るか？女郎。答へ！』

『もし、パウロ樣に、何の御用がムりますか』

ゼプリスキラは、女性の義憤斯ぞあると、威丈高に小兵の銀工を見下して問ふた。デメテリチは、返答の代に、手を伸して、彼女の顏を健か打つた。夫から口汚なく罵りながら、『猶太人は何處に居るか？』と繰返した。

プリスキラは、ぶる〳〵震へて、手足の力も何處へか、船に醉つた如な氣分で、殆んど生きた心地もせなんだ。彼女は狂へるもの、如くに、夫とガイアスとを探し廻つた。兩人の姿は見えなかつたが、彼女は囂々たる街上の騷ぎの中にも、ついぞ彼等の聲が聞かれようか、と思つたのである。『主よ、助け給へ！』と哀求すると共に、彼女は直に力と勇氣とを得た。彼女は群衆が騷ぐにつけても、折角助けようと念じた人の、その安全を思はればならぬ、と俄に思起した。そこで彼女は、得々として微笑しながら、獨言を云つた、

『パウロ樣は、私に怒りなさるだらう、が助けて進げさへすれば、睨んで頂いても大事ないわ。』

『デメテリチ樣、貴公は今臭跡を嗅ぎ違へて、私共を飛んでもない所へ連れ込みなさつたれ。猶太人は、何處にも居やしないです。さあ、もう引上げようぢやありませんか！』

ヘロタスが、慾然として斯く云うと、デメテリチは、プリスキラの蒼白い顏を見詰て呶鳴つた、

『彼の此所に這入るのを見てから、未だ二時間にも成らない。彼は遠方に行く筈がない、と思う上に此の婦人が、彼の在所を知つてるんです。誰か炬火を持つて來て吳れ給へ。』

ヘロタスは、氣味惡げに呵々と笑つた夫から炭火を山と盛つた、火鉢を捧げて云ふことには、

『是でも可いでせう。猶太人の粥は、鳥渡冷やして置いて宜いわい。』

『ふうん、火鉢で結構です。其所で背後から、女郎を捕へて居て下さい……其樣にして。さあ答へろか？猶太人は何處へ行つたか？告へ、告はなければ、御前の此の右の手は、即時燒いて、エペソ人のダイアナ大明神のお供物にするぞ。』

プリスキラは傲然反身に成つて、眼な光らせながら叫んだ

『私を拷問して、白狀させる御積りですの。拜偶者……卑怯者が！私は御前樣も火も怖くありま

せぬ』

夫から彼女は、デメテリヲに掴まれた手を引離して、火鉢に突込み、燃立つて居る炭火を掴んで之を群衆の中に投込んだ。

『魔法師だ！魔法師だ！鬼火を使う女だ！速く逃て、生命を拾へ！』

と一聲高く叫ぶ者があると、彌次馬共は、恐怖の余り、狂ひ叫んで、互に蹈み合ひ、蹴り合ひ、咬み合ひ、毟り合ふて、死物狂ひで街路に出ようとした。焦臭い香はぷん〳〵、蹂躙る足音はどす〳〵、其所でも此所でも、聲を揃へて、叫くやら、呪ふやら、罵るやら、丸で修羅の衢となつた中庭は、忽にして空谷の如に成つた。プリスキラは、心配げに四邊を見廻した。天幕の布片に、點々黑焦のした穴のあつたのを見ると、煙も焔も立つてなかつたけれども、炭火の那邊に落たか、明々と分つて居た。彌次馬は狂氣の如くに、街路に驅け出る時に、火を蹈み消したのである。

プリスキラは、跪坐神を念じて、『有難や！有難や！』と叫んだ。やがて彼女は、破れてぼろ〳〵に成つた布の山に頭を靠せながら、虫の息で滅入り込んだ。床下なる穴藏の中では、パウロは、猶も臥床の上で、疲勞困憊、根も力も盡きて、死人の如に寢て居た。斯て間もなくアタトラが、彌次馬を相手に苦戰惨鬪、打撲、潰裂の傷負ふて、開放した我家に驅け込んで見ると、兩人は此の始末であつた。

パウロは、事の成行を知り且つプリスキラとアクイラとが、自ら其身を死地に陷れてまでも、彼の生命を助けて吳れた顚末（羅馬書十六〇三―四及ファーラー著パウロの生涯と事業卅一章參照）を知るや、彼は頭を垂れて、『人その友の爲に、己の生命を捐るは、此より大なる愛はなし。』と基督の語を取つて嚙いた。一息吐いて彼は、旅行の同伴がイアスと、アリスタルコとは、如何致したかと尋れ、彼等が猶も彌次馬の手に捕へられて居ると知るや、是非即時助けに行かずばと發意した。がプリスキラは、パウロの膝下に打伏して泣き叫んだ、

『私の右の手の火傷の疼痛は、是が御前樣の貴い生命の爲に御役に立つたと思つて、貴んで辛抱し

ますが責めては之に免じて、此家で難を免れて下さるやう、懇願致しまする。

彼女の言の切れない内に、他の弟子達が遣つて來て、市の顔役共より、パウロに、民の中に滯在して、危險を冒さぬやうに傳へて呉れよ、と頼まれた、と云ふ事をパウロに話した。此の弟子達の云ふ所に據ると、

『彌次馬連は、劇場に殺到して、其所で一齋に、一大なる哉、エペソ人のダイアナ大明神！』と絶叫して居ます。かイアス、アリスタルカスの兩君は、元來希臘人ですから、何等危害を受けられさうに厶りませぬ。』（使徒行傳十九〇廿九―四十一參照）

と云う事であつた。此の騒動が鎭つてから、パウロは、弟子達を其許に集めて別を告げ、マケドニヤの方に出立した。マケドニヤでは、彼は諸教會を訪ふて、信仰を堅うするやう懇諭した。夫から彼は、希臘に至り、三ヶ月間も逗留したが、又もや猶太人の毒手に觸れさうであつたので、マケドニヤに引返して、船でミレトスに渡らうと決心した。夫と云うのも、出來得る事なら、五旬節の日までに、エルサレムに居合せたいと欲つたからである。

斯てパウロは、ミレトスより、エペソに使を出して、教會の長老達を呼んだ。彼等が到着するや、彼は娓々として語り聽かせた、

『兄弟達、私がアヅヤに參つた初の日より、常に諸君の中に居て行ふた事は諸君の御承知の通りです。即ち私は凡の事に於て心を卑くし、また涙を流し、猶太人の詭謀により、艱難に遇ひながら、主に事へたのです。大凡益ある事は、殘す所なく之を宣て、或は人々の前、或は家々に於て諸君に教へ、神に對しては悔改め、主耶蘇基督に對しては信仰すべき事を猶太人にも、希臘人にも宣ました。

『今は私の心に迫る者があつて、エルサレムに往きたいのです。固より彼所にて如何なる事が起るか分りませんが、唯聖靈は毎邑に縲絏と患難とが私を俟つて居る、と示し給ふ計りです。然れど私は、喜んで往く可き行程を蹈み終へ、主耶蘇より賜はつた職務、即ち神の恩の福音を

證する事を遂んためには、私の生命をも重んじないのでありまして、其樣な事で心を動しませぬ。

『今私の知る所では、私が邑より邑に往いて、神の國を傳ふる間に、染んで下さつた、此の私の顏は、復とお目に掛る事はありますまい。夫故に私は今日此所で、凡の人の血に於て、私は潔くして、與る所なし。と證して置きたいがために、御苦勞を願つた譯です。斯く申すのは、畢竟私が神の旨を殘す所なく、悉く諸君に宣べ置いたからであります。

『此の故に諸君は、自ら愼むと共に諸君が聖職によりて、其上に監督となされた全群を注意し、主が血を以て買ひ給ふた敎會を牧ふやうにして、貰ひたいのです。何となれば私が去つた後、此の群を惜まない暴き狼が、諸君の中に這入つて來るに違ないからであります。且又諸君の中よりも、弟子達を己に從はせようとして、悖理な言ひ言出す者が起るでせうから、諸君は大に儆醒して、私が三年の間、晝夜間斷なく涙を流して、諸君に勸めた事を憶ふて貰ひたいのです

『兄弟達、諸君の德を樹て、且つ凡の潔められた者の中に於て、嗣業を諸君に與ふる能力ある神と、その恩惠の道とに、今私は諸君を委れ進きます。私は人の金銀衣服を貪つた事はありませぬ。私の此の手は、自分の同行者との需用に供へたことは、諸君の知らるゝ通りです。私は諸君も亦同樣に勤めて、弱き者を扶け、且つ主耶蘇が、『受るよりも與ふるは福なり。』と宣ふた御言を心に銘めて貫うべき筈だと思ひまして、萬事に模範を示した譯であります。(使徒行傳廿章)

パウロは、斯く語り終へて跪き一同と共に祈禱をした。衆皆大に哭いて、パウロの頸に抱き付き接吻までした。別ても復と我顏を見せる事はあるまい、と云つた爲に、各自憂へ悲しんだ。而て一同舟を連れて、彼を船まで送つた。

第三篇

我この福音の爲に
使者となりて鏈に繫がれたり

以弗所書六章廿節

卅六　蹈まれ且つ蹴られて

パウロは、心に期した通り、五旬節の間に合ふやうに、エルサレムに到着した。彼は心中何の信ずる所あつて、此行を敢てしたのか、他の者の知る所でない。一行がツロに着いて、七日間の滞在をした時に、其他の弟子等は、頻りにパウロを諫めて、『エルサレムにお上りなさるな、』と云つた。而も彼等は、『聖靈に感じて』、之を話した、と聖書に錄されてある。又カイザリヤに行つた時にも、再度の警告を受けたのである、即ち神秘なる預言の賜物を有せる、アガボスと云う者は、パウロの帶を取り、之で自分の手足を縛つて見せてまで、此う云つた、

『エルサレムに在る猶太人は、此の通り、此帶の主を縛つて、異邦人の手に渡すでせう。』

是に於てパウロの宿所の主人も、彼に面會に來て居たカイザリヤの弟子等も、一行中のテモテ、ルカ、ソパテル、アパスタルカス、セクンダス、ガイアス、テキカス、トロピマス等と共に、エルサレ

ムに上らない方が可からう、と涙を以て彼に懇求した。然れどパウロは、

『諸君が哭いて、私の心を摧かんとなさるゝは、如何なる御心底に出づるのですか？ 私は主耶蘇の御名のためには、第に縛られることばかりでなく、エルサレムで死る事も、亦私の甘んずる所であります。』

と彼等に答へて、なか〳〵に聽入れなかつた。ルカは此の消息を洩して、此う云つて居る、

『彼は何としても、勸言を容れて吳れなかつたので、一同は、主の御旨の如く成れかしと云つて、口を噤んだ。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

五旬節の日も無事に過ぎて、翌日の事、パウロは、異邦諸教會の代員と共に、數知れぬ人の犧牲の果であり、エルサレムの母教會に對する愛敬の果である、喜捨の物を携へて、長老會の前に立つた。パウロは、兼れ〳〵此の代員等に、神の前には、猶太人もなければ、希臘人もなく、皆基督耶蘇に在

りて一體である、と教へてあつた。又彼は彼等を勵して、律法の下より脫して、自由を得たるを喜べよ、再び奴隸の軛に繫がれてはならないぞ、と語り聽かせてあつたし、進んでは、

『基督耶蘇に在りては、割禮を受るも受ざるも益なく、唯愛に由りて行く所の信仰のみ益あり、』

と明言した事もあつた。夫でも冷眼を以て、異邦の信徒を視るのみか、殆んど之を敵視せんとする、嚴格な戒律主義である、猶太の長老會の中に立つては、此の熱心な弟子等は、何となく心苦しい疑懼の念に襲はれたに相違ない。

代員は一人々々前に出て、ヤコブの足下に、その禮物を置いたが、何れもヤコブが、神々しい白衣着て、四邊の空氣にさへ、壯嚴な聖潔を漂はせて居た風貌に臨して、殆んど仰ぎ見るの勇氣も出なんだ。青年のテモテすら、顏色を失ふて、その手を震はせた。ずらりと居併んだ、嚴然たる長老等の風采を見、又殊に彼の一生ナザレ人で濟ませた、主の兄弟ヤコブの、剛愎で峻嚴な面相を見て、彼は、いざ其心を臆らし、疲くに葬つてあつた恐怖の念を甦らしたのである。然れど彼は愛する信仰